

# 川柳塔

創刊大正十三年三月一日起 每月出版  
通卷八八六号



No. 886

三月号

白川協加盟

# 西尾 菜 7 回忌川柳大会

と き 2001年(平成13年)5月5日(土)  
午前10時開場・午後1時開会

と ころ 八尾グランドホテル  
八尾市八尾木北5丁目101 TEL(0729)94-3591  
専用バス(JR八尾駅-毎時0分・30分)所要時間約15分  
近鉄八尾駅-毎時10分・40分)

## <記念句会>

おはなし 「西尾菜先生を偲ぶ」

兼 題	「羅 漢」	川柳塔社名誉主幹	橋 高 薫 風
	「 菜 」	川柳塔唐津支部	仁 部 四 郎 選
	「一 歩」	川柳塔みちのく	波多野五楽庵選
	「座 る」	時 の 川 柳 社	小松原 爽 介選
	「 恋 」	ふあうすと川柳社	泉 比呂史選
		番傘川柳本社	森 中 恵美子選
事前投句	「あわてる」(3月31日締切)	川 柳 塔 社	河 内 天 笑選

◎各題2句(欠席投句拝辞) 出句締切正午・終了予定午後4時

会 費 2000円(当日いただきます)西尾家から粗供養呈

## <懇親宴>

と き 同 日 午後4時半～午後6時半

と ころ 同 ホテル

会 費 6000円 申込み制(会席料理)

宿 泊 八尾グランドホテル 7500円(朝食付)

◎事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは同封のハガキに明記の上  
3月31日までに本社事務所宛ご送付下さい。

◎懇親宴・宿泊費のご送金(句会費をのぞく)は同封の払込用紙で  
お願い致します。お持ちでない方は本社事務所(06-6629-6914)  
までお申し出下さい。

◎当大会は川柳塔本社5月句会を兼ねますので1人でも多くの方々  
のご参加をお待ちしています。

◎昼食は同ホテル内レストランを各自ご利用下さい。

川 柳 塔 社

# 決まり手

河内 天笑

一月末、NHKの番組に、力士寺尾がゲスト出演をした。初場所を十両二枚目の位置で八勝七敗と勝ち越し、ひと場所専ら返り咲きが確実となった。人気の秘密は、あのきりりとした顔だちや体つきもさることながら、二・五秒に十回という超人的な回転の早い突っ張りにあるだろう。「今日に悔いが残らない練習で、毎日体を鍛えています」と二十八歳の頬を紅潮させるひたむきな姿に拍手を送った。

同じ日の夜、Jリーグ神戸ヴィッセルのキャプテンに就いた三浦知良は、トルシエ監督率いる全日本代表メンバー四十人の中に入れなかった悔しさも見せたものの、「明日に繋がる練習で今日を精一杯燃えるのみ」と今後の抱負を述べたあたり、とてもすがすがしく感じさせてくれた。

寺尾も三浦も格闘技の世界で長期に亘って現役を続けている姿は立派というほかに、「負けても悔しくなくなったら引退し

ます。」と言った寺尾の一言が印象に残る。

二十一世紀の初場所から決まり手が一挙に十二も増えて、八十四手となった。十三日目に関脇若の里が「素首落とし」という決まり手を見せた。鈍て首筋を一撃するよう、その名のついた由縁も頷ける。もう一番は旭鷲山が浜ノ嶋を下した取組で、「送り吊り落とし」という決まり手である。吊り出した相手のまわしを宙で放し、土俵の外へドスンと落とすのである。

旭鷲山不思議な相撲とりつづけ

そのあとは役者にしたい浜ノ嶋

苦味ばしったマスク、精悍できりりと締まった体軀の浜ノ嶋は、土俵では小兵でも役者にしたら脇差が無類に似合いそうだ。

お兄ちゃんこと若乃花に続いて曙も、ついに引退した。強烈な右のおっつけの若乃花、無敵の突きやのどろと大いに土俵を盛り上げてくれたものである。この二横綱をはじめ、ここ一、二年の間に小錦、栃和歌、舞の海、水戸泉、琴錦等々超人気力士が相次いで引退し、初場所の満員御礼もたった五回という寂しさである。個性派力士の台頭が待たれるところだ。

ひと場所で関脇となる琴光喜

と九州場所では三賞を独占した琴光喜の活躍は勇ましかったが、手の内を研究された初場所は散々だった。個性派と言えば、四国明德高校で鍛え上げたモンゴル出身の朝青龍がたのしみだ。日本語も流暢だが、何といってもウルフの再来と言えそうな鋭い目と、気合よし思い切りよしの勝負勘が抜群で、成長株ナンバーワンである。毛むくじやらの和歌山も、長い間十両落ちしていたが、再入幕三場所目のいまは潜ったら負けなしの強さで初場所に敢闘賞を手にした。

うらおもて束子みたいな和歌山

ぶちかますたんびに大至髪が減り

ええとこのほんちみたいな琴ノ若

金星の貯金がうなる安芸島

朝乃若パフォーマンスも技の内

右腕で横綱を張る武蔵丸

このような個性派力士が、もつともつと現われてほしいものである。

五月五日の西尾菜七回忌川柳大会が迫って来て、大相撲ファンの葉先生を偲び相撲特集となりました。因みに私の川柳初入選の句は、榎本聡夢選（S・40・6）

常識もミニスカートに寄り切られ

と相撲の決まり手だったことを思い出します。



座右の句

恋人の膝は檸檬のまるさかな

私の句

躓いた小石は老いの道しるべ

(薫風)

富山 檳榔樹

## 川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 決まり手……………	河内天笑……………(1)
川柳句碑……………	濱野奇童……………(2)
川柳塔(同人吟)……………	河内天笑選……………(4)
自選集……………	……………(51)
水煙抄……………	板尾岳人選……………(58)
秀句鑑賞「同人吟」……………	小林妻子……………(56)
水煙抄……………	長浜澄子……………(91)
川柳の群像 高杉鬼遊……………	東野大八……………(84)
俳風柳多留二四篇研究 27……………	……………(86)
愛染帖……………	波多野五楽庵選……………(88)
茴香の花……………	西出楓楽選……………(92)

## 川柳句碑

濱野奇童

麻生路郎先生ご夫妻の句碑が、先生ご出身の地尾道に建立される。薫風先生のご熱意の実が結ばれたものと思うが、尾道地区の川柳愛好の皆さん方の喜びと併せて、地域の発展が期待される。この上ないおめでたい事で、心からお喜び申し上げます。

弓削に路郎先生の句碑が建立されたのは、昭和二十五年のことであるが、その時先生は「句碑は、作家個人を記念するといっただけでなく、川柳を知らない人達も、何かの機会に句碑を見、句碑に彫られた句を読むことによって、文化の道しるべとなる場合も多いであろう」と、おっしゃっている。

「数年前、田淵様のご案内で、御地の川柳公園にある数多くの句碑を拝観させて頂きました。日本人特有の人情の機微と、軽いユーモアを十七文字で表現している、世界一短い詩は、日本人ならではの繊細な感情の世界を描写して余すところなく、予てより敬服して止みません。」台湾の葉俊宏、陳上林さんお二方からのお便りが突然舞い込んでから親しく交流が続ぎ、現在は投句も頂いている。

「早い」	酒井勇太郎選	(94)
一路集「安い」	板山まみ子選	(94)
「水」	小玉満江選	(95)
初歩教室「壁」	吐田公一	(96)
追悼金井文秋さん	西田柳宏子・川原章久・寺井東雲	(98)
二月本社句会		(100)
各地柳壇(佳句地十選/赤川菊野)		(104)
大阪造幣局桜の通り抜け川柳投句復活	西田柳宏子	(118)
■エッセー 言葉は生きもの	吐田公一	(119)
柳界展望		(121)
三月各地句会案内		(122)
■編集後記	楓葉・朱夏	(124)

座右の句  
私の句

俵せへ二人の星を探そうよ  
娘の友を女と決めていた不覚

堂免路子

(狸村)



久米南町(岡山県)内に、現在二百三十八基の川柳句碑がある。代表的なのは、JR弓削駅前之路郎先生の句碑であるが、公民館の前には、弓削川柳社創始の丸山弓削平さんの睡蓮へ水も揺れてはならぬりのジャンボ句碑がある。泰西寺(川柳寺)の境内には住職長谷川紫光さんの人知れず花壇の隅に咲いて散りの句碑が、訪れる人達に住職のお心を伝えてる。

その他道路脇に、個人の庭にも連立されている。川柳の小径公園の句碑は、町当局のご理解もあって、昭和五十二年、川柳を町民にアピールしようという当時の同人二十六名の句碑建立に始まった。句碑と言えば、一作家を顕彰するために建立されることが多いが、公園の句碑は、川柳を嗜んだ証を子孫に残そうという個人的な意味が強い。その後、町外柳人の希望もあって年々増加、現在二百二十七基、二百三十八人の句碑が並ぶようになった。ひとり久米南町の公園ではなくなってきたのである。過疎の緑の台地で、静かに川柳を呼びかけてくれる。

公園の管理は、川柳社に任されているが、木漏れ日の中で、あるいは北風の吹き抜ける中での作業の合間、缶ビールで喉を潤しながら、川柳を語ることまた楽しい余得である。



河内天笑選

寝屋川市 江口 度

湯豆腐のとってもうまいオリオン座  
えべっさん何時かは笹がなくなろう  
胸に埋もれ火 北風に立ち向かう

サロンパス貼って読んでる哲学書

北風を喜んでる枇杷の花

幸せなドアは何度もノックされ

吹田市 穴 吹 尚 士

褒めてから叱るが良いとやっとなり

仕送りをして音沙汰何もない

ローンかて債権放棄して欲しい

大臣の玉虫色の長い舌

懐が寒いと顔に書いてある

盃の底に浮かんだ医者顔

豊中市 安 藤 寿美子

今世紀初のお通じ快調なり

カレンダーで大きな鶴を一つ折る

ルミナリエよりローソクの灯がいいね

一過性の恋というのもあるんだね

階段はあかんが平地はさっさっさ

冬日和独居老人忙しい

横浜市 菱 田 満 秋

パソコンの腕を競って来る賀状

毒舌をバロメーターにされている

つきあいの良い人になるウーロン茶

馬鹿にしていた年寄りになっている

けちけちと暮してもゴミが出る

玉砕を棒読みにするバスガイド(沖縄)

鳥取県 土 橋 はるお

偶数月は年金に恵まれる

鼻唄が好きな五右衛門風呂に入る

元気です勿論薬のんでいます

借金も大きい方が面白い

因果な事だ犬のウンコを提げている

屋敷の中に活断層があるらしい

和歌山市 古久保 和子

美人の湯少し長めに入らねば

褒め殺しされて真赤なシャツを買っ

てんぶらうどんの海老を信用していない

尻尾には小さな鈴を付けておく

眼帯の女に負けているメイク

冬眠の穴から送っているメール

米子市 政岡 日枝子

いつまでも立ってる大ボケの梯子

隣とは鍵のありかを語らない

深爪が痛むいさみ足してから

疑いもせず安定剤のんでいる

紙絵馬に笑われそうな願いごと

喪中欠礼一月の戸を重くあけ

鳥取県 新家 完司

泥舟の上で紅白歌合戦

塩漬けの株も腐って新世紀

新世紀どこまで沈む日本丸

昨日の蟹の臭いが残る指

二十一世紀も蟹は横に這う

初麻雀一人負けして顔洗う

西宮市 奥田 みつ子

いつまでの命ほうれん草洗う

忘れたい遮二無二動く他はなし

憂鬱の顔には女神ほほえまぬ

白牡丹散りきわもまた艶やかな

雛飾るやさしさ少しとり戻す

おお遣伝子 三代続く低い鼻

米子市 鷲見 正子

朝刊が雪の匂いをつれて来る

夫婦だな同じ匂いを持っている

帰省する背に付いて行くお月さま

水仙を活けて孤独を昇華する

満月にぐつすり眠る悪いヤツ

懐に辞表を入れてから強し

枚方市 宮川 珠笑

仏弟子で神の氏子でクリスマスキャン

ゆつくりしときと掃除始める

タクシーに乗ったら後をバスが追う

改札で団体客は数にされ

すみません今日は歯痛で笑えない

のぞみの車窓に遅れない月

堺市 志田 千代

結婚は一度つきりで終りそう

時たまの留守いい距離を保ってる

ほめている母の笑顔を忘れない

男手が雪平の粥焦がしても

熟睡はできかねました五つ星

好きな人一人おります生きられる

弘前市 高橋 岳水

老いてなお生きる下絵に朱を流す

淋しくて人は焚火の輪に入る

遠い絵になる石蹴りも竹馬も

難聴の耳底に棲む神の声

小走りの癖が治らぬ足の裏

フグ鍋を囲み絆を太らせる

黒石市 相馬 一花

最初からひねくれているボールペン

看護婦にお尻を見せる破目になり

リハビリの母へ心を鬼にする

コンビニに負けて悔しい炊飯器

腹八分唱えおやつは欠かさない

人妻と握手するため行くダンス

砂川市 大橋 政良

振り向くと目から転がり落ちた嘘

身を入れてまだ聞いてない介護法

回り道馬鹿の真似にもくたびれる

うまいから野菜に虫がつくといい

囑託という老兵の席がある

絵手紙におふくろの描く芋かぼちゃ

横浜市 清水 潮華

嫌なこと嫌だと言えて仲が良い

割り切って見ればどうでも良い話

原因は口だと思ふ四面楚歌

ふかぶかと営業用のお辞儀する

親のない子もいる授業参観日

うたたねの至福終点まで続き

横浜市 菊地 政勝

パソコンに嵌った妻に家事抜かれ

信じきる妻に嘘など言えませぬ

六法に恋の一文字見当らぬ

交番の隣の家も鍵をかけ

趣味多くあれもこれもと生かじり

骨董屋 愛想良くて疑われ

川崎市 和泉 あかり

抱きよせる猫から貰う静電気

今日からは米を研ぐのも一人分

風邪などと仲良くしてるひとりぼち

寡婦というおんなの時間動きだす

忘れもの多くてスペアキー増やす

冗談で投げると石はよく当たる

箕面市 岩津 ようじ

物好きが首相演説聞いている

元総理の最後看取った紙おむつ

新世紀あな恐ろしや僕傘寿

まだ痛む歯があるのかと羨まれ

立て板に水 訥弁に押されてる

引き込み線に入ったような定年後

箕面市 椎江清芳

雲海を歩いてみたい空の旅  
友情を結ぶきれいな血を貰う

歳を書く欄で止まったボールペン

誰にでも書ける平和の字の重み

火の山になれよと父の肩車

金の舞う夢から覚めてはつとずる

大阪市 西出楓楽

りんご丸かじり自分を試すため

風花す亡夫どうしているのやら

フォアボールばかりを投げている冬日

送り仮名たがえたほどの行き違い

一張羅原価償却出来ぬまま

軽口をたたくと春が加速する

吹田市 山本希久子

夢追うて忘れてしまう現在地

未練ごころ見せて山茶花散りました

やさしさよ芯まで温い春炬燵

幸運とすれ違ったりエレベーター

ふところの風としばらく無になろう

川は流れて自然消滅した恋よ

茨木市 堀良江

二千年 目まぐるしさも二ヶ月

お守りは携帯電話ストラップ

風上げも追羽根もみな遠いこと

持ち越しの風邪に籠った三ヶ日

床飾り母好まざる巳の巡る

虫食いのそれが値打ちと蕪贈る

寝屋川市 森

新世紀へ目から鱗を落とす蛇

スイミングばかばか闇の街抜ける

二死満塁 仲間意識が沸騰する

PCB水に流して還ってくる

ほんのりと色めき染める酔芙蓉

子供部屋はめてはめてと貼ってある

寝屋川市 籠島恵子

腹式呼吸に切りかえました新世紀

みぞれから雪になってた帰り道

確かめておかぬときと悔いる脈

笑いつづけてさざんかが散ってゆく

アラームにせかされながら台所

二人三脚いつか私がリードする

枚方市 海老池

ラストなど思いたくないシクラメン

目が覚める今日もやるぞといういのち

同じ会費払っていつも隅の席

妻は旅今日もいびつな目玉焼き

白雲もゆつくり遊ぶ心字池

モナリザの笑みに似ている悪巧み

洋

茜

東大阪市 北村賢子

同居して腹の底から笑ろてへん  
厚底で子を抱いているケシカラン  
なにも無い部屋でもふたりならぬくい  
家の灯が近づく走りだすころ  
この空の続く彼方に母が居る  
還暦の春みなおそうマイウエイ

八尾市 村上ミツ子

何もせんでも正月はやってきた  
何事もプラス志向で新世紀  
冬眠のへびにノックをしてやろう  
ぼちぼちと出来ることからやっていく  
ウインクが福の神には通じない  
寸志が見栄もちよっぴり入れてある

藤井寺市 高田美代子

自画像に氷柱がさがる寒の入り  
手囲いの中で育てる小さな火  
雨漏りがして恋の炎が消えてゆく  
ハトが出るだろうか天皇の帽子  
内ポケットにあるのはささやかな殺意  
春の構図に種をいっばい蒔いておく

藤井寺市 鴨谷瑠美子

寶石は黄昏に似た色を見せ  
肩幅の広さに未練ある恋よ  
どん尻を歩く楽しさ知るまいが

水仙の香り拒んで通り過ぎ  
海外で踊り狂ってみるもよし  
口笛を聞き漏らしては眠る蛇

羽曳野市 三好専平

黒人の難民の子の眸澄み  
共生と対話の世紀願う絵馬  
排気ガス人のところに穴をあけ  
上の人まづしい者の味方せず  
バーコード貼られた寿司をかうてくる  
スピードが早くてついてゆけません

羽曳野市 安芸田泰子

乾杯で済ます世代の屠蘇儀式  
兎も角も無事息災で新世紀  
旅行する孫に預かるベット達  
着ぶくれて動いたんびにどっこいしょ  
口下手をカバーしているいい笑顔  
鬼瓦の重さを知らぬ三代目

大阪市 津守柳伸

偶然のチャンス便乗するハワイ  
鳩に餌やれば罰金五〇〇ドル  
マンガの試食で珊瑚買わされる  
歓迎のレイ捨てられず髪飾り  
ワイキキのピキニ見せたいお元日  
元日が二日続いた屠蘇の味

高石市 浅野房子

雪見酒 花見酒とて事欠かぬ

ワンテンポ遅れて笑い 笑われる

もぅいいよ自分のために生きなはれ

屯して赤い気炎をあげている

満を持し挑戦したが落ちこぼれ

自意識過剰誰もあなたを見ていない

富田林市

藤田泰子

長いものに巻かれてみよう肌寒い

娘の気持ましてや孫の心理など

手の中を見せてしまった悔いがある

一度しか会ってないのに覚えてる

月光に守られ熟睡しています

六十歳の仕上げをしよう六十九

河内長野市

加島由一

新世紀ゆめ詩こいの福袋

海に生き海を守っているクジラ

自給自足 母の鉢には錆がない

成人式君の若さが問われてる

もう一度妻とピンポンしてみたい

なんとなく浮き浮き気分庭に雪

岸和田市

高須賀金太

パブル期は花形だったホームレス

ふところの深さは森の深さだな

どうしようシルバースhirt空いている

樹の下にきつと宝が埋めてある

I Tに僕は取り残されそうだ

パイパスに人間らしさ奪われる

岸和田市

原 さよ子

わだかまり捨てて心を軽くする

本当の味方は痛いことも言う

わが家では丸と決めてる雑煮餅

控え目に物言う人が目に残り

蛇の皮入れても財布やせのまま

好きなこと言える仲間と湯の煙

和歌山市

福本英子

大それた欲ありません戎さま

来ぬ人を待ってお重の独り言

薄味に慣らされ世紀跨ぐ新春

茶飯事になった釘のかけ違い

本当の怖さを知った水面下

冠木門くぐれば故里の掘り炬燵

和歌山市

牛尾緑良

還暦へしつかり打った句読点

バリアフリーまず父のこと母のこと

一列に並んで待った新世紀

幸せを覗きに届く年賀状

正直も良いけど少し生きづらい

転んでもいいさもう一度起きる

和歌山市 青枝鉄治

物言わぬ社のロボットが肩叩く  
あとで塩撒いたと知らぬ寄付集め  
酒飲みの友は本音も酌いでくれ  
少しならいと主治医もいける口  
古寺巡り嫁への愚痴に花が咲き  
匿名にすると投書はよく喋り

海南市 三宅保州

救急車乗ったら遅いなと思う  
聞けなかったこと医学書で確かめる  
弱肉強食だったら生きられぬ私  
仕事の鬼と言われて走るほかはない  
分別収集ストレス捨てる箱がない  
物足りぬ無記名というアンケート

西宮市 西口いむゑ

何げない嘘と深みにはまってる  
気まずさへしゃれた一言みつからぬ  
おしゃべりもおいしいものの一つなり  
熱爛とふわり浮世の外にいる  
めい想の扉を開く午後の椅子  
合掌をしている指に嘘はない

宝塚市 嵯峨根保子

年賀状みたら話がしたくなり  
最新型が鍼灸院に止めてある  
あっち向いてほい母の願いと重ならぬ

ときめきを漢字にすると初になる  
うちの犬灘高ぐらいなら受かる  
しっかりと握るいのちもお財布も

西宮市 牧淵富喜子

神宿る松を飾って締め括る  
元日が過ぎると疲れどつと出る  
松の内過ぎてそろそろ俗になり  
みぞれ降る景色の中の七日粥  
パンジーと黙約がある冬さなか  
巡り来る一・一七と住み慣れる

西宮市 菊池トミエ

是非もなく介護保険が引いてある  
大根だき今年の無事を感じて  
顔見世はおしゃれを見せに行くところ  
大掃除心のちりも払い出す  
今も良い昔も恋し老いの春  
近すぎて真の情けに気付かない

鳥取市 岸本宏章

新しい暦へ欲を盛りすぎる  
初売りの福袋だけ元気いい  
神さまも耳栓がいる初詣で  
しっかりと甘いはなしの裏を読む  
ただ酒にたっぷり自慢聞かされる  
耳貸さぬ人と話してくだびれる

蛇行しつつ責任感が走り抜く

責任も君たちのもの二十歳

新しい風に馴染めず名刺折る

体温のある言葉には嘘がない

人間よりも草木のほうが耐えている

ロボットも不老不死ではないようだ

春一番夢の構図を書き替える

真白い帆上げて漕ぎ出す新世紀

呆け止めに酒やたばこへ離縁状

女房がタイムトンネルくぐらせる

今更と思う聖書へ眼が炎える

新世紀老眼鏡を掛け替える

招かれぬ席で冷汗かいて居る

返す金そろえて惜しくなって来る

大変だ別れた妻が逢いに来る

暗がり番犬いきなり吠えて来る

我が家にも灯がついて居るほっとする

ずる休み合ってはならぬ人に逢い

草も木も人も大事に新世紀

戦場と化してしまふや成人式

蛇行して川はきれいな水をくれ

鳥取市 夏目健一

鳥取市 西村黙光

鳥取市 前田一枝

鳥取県 谷口次男

一回の命をくれた神に多謝

雪国にキチンと雪が降り安堵

コーヒーを一杯飲む間の小宇宙

綺麗になれきれいになれと鏡拭く

新世紀穢れを祓う雪が降る

相槌は打つが本音はまだ出さぬ

携帯が鳴っているのは台所

勝手口いま珈琲を飲む時間

山茶花が燃える男の恋ごころ

落葉踏む山は野鳥の音楽だ

ポケットのメモと彷徨う旅の街

道すがら木の実つえばむ鳥となる

自画像を描いてわたしも芸術家

ゆらゆらと流れ藻メダカ抱いて笑む

まだ恋のむかしが残る聴診器

まさかの用意に縄梯子を吊す

地震が追い討ち老化のマイホーム

一枚のカード思いもかけぬ落とし穴

飲み込んだ言葉に嘘はなかったか

塀越えた隣のバラに気を遣う

鳥取県 土橋睦子

米子市 林瑞枝

米子市 光井玲子

出雲市 岸 桂子

ひと呼吸置く私の処世術

たくさんの人に返してゆく情け

日の丸の旗もわたしも古くなる

もう二度と白には戻れないページ

少子化にでんでん太鼓売れ残る

友達と堀作ったり破いたり

香川県 川崎 ひかり

たし算も引き算もない子への愛

権力を持つと人間鬼になる

誰だって笑顔が一番美しい

お多福がどっしり座っている平和

なにもかもみんなバックで売っている

弱い者いじめが好きで弱い人

松山市 宮尾 みのり

朴訥な言葉に油断してしまい

一線を引く親しさで長続き

水を買う瑞穂の国になり果てる

何でそうシャカリキになるペンの先

苦労した数だけ知った回り道

自分史に男友だちいてくれる

愛媛県 中居 善信

地から湧く水がとっても温ったかい

大根の花が花瓶に挿してある

背の届くところで安心して泳ぐ

愚痴ひとつ言わぬ強さを持って余す

死に場所を何度探した事だろう

伸びすぎる枝へ容赦をせぬ事よ

唐津市 市丸 晴翠

虹の橋渡った雇用均等法

平凡の二字噛みしめる三宅島

脳の皺減り増えて行く顔の皺

里の義姉母の仕草を生き写し

日本語に慣れて団地の輪に入る

棚ざらし相合傘のポトルの名

唐津市 山口 高明

正月が来ると言うのに焼け出され

一億年のタイムトンネル鐘乳洞

春は其処枝のつぼみに教えられ

猛禽のごとく飛翔のコンコルド

愛情が過ぎてもおとこうるさがり

死ぬ事はなかったなどと他人さま

熊本市 永田 俊子

パソコンにはげむのを猫が見ている

活断層の上でたのしむいい湯だな

試験問題洩れてくすと笑う絵馬

口も手も元気な女の自由席

一日を大事に今日の風情しむ

それぞれの歩幅で進み俱会一処

弘前市 今 愁 女

陸奥湾から岩木嶺眺め湯治宿  
夕映えが光背となる湾の島  
雪舟も斯くや墨絵の冬景色  
寒い冬つがい鴛鴦よく眠る  
養生訓そのまま生きて世は楽し

弘前市 須 郷 井 蛙

無農薬安全地帯と虫の声  
婿さんをつれて来ました趣味の会  
竣工式遺影の椅子に白い花  
昼だって男飲みたい時がある  
京の味津軽の舌になじめない

弘前市 蒔 苗 果 林

カマクラの宇宙船から世紀越え  
植えた樹に雅号をつけて会いに行く  
雪掻いた脚腰風呂でのろけあい  
俎板よちぐはぐな音誇るべし  
解ける雪無言濁れば怖い怒濤

弘前市 福 士 慕 情

神妙な顔で解らぬ経を聞く  
ワインコルク男の力試される  
良い喉を聞かせて金を払わされ  
テレビから真っ直ぐ俺を見る女優  
食べ終えて鴉スキップしているよ

弘前市 宮 崎 ヒサ子

二人ぼっちの家が帰省でさんざめく  
日記の隅に暗号一つ鉤かっこ  
夫つまいく店へジョッキ一杯割り込みに  
吹雪く日の芋屋のピーピ雪を這う  
居心地が悪いか調むシクラメン

弘前市 櫻 庭 順 風

ものぐさが祖父の足跡たぐり寄せ  
地方紙に祖父の喜怒哀楽がある  
お手伝い二人を雇うふくよかさ  
骨折にじっと耐えてる脂汗  
脂汗に子供を賭ける蝦夷の果て

弘前市 小 寺 花 峯

嘘をつく影が揺れてる不整脈  
昭和史に隠れた僕の激動期  
定年を早めて首輪取り外す  
風を切る男に惚れる寒椿  
今日もまた頑固に生きている素足

弘前市 一 戸 ツ ネ

眼鏡越しジロリと覗く古河童  
腹の底そこまで見抜くダルマの眼  
横ぐるま押しした親父の息がきれ  
鼻曲り鮭の一生極楽へ  
水平線丸い地球の線になる

弘前市 岡本花匠

湯浴みの児肌ほめそやし母の愛

宿業をなげく風にも慈悲ひかる

夢を縫い母はきずなの蝶糸

雪搔きに命光らせ有為に生き

幸を追い疑心めらめら黄砂雪

黒石市 千葉風樹

福笑いやがて寂しい父になる

算盤がまたはじかれる交通死

砂時計サラサラ溜まる廃棄物

鱒の目に言の葉荒ぶ雪荒ぶ

真夜中の闇に描いて雪は華

十和田市 阿部進

元社長だったんですホームレス

ほんまです歌は心のビタミン剤

自信ある子が高々と手をあげる

不況風なじみの老舗幕閉じる

価値観の違う夫婦で仲が良い

青森県 西谷大吾

地吹雪に真向かう村の地蔵さま

世去れ節 津軽の雪は地を走る

津軽地吹雪のたうち狂う天も地も

色褪せた影がとぼとぼ雪を踏む

かうかうと白鳥鳴けば雪が降る

富山市 舟渡杏花

疑うのはよそう目刺しを裏返す

亡父の蔵書 荒縄に括られて

小判に変わる木の葉一枚ポケットに

妻に一步ゆずって潜る甘のれん

物わかりよすぎる財布すつからかん

富山市 酒井輝

無茶をしたバカの救助に張る命

幸運も不運も星のせいにする

若い日の思い出を踏む石だたみ

駅伝のリタイア恥じぬ男泣き

金だけを幸せとせず母老いる

富山市 島ひかる

年ごとにスコップの雪重くなり

幸せに気付かず空気吸っている

小川からきこえる四季のわらべ唄

人間の驕りを笑う土石流

今日も無事至福に浸る終い風呂

富山県 増田紗弓

二世紀をめたく生きている卒寿

あいづちに笑い足そうか足すまいか

トンネルもやがては抜ける闇に耐え

残照のふたりへ雪のしんと降り

話込むふたりへつらら解ける音

大宮市 八田 敏

千年の歴史のページめくる朝  
いくさなき世紀を祈る初詣で  
同病の友また出来て賀状ふえ  
検査とて余分ない血を抜き取られ  
娘に近く住んで子離れできぬ親

横浜市 小野 句多留

貰うもの貰えば後ろ振り向かず  
貯金箱入れるたんびに数えてる  
紅白の始めと終りだけは見る  
子と同じトーンで叱る女達  
元旦の鶴一声で締る膳

横浜市 山下省子

わたしより年は上だが派手着てる  
やさしさを繋いでいこう新世紀  
母さんと同じ音して米を研ぐ  
ありがとうと言うより言われる方がよい  
悪口になると気の合う姉妹

東京都 後藤 早智

達人の読めぬ賀状にある値打  
パソコンに押されためいきつく賀状  
Eメール人恋しきは埋まらない  
良いことがあったね他は忘れよう  
ヤキイモの声渡りくる寒の夜

東京都 播本 充子

貸すほどの名前じゃないが発起人  
不確かな眩しき婚約の指輪  
掴みたい何かへ誰ともつるまない  
しばらくは優しい鬼に成り済ます  
応援にまわると丸くなる心

町田市 竹内 紫鏡

聴きくらべたい金の鈴銀の鈴  
電球のタングステンに百年史  
カーボンの軽さを傘の骨で知り  
噴煙へ技師も学者も祈るのみ  
戦死学徒の三倍は生きちやんと食べ

富士宮市 渥美 弧秀

二病息災 富士を頼りの老夫婦  
途中下車無人駅での草花展  
あと五分駅前で呑むコップ酒  
分刻み変わる富士山チャージング  
孫許す息子の顔に光るもの

愛知県 早川 盛夫

手づくりの凧がなかなか揚がらない  
千円を妻が使うと生きてくる  
ぶきつちよな手で折り鶴が一つ出来  
聞いてきた話へちよつとシオコシヨウ  
風に乗る話にろくなものはない

可児市 板山 まみ子

印刷の松飾りでも年は明け

元旦もウォーキングで出合う顔

黒豆と雑煮があれば全てよし

年毎に簡単になるお正月

小雪なら歓迎される街の雪

京都市 小西 未佐子

天女打つ手の鳴る方へ逝き給う(高杉鬼遊先生の計)

木屋町を行けば絵になる人に逢う

ワープロに何やっていると白い目で

鮎寿司だキャビアフォアグラ席を立て

きつい事言うてごめんと娘が帰り

京都市 高島 啓子

風花や恩師の好きな赤海鼠(哀悼鬼遊先生)

お元気でなんて大人になった甥

毎日を命びろいで生きている

生める時生めば良かったもうひとり

新型の万華鏡かも新世紀

京都市 都倉 求芽

伝統か脱皮か歴史は結果論

未来図に後継ぐひとの不確かさ

銀行がブラックホールに見えてくる

大掃除開けた窓から風邪をひき

しっかりせい生年月日が尻叩く

京都市 山海 友熙

梅の実がわたしに語る母のこと

長生きの秘訣を聞きに行く古梅

母に似た人に出合った梅の街

梅の木を撫でると春がすぐに来る

紫蘇買いに出かけることを梅に告げ

京都府 稲葉 冬葉

価値観の違いで喧嘩にもならず

衣食住足りても不服装言っている

小袋に菜いろいろ持ち歩く

外孫の噂うれしい古希の膳

はや古希かやつと古希かと花暦

奈良市 天正 千梢

感動がふつつ捨てたものでなし

美女に化けている狐かも知れん

折目正しく面会をことわられ

奥の院歴史の中へ歩をはこぶ

日本人の終着駅か高野みち

奈良市 米田 恭昌

嬉しいね手書き賀状の息遣い

はねっかえりの毬のひとつをもてあます

しようむない沽券じやまする二度の職

石橋をまだ叩いてるあかんたれ

オーイお茶なんて言えないマスオさん

檀原市 居谷 真理子

愛人が移した風邪のしつっこさ  
怒っても酔うても老いかにじみ出る

寒風を愛した花が赤く咲く

雪しんしん胸の太鼓を低く打つ

罪なんぞ山ほど持っている五十路

大和郡山市 坊農 柳弘

細雪春魁の戻り寒

妻六十路泥んこエステまだ女

菜の花漬け春先取りの母の壺

ひな壇を見守る母の姫だるま

この恋は終わりにしましよ火消し壺

箕面市 出口 セツ子

良心に恥じない自負のある暮らし

南天も私も燃える雪の町

ヒトゲノム命の神秘消してゆく

I T時代心が忘れられてくる

言葉出ず脳の老化を知らされる

高槻市 江原 秀夫

小半時待たされ十分そばの味

取りあえずビールゆっくりお品がき

百菜の長は楽しく水いらす

マスコミの演出デフレの怖い影

心から笑えぬままに新世紀

高槻市 傍島 克治

末席に爪を隠した鷹がいる

うちの子に限ってと言う母の視野

義理チョコに紛れ込んでた淡き恋

遅咲きの息子にやっとなくらサク

手加減を知らず五角と思ひ込み

高槻市 井上 照子

若い肌とりもどしたい入浴剤

百八つ煩惱いくつ残してる

厳格な父が笑顔で夢に来る

新世紀生きる喜び句に注ごう

蛇さまを床に飾って無事祈る

豊中市 吉田 あずき

新世紀昨日の道をまた歩く

出直せば何歳とても新人だ

元本もないのに利殖法を聞く

聞き役に徹し痛みを貰ってる

どの色も白を混ぜるとみなやさし

豊中市 岸田 知香子

神の加護旧友に会う初詣で

年明けの誕生喜寿になりました

新世紀我が家三人挑む春

口コミの手仕事喜寿の若返り

信用をもらい張り切る喜寿の坂

豊中市 田中正坊

今年こそがんばらないで生きて行く

風邪ひくな転ぶな無理をするなかれ

喜寿の坂生きるヒントを読んでいる

パソコンにいてもう痩せた腕撫でる

カニシヤボのつぼみに春の音を聞く

豊中市 井上直次

まだ八十さあこれからと歳の豆

散歩にも千円一枚忘れずに

もの見ればすぐに値段を知りたがり

七草粥昭和天皇偲ぶ朝

本年もどうぞよろしく初受診

豊中市 湯浅馬洗

春の芽に命つたえて枯葉落ち

蕾には春一番で目覚めさせ

病んだ身をいやす緑の庭仕事

自分史のひとり自慢は誉め手なし

新世紀すべて一から積み上げる

吹田市 瀬戸まさよ

河豚好む一家にでんと一斗樽

歓待に予算超過のふぐ料理

赤ちゃんに言葉かけせぬ母が増え

ケータイは嫌いそれでも超便利

老いた鹿わたしも仲間握手する

吹田市 石原靖巳

灯が点くと人が湧き出るルミナリエ

一様に世紀が躍る年賀状

初詣で仁王の口も綻びる

低姿勢なにか魂胆あるらしい

一筆箋さらりと急所突いてくる

吹田市 古川喜美子

何となく落着く砂糖壺満たし

差しあげた臓器新世紀を迎え

イースト菌うたがいてもなくふくれ出す

木守柿ひとつに夢を遊ばせる

地価下落みの虫宙に顔を出し

茨木市 島元ふみ

坂の町運転知らぬ老い籠る

人様の力を借りて老いを生き

キムタクをようやく知った老夫婦

みだしなみ程度やつしてほしい夫

やつしても優先席をゆずられる

茨木市 藤井正雄

京野菜春をちらちら地下売場

歩こう会いちご買ってる田圃道

似た過去で話が弾み飲み直し

屋上で妻の買い物待つ煙草

雲行きを見つめ本音をしまい込む

寝屋川市 岸野 あやめ

叱る人居ない夜更かし朝寝坊

無理に無理重ねて何処へ行く国ぞ

インターネット何が嘘やらほんとやら

誕生日わが身ねぎらうバラの束

冷飯を粥にのばしてひとり病む

寝屋川市 堀江 光子

無礼講にも盃の順があり

楽園のように老人ホーム書き

繁華街店の名前がまた変り

SLを舐めるがように磨いてる

二〇〇〇年最後のコーヒーを淹れる

寝屋川市 坂上 高栄

点滴が命縮める不安あり

初雪に寒さいとわぬ我が鼓動

しきたりのだんだんすたれ味気なし

除夜の鐘二十世紀の名残り撞く

目出度さを梅一輪に祝われる

寝屋川市 高田 博泉

星座から無垢な光が届けられ

下心ないけどついてゆく梯子

継ぎ接ぎの身体を口が支えてる

命令に従う方が気楽なり

儲け口へ眼鏡かけたりはずしたり

寝屋川市 富山 ルイ子

時は金なりのんびりと日向ぼこ

名前もう覚えられなくなり久し

化粧する女 無心の目がきれい

笑い声絶えぬ我が家に居て楽し

したいこと山程あつて困る古稀

寝屋川市 平松 かすみ

兄上ともうこれっきりの握手かも

モニターが0を示して安らかに

お骨上げそれはみごとなのど仏

芦田伸介そっくりさんの遺影

今日からは賢嶽義宏居士となり

枚方市 栗林 光夫

浄土への地図はどこにも売ってない

金釘がいい箸紙の家族の名

だからだとただだからだと三ヶ日

手が二本足も二本の有難さ

掛け捨てが幸せ介護保険料

枚方市 鈴木 政子

今着いたと仙台の孫弾む声

新幹線右席で都庁仰ぎ見る

夜行銀河ゆっくり富士の姿見え

寝正月許さぬ私の割烹着

礼節のない成人に未来なし

大変だ成人式が荒れている

病院でもらった風邪が治らない

無防備に点滴受けているベッド

親しまれる駐在さんを知っている

自分だけの力でできるものはない

頂上からは向こうの頂上しか見えぬ

青テントこれは未完の人生か

倦怠期付加価値求められる愛

お茶漬けを食べると自分取り戻す

そろそろと納得をして老いて行く

枚方市 前 たもつ

枚方市 寺 川 弘 一

大東市 児 玉 蛙

聞き流すことも情けと聞いている

生命線私の余命知ってるの

泣き虫と思わなかった泣いている

むなしさが残っただけの一人旅

終章を考えながらページ繰る

四条畷市 吉 岡 修

はや大臣意外でもない七光り

スッポンの血を飲んだこと黙っとく

寄り添えば母の歩幅の変りよう

ドラフトの陰にベテランテスト生

永田町神の声でも聞いてない

あの人もお元氣らしい年賀状

正月も休むことない万歩計

波に乗り賽銭投げた初詣で

足りぬなら国債刷れと神の声

所得税納めた頃をなつかしむ

足して二で割って結んだ夫婦の和

底辺のくらしにもある春の彩

性懲りもなく痩せ馬に鞭をうつ

一言が多くて掘った深い溝

退屈の口から愚痴がほとばしる

交野市 森 本 弘 風

大阪市 井 上 白 峰

大阪市 川 久 保 睦 子

ジャズピアノ遠い昔に置いた耳

カシオペアが掬うわたくしの吐息

曇天にびっしり心の星描く

冬枯れの枝おみくじの花が咲く

福ホクロ左乳房にあつて幸

大阪市 津 村 志 華 子

繕いの嘘は神から裁かれる

欲一つまだしっかりと持つ余生

ひとり居のわたしに恋する紅つばき

食べ放題の蟹に釣られてバスツアー

へそくりがまんまと化けたランドセル

雪が降る去年の嘘を消すように  
氏神へは人の流れに身を委ね  
風邪引いて前立腺が狂い出す  
湯は無いが黒門町で蟹を買う  
講堂で国歌唱う子唱わぬ子

大阪市 川原章久

窓際へそつと注がれる朝のお茶  
節分の鬼より怖い妻がいる  
ハイハイと軽い返事で重い尻  
セーターを編む手に愛の灯が点る  
風雪に耐えた女房の持つ自信

大阪市 安達はじめ

フラダンス星降る浜で踊りたや  
松阪の霜降る肉をたべすぎる  
遠来の歴史未来の知恵貰う  
有頂天恩師居るのを忘れてる  
北欧の鮭北海の顔してる

大阪市 寺井東雲

そのタフさ神様くれた贈り物  
伝説の箱根駅伝またドラマ  
この国の未来まだまだ捨てられぬ  
血縁の絆だんだん消えて行く  
紅さして雄弁になる政治好き

大阪市 小糸昭子

沈む陽を追ってゆっくり歩く道  
本筋を外れた話に花が咲き  
心まで冷える日こたつに勞られ  
待つことに慣れ丁寧な爪を切る  
小さな春が覗く蕾の沈丁花

大阪市 本間満津子

咳ひとつ寂しき除夜の孤独感  
残り火に恋風ふれて甦る  
売れに売れる何でも彼でも告白本  
うそ半分それでも憎めん人気者  
新世紀はポップジャンプIT化

大阪市 田中節子

讀ひとつ掛けて新世紀を祝う  
初春に憲法前文歌で聞く  
雨の雫落ちる真際が美しい  
量子力学チンプンカンピンに挑む  
誕生日親に感謝の日と決める

大阪市 川端一步

初暦今年の運はいいらしい  
絵の中の小犬になつて眠ります  
よい目覚めだれもこないが化粧する  
たこやきをほおばる口を撮られたり  
戎さんすめば広告おひなさま

大阪市 辻川慶子

初暦今年の運はいいらしい  
絵の中の小犬になつて眠ります  
よい目覚めだれもこないが化粧する  
たこやきをほおばる口を撮られたり  
戎さんすめば広告おひなさま

大阪市 板東倫子

新成人が七草粥って何ですか  
隣席の咳へのど飴そつと出す  
無愛想な家は猫まで自閉症  
可愛いがギャングのような孫が去ぬ  
行革の掛け声ぜい肉つけたまま

大阪市 神夏磯典子

脱皮して蛇はみんなに好かれたい  
辛いこと続きはしない花便り  
音立てて階段上る良い知らせ  
球根は応えてくれた黄水仙  
年輪は黙っていても偉大なり

大阪市 小林周信

初春へ家族揃うた窓明かり  
善人の振りを続けた肩の凝り  
聞き上手忘れ上手でいい仲間  
胸襟を開くと変わる酒の味  
窓際に妻座らせてフルムーン

大阪市 奥村五月

エリートの子介護に寄り付かぬ  
定年後オーイ煙草と怒鳴れない  
スパイスの役は御免と妻が去る  
過疎の村正月だけの三世代  
酒嫌う妻が酌するお正月

大阪市 町田達子

星座の話じっくりと聞く掘り炬燵  
凍て空が少し悲しく見える冷え  
冷え込みが厳しいやっぱり戎さん  
ごろあわせの賽銭もあり新世紀  
おもしろい話二千一円のお年玉

大阪市 鈴木トヨ子

プレミアで余生悠悠生きている  
主導権嫁にゆずってワツハツハ  
戎さん賽銭とられないように  
ぶたれるよりひとときわ恐い父の声  
母終えてやっとな余生が楽しめる

大阪市 鶴田遠野

あといくつ母と聞けるか除夜の鐘  
まだ来ない安否気になる年賀状  
その日まで寡黙になった休耕田  
履歴書に抹消したい行が増え  
出張の子定を待っている逢瀬

大阪市 杉澤汀

朝きめた半分もせずたそがれる  
何回も眼鏡をぬぐう特攻記  
散りそびれ酒と軍歌の惚け桜  
卑怯にもじわじわ効かす冷やの酒  
ホルトとナットしっかり締めて五十年

大阪市 渡部 さと美

三蔵法師の跡を慕っている壁画

元氣度を下げては歩幅ととのえる

裸木の元氣なダンス風に見せ

うたた寝へ音を落して切るテレビ

がくんと鼻折られてやっとな姿勢

大阪市 大塚 節子

今年から一人で据える雛の膳

祖母の忌や精進料理いろごはん

貯まらへん原因吾にあるやろに

米朝の枕噺は喜寿のボケ

おぼろ夜の下弦の月よ満つを待つ

堺市 近藤 豊子

ひだまりにブランコのあるかえりみち

水かれて冬のプールのあつけらかん

集団登校のびてちぢんですすみます

傘さす子ささない子きて雨あがる

朝ごとのハンカチ守り札の白

堺市 桑原 道夫

二十一世紀もゴキブリが飛ぶまっすぐに

空井戸の底に似顔絵捨ててある

泳ぎ疲れた父のアイスクリームかな

万華鏡煙を吐けば只の筒

王様と子どもに真の真の闇

堺市 山本 半銭

一行に疎遠を詫びて賀状書く

月の暈わたしも冬に堪えている

カレンダーに実らなかつた夢の染み

喧騒の街を逃れてアペマリヤ

誕生日水仙の香も去年今年

堺市 柿花 紀美女

来年へ満開桜ちりぬるを

犬の方が家族と思っているらしい

旅の空へ身の錆みん捨てる

母さんの追伸本音吐いている

文明が進みなくなる人間味

和泉市 岡井 やすお

ITへ総理大臣ラッパ吹く

先取りのパソコン塾に閑古鳥

逆指名したが卒業できるかな

相撲には卒業無縁いらっしやい

そのうちに長生き税がやってくる

東大阪市 安永 春

寒空に見守り給う月高し

五時起床お伊勢参りの清し朝

雑煮なら七個ペロリと五年生

ふたりだけでのんびり過す三ヶ日

冬空に又兵衛桜待ちこがれ

東大阪市 谷 口 義

むつかしい話はしない昼の酒  
春うらら今遊ばんといつ遊ぶ

谷口家の男は説明が長い

店長は責任をとるためにいる

二〇〇〇年最後の雲に乗りし師よ(鬼遊先生追悼)

八尾市 井 尻 民

平凡がいいと分った初詣で

背伸びせず流れるままに輪に和む

とんぼりのカニが来い来い呼んで

句作りに猫も静かに毛づくろい

不況風どこまで続くぬかるみぞ

八尾市 宮 崎 シマ子

流し雛海のかなたは浄土かも

雨になり隣も静か老夫婦

友が来たらしいポストに置き手紙

夢いくつ咲いては消える冬椿

開口一番夫の悪口から始め

八尾市 吉 村 一 風

年末年始妻にてきばき使われる

これでいいのか日倅せな酒が飲め

犬小屋に毛布を敷いている孫よ

孫達と遊びつかれて酒にする

首輪ない余生の筈がままならず

八尾市 高 杉 千 歩

生涯に返しきれない恩を享け

山積みの蔵書へ打開策がない

容赦なく刻は流れる忘れ箱

錠剤を並べひとり生き延びる

春疾風ひとり芝居の荷が重い

八尾市 神 原 まさと

世紀末暇でんなあと床屋さん

母の味恋し二万のおせちより

えべっさん何とかして言いに行く

二歳児の独り遊びに父のまね

演奏会シンバル一回孫の役

八尾市 村 上 剛 治

妻からの荒れ球受けるコツがある

ライバルの旗がひとときわ光つてる

気をつけているがとっさに癖はでる

すぐ聞いてやればよかった老母の愚痴

夢だけはでかいが平凡な暮らし

八尾市 内 海 幸 生

柏手が響かぬ心と手がしめり

横向いて上司のミスを見ていたり

ワインの値見分けるような舌でない

頭下げ孫にマウスの先を聞く

それはよう分かっているがと断られ

八尾市 宮西弥生

藤井寺市 楠 昭子

好きなきとき起きて出かけて足達者  
来世の契りもひとりかも知れぬ

だまされて見たい男に誘われず  
さりげない詠りが温い里の駅

必要にされていいるから朝起きる  
むき出しのくらし明るい河内弁

思い切り吐いて自分を取り戻す  
無意識にまねていたんだ母の癖

青汁を呑んで大地と向き合おうて

八尾市 生 嶋 ますみ

藤井寺市 中 島 志 洋

孫娘異性が匂うようになり

浪花の春景気呼び込む触れ太鼓  
裸一貫失う物のない強さ

下手でいい手書きに決めている賀状

下積みが怒り押えている無口

血糖値ふっと思つて猪口を伏せ

忙しい癖に世話好き話好き

やせたなと思つた夫の背を流す

お喋りの口に貼りたい傷テープ

厚底の靴でよたよた初詣で

八尾市 長谷川 春 蘭

松原市 小 池 しげお

逝く秋や読む本読まぬ本の高

善人の失敗談が面白い

稿を練る閉ざし切りなる白障子

いい事を言う小便に行つてから

そぞろ寒卒寿延命乞わんとは

告別式場 逝つた人には用がない

雑煮餅卒寿と曾孫恙なし

うしろの席取るのに少し早く出る

小鳥来る山の言葉を嘴に

教養にオホオホと笑われる

藤井寺市 太 田 扶美代

羽曳野市 徳 山 みつこ

ひとりぼっちでいつかは渡る霧の橋

ストーブがにしん昆布を炊きあげる

時々はたしかめてみる自尊心

料亭のごはんが好きで肥えてはる

ピンク色の嘘で他人を励まそう

片付けてまた探し物しています

いつかは許すけど今日だけは許せない

雛飾り待っているのは私らし

主婦としてお正月など好きでない

お雛様よりもマンガが好きなき孫

羽曳野市 西村りつえ

一夜明け変りなかつた新世紀

十年は生きて見たいな新世紀

洪滞に負けたカーナビ昼寝する

家中に大根匂う冬の章

笑い皺いつも誉めてる春鏡

羽曳野市 酒井一壺

幾度の危機のり越えてわが命

寝る前に明日のいのちふと思ひ

怖いのは心と顔の違う人

無理ばかり言つてた人の様変わり

愛想の良すぎる医者で頼りない

羽曳野市 吉川寿美

松とれて二人に戻つてゐる寡黙

日傘くるくる二〇歳の春よ姫だるま(孫成人式)

大上段に歳を忘れてゐる構え

深追いはすまい傷つく人が居る

他人とは思えぬ同じ傷を持つ

富田林市 片岡智恵子

妥協するたびに狂つてくる歩幅

リストラにあう人生の真ん中で

二病三病薬と仲の良いくらいし

アピールのうまい女の丸い鼻

傷つけた言葉が胸の底にある

富田林市 中井アキ

良い人と言われ続けた肩の凝り

泣いた日も三度の食事欠かさない

脳天を割りにITやってくる

CMの熱意にいつも負けている

テーマからそれる末席の饒舌

富田林市 大橋鐘造

ぼろぼろの私に花をくれた人

脱ぎ捨てた仮面に涙のあとがある

一緒にはなれぬお人と手をつなく

涙には涙で返す万華鏡

断ち切つたはずの絆が疼き出す

河内長野市 植村喜代

鐘の音静かに静かに新世紀

火を吹いて飛んでいったか辰の年

やがて春来て夏が来てまた淋しなる

奈良も京都もテレビの中で見る

娘を嫁つてよかつた思いと淋しさと

河内長野市 井上喜醉

老骨に気合いを入れる空元氣

薬屋が左うちわの長寿国

里の冬いろりを囲む濁り酒

踊り場で特ダネ拾う主婦の午後

人間の油断カラスに笑われる

新世紀トップニュースに核はゼロ

岸和田市 岩佐ダン吉

冬の風両手いっぱい抱いてみる

水仙に出会おうと歩幅伸びてくる

点滴につながれた日は忘れない

草の芽も神の目配りなんだろう

岸和田市 宮野みつ江

冬の京心の棘を抜きに行く

小さな欠点に母性くすぐられ

傷口をいたわる振りでいじられる

うすうすが確信になる胃の痛み

ブランドにこだわりハート枯れている

岸和田市 原苑子

たまにくる子に説教をしてしまふ

たくあんが噛めぬきれいな総入歯

二十一世紀エレベーターで宇宙まで

首と手が歳を教える若作り

欠点も長所と共に熟成す

大阪府 八十田洞庵

丸まった石に流転の悲話がある

笑顔の裏に冷えたまなざし見てしまふ

背のびする男に助言聞こえない

繕えばともるものあり女です

ぬけぬけと言える舌先別口か

大阪府 米澤俣子

スタートの寸差その後につきまとう

慎重さも弱気に見える時がある

味方にもその時どきのランクづけ

のど飴のお見舞受ける風邪三日

白む座を軽いジョークがほぐれさす

大阪府 粂山隆盛

雪吊りの蛇の目の雪を払う風

おしゃべりな風を待つてる春の窓

哲学の風に晒した裏表

百態の雲がちぎれて風に乗る

大阪でアメリカカ村の風に会う

和歌山市 西山幸

神様が茶柱ひとつ弄ぶ

どん底で夢のまた夢ばかり見る

どの色を塗ってもきまらないぬり絵

食べて寝て書くこともない日記なり

花屋の花のあしたは見えないことにする

和歌山市 玉置当代

朝風呂に手足を伸ばす三ヶ日

七草粥いただいてます風邪の床

餅を焼くわたしの膨れっ面のよう

もたれ合いながら夫婦の小商い

張りつめた糸を緩めてゆく余生

和歌山市 細川稚代

助つ人に実家の母がいる強み

うす氷はぐよう熱が引いてゆき

うっかりともらしてならぬ義理の仲

小正月おでんぐつぐつよく煮える

柚子いっぱい浮かべひとりの湯に浸る

和歌山市 山口 三千子

しがらみの中で抜け道模索する

半世紀喜怒哀楽を子に貰い

体のねじゆるんで病魔忍び込む

眼の手術決心つかず日は迫る

整理する手を止めて見る子の日記

和歌山市 川上大輪

わたくしの背中では多分空っぽだ

水たまりに映らなかつた僕の影

喪の列が続く私は第三者

自己弁護寒い言葉を重ねだす

もう一步進もう辞書を買ひ足して

和歌山市 松原寿子

胸ふかく風の台詞を包み込む

つらくなる行間と知り愛伏せる

紐解けばところどころに風の地図

すぐ其処の春へ音譜を溜めておく

熱爛が胸の隙間を堰止める

和歌山市 楠見章子

元旦の鯛の目玉にある自信

切り取り線白いページが動きだす

初げんかい相棒がいてくれる

交わって色は深あい彩をだす

哀しいほどに倦怠感がまといつく

和歌山市 田中みね

快調の五体で仰ぐ初日の出

女忘れて杵振り上げるお餅搗き(白浜のホテル)

大いなる財産妻を娶つた事だろう

孫嵐去つて正月やり直す

生涯を妻には勝てぬ口喧嘩

和歌山市 桜井千秀

初曾孫女子で優希と申し候

女大臣先ず着衣から事始め

救助訓練みんなてきばきする場面

二世紀を跨いで生きた自負持とう

落伍者になるなと影が叱咤する

和歌山市 山根めぐみ

ふり出しへ戻れと賽の目の指図

気楽だろみんな他人のせいにして

心屈折 視線に色がついてくる

オーラがピンク色です恋ごころ

ボンボンと捲し立ててる正義心

和歌山市 木本朱夏

時代遅れの歌に出会った港町(ポルトガル紀行)

首すこし傾げマリアの日向ほこ

ロウソクを捧げ奇跡を待っている

行きずりのミサに背筋を正し居り

中世の黴の臭いのカテドラル

和歌山市 吉村さち子

年賀状だけの絆が続く友

用意周到過ぎる私にある落度

言いたい事あつても孫に親がいる

言い過ぎただろうか電話切つてから

生き延びて終着駅も混んでいる

海南市 谷口義男

惚れると惚ける一字違いで明と暗

生き延びるための嘘なら仕方無い

罪意識少なく殺人ゲームする

小気味良く才女が斬つて行く世相

上役の秘密小出しにして攻める

和歌山県 中後清史

匂わせて少し待たせるいい返事

孫は子のもと悟った背が寒い

妻や子に見てほしくない馬鹿踊り

貧乏の頃の家族は温かった

悲しみをぐつと呑みこむ高笑い

尼崎市 春城年代

あなたの娘は二十世紀を越えました

子の無い人に孫のはなしは遠慮する

いよいよ老いてよろけたことは口にせず

変りない一日だけ日記書く

なにはどのことか流れに身をまかせ

尼崎市 春城 武庫坊

金粉の酒で傘寿の新春祝う

黒豆の艶に今年の希望湧く

百人百様個性が光る年賀状

流れ着く岸がわからぬ新世紀

無器用は自覚そのまま風に乗る

尼崎市 田辺鹿太

両断にする一刀が錆びてきた

風邪一つ引かない俺はアホやろか

是しきの傷でと父はそっけない

ご主人の動きに合わず影法師

秀才も親に隠れて絵馬を吊る

尼崎市 内田美也子

家族の絆結び直して新世紀

百態の蛇が賀状で笑う初春

七草過ぎ来ない賀状へまだ未練

可笑しさの後で哀しい老母の唄

週一度バイト浮世の風に逢う

尼崎市 奥山美智子

つくしんば楽しい夢をくれました  
黙もくと二人で越える坂がある

頂いた二倍にしたい恩返し

クツションに今日の疲れを沈ませる

三月月へ恋の未練を抱いている

尼崎市 長浜澄子

侘び寂は言わず豆腐の無垢な白

それだけの人と解ったティーカップ

輪を乱す雀が一羽中にいる

距離おいて付き合う内は罪がない

寒空に帰る娘を待つシチュー鍋

西宮市 門谷たず子

俵せごつこの二人芝居にすこし飽き

夫の手の紫斑よ老いは避けられぬ

帯すこしゆるめやさしさ取戻す

風花は母の残像かも知れぬ

煩惱を抱え氷雨の音を聴く

西宮市 長谷川淳

点滴の時に知恵湧く午後三時

わがままに育てた親は知らぬ顔

いい顔をしたくて一寸無理をする

会うたびに会釈をくれる知らぬ人

ノータリンそれでも成人式が来る

西宮市 亀岡哲子

タイミンクの差で証人となった事故

無料バス貰って駅に近く住む

ひらめきはあるがその後の知恵がない

ウインナもからあげも入れ三の重

正月明け飢えた鴉が早出する

西宮市 山本義子

不器用な指でも永いお付き合い

神さまのお声優しいのだろうな

この運命甘んじ生きる寒の星

でこぼこの道だからこそ面白し

余生からわたしの時間広くなり

西宮市 林はつ絵

くやしいが札が優しい顔にする

偶然に百点取っただけのこと

今頃に姑の無言がよく解る

食べ物の値段よく知る居候

ふるさとの炬燵としゃべる長電話

西宮市 井上松煙

えべっさんカネカネカネと鈴の音

初詣でさくらの蕾そつと撫で

凧上げの親子と話す万歩計

隅々に心配りをして嫌われる

新型の鍋が暮しを変えてゆく

伊丹市 小 熊 江 美

掃けば散る散ればまた掃く並木道

二次会は頭割りして払われ

独り言手近な猫に話しかけ

溪谷に燃ゆる紅葉の艶やかな

見送られ手をふる母が目の奥に

伊丹市 山 崎 君 子

除夜の鐘のれんをおろすそば処

七草に初雪を見る粥の膳

朝市の胡瓜トマトは器量好し

六年目今年も飾る残りびな

残る人生春にしましようにひとり言

伊丹市 榎 谷 郁 子

癒される焚火の匂い里の風

冬空に向かい返事を期待する

向い風気張らずに行く蟻の道

過疎の村で落した眼鏡湖の底に

結局は除夜の鐘まで起きて居り

神戸市 中 村 ゆきを

なぎなこと抱えたまんま年が明け

IT革命より家庭革命呼び掛けよ

瞬間を生きるだけかよ新成人

勝彦ティックミネ あの歌あの頃胸疼く

神戸市 山 口 美 穂

一・二七傷は癒えない七回忌

日々是好日 庭へ雀が来てくれる

孫が去に体力限界臥している

携帯のメロディーだけは快い

わたし流の湯豆腐で風邪に立ちむかう

三田市 北 野 哲 男

高望みしませんがまだ古希よ

力水ごくろう様とビール注ぐ

神主のかしわ手やはりプロの音

初戎賽銭襟へ受けて来る

神様も胸を開いて叱ってよ

川西市 米 原 雪 子

初対面緊張ほぐす優しい目

体験を語り合ってる老いの旅

願い事年取る毎に減ってゆき

悪戯も自慢話にちよつと入れ

ITを冷たく見てる渦の外

川西市 松 本 ただし

とんど跡みたくないのち暖める

寒餅に抵抗力のある入れ歯

煮凍りをほごし程好い燗の酒

古くさい時計のネジを今朝も巻く  
巡り合い別れをいくつ重ねたか

相生市 中塚礎石

繩のれん喋りもするが聞きもする

赤頭巾かぶれば地蔵目を細め

戦友会軍歌うたえば若返り

油断した胸を弓矢は見逃がさぬ

木枯しへ本命だった馬券舞う

姫路市 古川奮水

みかん剥く膝には何時も孫がいる

山茶花の宿に魅せられ旅に出る

発つ時は頭数えて貰う旅

肝炎が軍配上げたウーロン茶

正月は澄み切っていた首都の空

鳥取市 富山檳榔樹

涅槃像拝み諭され善を積む

地吹雪のすごさに耐える鬼子母神

すぐ曇る心の窓を今日も拭く

満月と話を交わす露天風呂

初孫を囲んだ茶の間童歌

鳥取市 美田旋風

引き際に漏らす本音が揺れている

怖いことどんどん決める多数決

父の樹にもたれ携帯かける娘ら

聞き役に回り不幸を聞きたがる

階段を上がるミニとは間をあける

鳥取市 杉本孝男

好まない妥協音符が乱れだす

反応もないから叱る気になれぬ

体質だ歳のせいとは言わぬ医者

道草で覚えた事が役に立つ

正直に目的地まで切符買う

鳥取市 徳田ひろこ

アングルを変えてみたくて途中下車

薄皮も緩み赤青白つぼみ

わたくしの告白を識るフロツピー

尻餅の凹みに何を積み上げる

パズルまだ解けずヒト科が怖ろしい

鳥取市 武田帆雀

まだ脈はあるぞ大盛飯を食う

もみあげに貫禄つけた新区長

ゆさゆさと身を躍らせてパートの娘

猫のした悪戯までも叱られる

機を見るに敏でカードを裏返す

鳥取市 春木圭一郎

ふつくらの芽から大輪子感する

やがて芽が出ると信じて水をやる

若い芽を育て自分もきたえられ

悪い芽を早く摘むのも親の役

芽の出ない俺だが妻がついて来る

鳥取市 岩原 喬水

世の先を読み取る眼鏡売ってない  
遊び癖なおす薬が見つからぬ  
まろやかな妻も時々鬼になる

我慢した夫婦このまま続けます  
あの世へはまだ逝かぬ気で楽しもう

鳥取市 倉益 一瑤

心臓をいきなり握むひと言だ  
激流へ藁一本を握り締め

困ったな明日を耕す鋤がない  
わたくしを語ると灰汁が浮いてくる

鳥取市 福田 登美

不景気の底が見えだす店じまい  
吹雪く夜は西部地震に憶い寄す

寒い朝茶の間に甘え根が生える  
賑やかな茶の間やっぱり母がいる

鳥取市 植田 一京

ご無沙汰を賀状で詫びてホツとする  
お願い一つ賽銭箱へ投げ入れる

スルメでビールテレビ見ている極楽よ  
ハブニング恋文らしきもの貰う

お守りをしっかり抱いて空の旅

鳥取市 近藤 佳子

人生のはじめに乗った縄電車  
酔うまでに「どしようすくい」を踊っとく

どん底をやつと這い出た空青い  
顔広く寄付金あつめ上手です

鳥取市 岸本 孝子

新世紀景気どうあれ初日の出  
地球儀を回せば夢に羽根がはえ

年寄りがいるから茶の間あたたかい  
これからを語ると生きる欲が出る

倉吉市 松本 よしえ

日本の神話今でも話せます  
神さまもそつと覗いたストリップ

減反に瑞穂の国が泣いている  
カラオケで鍛えた和尚さまの経

倉吉市 米田 幸子

松食いが鎮守の杜を食い荒らす  
台所道具は何時もびつかびか

シャガールもモノも括って蔵の中  
腕すくで奪った椅子がきしみ出す

迷うたら母の霧笛が呼び戻す

倉吉市 野口節子

世の中を塗り変えたいか雪しんしん

ゴミ袋山と積まれた物余り

車座に優等生が居て白け

リストラの魔の生命を脅かす

にこやかなべールの下にある闘志

倉吉市 山本玲子

何かある揉み手でやって来た隠居

立ち読みでビーフシチューが出来ちゃった

美容院わたしは華になりに行く

先ゆずり人の振り見る完璧派

そうそうと相槌ばかり打つ張り子

倉吉市 猪川由美子

老いと死が恐くて人間やれますか

吾にほうび機嫌取りとり次へ跳ぶ

出番へと日々を紡いで時を待つ

ダイエット家計簿までが真似をする

泥舟でもやはり大臣したいのか

倉吉市 最上和枝

新世紀生きた証の日記帳

シヨルダーに鏡忍ばせ未だ女

見詰めれば鏡が邪心映し出す

新春も葬儀車が行く会者定離

石段にちよっと手を貸す松葉杖

米子市 中井ゆき

枯菊をもやす逢いたい人ばかり

のぼしてものぼしてもとどかない梯子

お静かなお隣さんであたたかい

これからの道は一本迷うまい

天からのほしご仲々下りて来ぬ

米子市 中村金祥

新世紀重荷を負うて舟出する

三日坊主のページ大きな夢ばかり

卒業式みたいに離婚式してる

退職金でマグロー一匹買えませぬ

ジコチューが増えて世の中住みにくい

米子市 野坂なみ

神の暗示で鶴はアルプス越えてゆく

幸福の尺度が徐々に伸びたがる

地震国いつでもどこでも這うマグマ

冬空に梯子呼び合う青シート(地震の爪跡)

言いにくい言葉が回りくどくなる

米子市 田中亜弥

花に囲まれやさしい顔になつてくる

仏の花もわたし好みの花にする

ペン持って頭の刺激するのです

友達の声の聞きたい時もある

鞭なのかとっても強い風をうけ

米子市 門脇 晶子

往時茫茫雪つもる夜の大家族

米子市 青戸 田鶴

都市砂漠隣人愛を知らぬまま  
新年はむかし話に花が咲き

人踏んだ月でもロマン信じたい

凡人同士同じ歩幅で歩きます

となりは酒屋ビール買いためいりません

米子市 白根 ふみ

山の向こう神の姿を追うてみる

米子市 澤田 千春

新世紀無限のひかり手元まで  
已を撫でている新世紀の体温

ネイチャーが傾き水鳥の悲しい目

逃げ道のひとつおとこに酒があり

おばあちゃん何時死ぬるかと難問を

米子市 木村 春枝

雪しんしん喜怒哀楽を包みこむ

鳥取県 羽津川 公乃

メルヘンの世界に変える雪の芸  
健康を感謝しながら御命日

物置に祖母と遊んだねこ炬燵

一歩ずつ悲喜こもごもの段梯子

分別はいつも後から顔を出す

米子市 永井 美津子

寄り道をするなど風に背を押され

鳥取県 石尾 かつ乃

簡単な孝行親に顔見せる  
一粒の麦に根性論される

勢いの消えた父の背優し過ぎ

国訛り冷えた心に温かい

大変だ長男婚に行くと言ふ

春蒔きの種がまだかと急きたてる

甘酒の香りただよう春の雪

窓全開 弥生の風に会いたくて  
さよならと言ふとさびしくなる夕日

一輪ざしの紅さざん花がよく映える  
鳥取県 西原 艶子

憧れに胸を焦がした日は遠く  
花よりも早くわたしの夢は散り  
親子でもころところすれ違ふ  
点滴に繋ぐこの世のいのち綱

鳥取県 さえき やえ

検査結果みんな白です新世紀  
かぜひくな友より届く柚子の山  
地震以後 横向いたまま鬼瓦

大きな遺産 百年の井戸ふし拝む  
命はぐくむ大地へ春の木を植える

鳥取県 津村 八重子

雲雀鳴き土手の柳も芽吹き出す  
今世紀月から手紙とどくかも  
あの笑顔いい初夢を見たのかなあ  
若者は皆鉢巻の村おこし  
浮いてこぬ名前に心あせり出す

鳥取県 近藤 春恵

税金に足が一ぱい生えている  
親切にされて文句は言えぬ老い  
ライバルを追い越したくて辞書をひく  
ライバルに七つ道具は見せられぬ  
池の鯉大海泳ぐ夢を抱く

芽吹くもの見つけて熱くなるハート  
一歩引くことも悟って咲くすみれ  
コーヒーが苦い昨日の悔いかしら  
きれいですか問いかけて見るコンパクト  
新世紀孫が結婚するはなし  
鳥取県 田村 きみ子

書き初めのまずたつぷりと墨を磨り  
初夢は支離滅裂で忘れけり  
新世紀老いのくらしに変わりなく  
老いるということの寂しさ餅の数  
八十五さいじつと掌をみる未だ動く

鳥取県 林 露杖

新世紀また百年を生きたらか  
ポランティア忙しそうだ新世紀  
八度目の巳年の餅も喉をこす  
ご馳走さま福茶ものんで合掌す  
ひばり鳴き健忘症が快癒する

鳥取県 乾 喜与志

図書館でたつぷり昼寝して帰る  
これからはもう少しお辞儀深くする  
必ずの約束当てにしてません  
羽毛ぶとんにくるまっている不眠症  
みな嫌う蛇を可愛く描いてやる

鳥取県 石谷 美恵子

鳥取県 石谷 美恵子

鳥取県 岩崎 みさ江

神さまは人の形をして在し  
新世紀祝う縁をあたためる  
蛇の棲まう壺にびったり蓋をする  
ITに三歩遅れて渦の外  
私が許せば風となる我が家

鳥取県 原 みさを

一匹として啓蟄の空仰ぐ  
初稽古素足がつかむ床の冷え  
凜として一本の枯葎である  
介護法まだ算盤が手ばなせぬ  
風の音人が小粒になってゆく

鳥取県 奥谷 彩子

子育てを終えて一日長いこと  
体重計減った増えたとかましい  
輪の中で幸せ芝居うまくなる  
相槌に身の上話ふくらませ  
合格の気安め貰う絵馬お札

鳥取県 西川 和子

ゆったりと文化にひたる新世紀  
ガラクタを集めて森をせまくする  
故里へ帰る絆が薄くなり  
帰省して確かめ合っている絆  
極楽はあつと言う間に逃げて行く

鳥取県 乾 隆風

アイティーの価値が老いばれに解けず  
焼きもちを七草がゆに入れてやり  
紅茶にも特効薬を足してみる  
古いステッキついて八合目を登る  
人生も川よさらさら流れよう

鳥取県 権代 康女

静かだな幸福感に満ちている  
雨の音ほど良い眠りにつまれる  
若き日の無理が重なり痛み出る  
また来るけ孫が愛嬌ふり回す  
上品な人の相手に肩がこり

鳥取県 塔 寛子

賀状の束 余生支える宝もの  
どうしたら成人式に明日がある  
ぼたん雪白魔になってくれるなよ  
天災に実家はサラ地のままで明け(鳥取西部地震 2句)  
また余震仮設の老友へ春未だ

鳥取県 橋本 多哥由

五十年妻の愚痴から逃げ出せぬ  
夢一つ願いかなって茶がうまい  
憧れの山に登って脱皮する  
味方から野次られる日の幸せよ  
花も実も咲かせて遊ぶ余生なり

鳥取県 山本正光

節約をするほど金は持っていない  
寒月を仰ぐと妻が降りてくる  
大山もごっそり揺れた震度七  
天災は恐いかあちやんまだ恐い  
メツチャメチャ揺らして地震逃げました

鳥根県 堀江正朗

六十年の闇に生かされ九十歳  
見えもせぬ桜さくらのおとしさよ  
雪しんしん元氣出してと妻の声  
やれそうな氣力いたたく点字板  
見えていた日もあり話題かき回す

鳥根県 堀江芳子

祝盃の卒寿翁の面に似て

戦盲の楽しみ食べるだけのこと  
夢醒めて思い出更に深くなり  
介護する生命の重さ日の長さ  
ここからは言えずに笑う差し向かい

鳥根県 森茂美

貰ってきた猫が横座で主人がお  
兄ちゃんは笑うてはなし誤魔化す氣  
障子張る妻の手元はまだ確か  
雪の日は雪降るすがた園児たち  
白寿まで生きると言つて嫌がられ

松江市 銭山昌枝

取り敢えず日記帳買う新世紀  
松の内鱗二匹酔い潰れ  
難題は保留のままで年が明け  
シクシクがズキズキになり齒科へ行く  
台所磨くわたしのテリトリ

松江市 安食友子

オークション空頼みだが薄目する  
縮緬で思い出させる米五升  
空想で大判小判ざつくざく  
餅の裏のつべらぼうでつままない  
樹海には得体の知れぬ紐がある

松江市 佐野木みえ

菩提寺に天を突くよな大銀杏  
十七歳マグマを胸に秘めている  
シクラメンの誕生祝リボンつけ  
風花が舞う大橋を渡り切る  
フキのとうそろそろ顔を出そうかな

出雲市 小玉満江

三歳にはあばもおいでと誘われる  
愛される自信女の首飾り  
バンコクへ心固めたパスポート  
針穴があんたは駄目と笑つてる  
真夜中のメールを星は見えていたか

出雲市 富田 蘭水

幼子の瞳に天心きらきらと  
新世紀明けても株価色みせず  
やんわりとあの一言が効いてくる  
たった一つ電池がなくて利器止まる  
小さい嘘夫婦は丸く治めてる

出雲市 佐藤 治代

真心に答えてくれる花よ実よ  
古稀からのおしゃれに揺れるイヤリング  
我が儘を言う快感を抱きながら  
思いきり泣きたい時の海がある  
ストローをのぞくと笑う孫五人

出雲市 園山 多賀子

何時からか身について来た涅槃像  
喪正月せめて数の子購って来る  
助け舟出して傷付くのは私  
誇大妄想積木崩しの刑に逢う  
新世紀最後の脱皮企てる

出雲市 小白金 房子

どっさりと賀状めでたい音で来る  
新世紀靴跡しかと大地踏む  
掃きおえた庭へ山茶花散りいそぐ  
山の湯でくつろぐ女の小正月  
甘酒の仕込み農家の掘りこたつ

出雲市 久谷 まこと

窓越しは寒さも違う冬景色  
威張っても皆が歳を知っている  
年毎に目標小さくなくて行く  
赤い糸やつと結ばれ祝詞聞く  
元氣だと胸を張ってもおよび腰

出雲市 岡 あきら

お見舞のできる身でよしのし袋  
すす払い今年も妻の檄で暮れ  
手習いの注連を飾って福を待ち  
ミレニアムなどは知らない福寿草  
しがらみと戦の世紀抜けて新春

出雲市 石倉 芙佐子

喜寿祝う夫になみなみ初春の酒  
初めてのよくな顔して聞き上手  
余生とやら貴方まかせの風になる  
かにさばてんの花を褒めてくお寺様  
ブーツより夫には今もヘンジョウカ

出雲市 青山 久子

一言も喋らないのに勝っていた  
お年寄りやけに賑やか治療室  
逢いたいのがわたしこの頃老けました  
耐えていることがうれしい挑戦者  
嘘ついて笑えずにいた二三日

出雲市 城 多喜

現在をとでも大事にして暮らす  
心まですっかり染まる冬の色  
冬の色すこやし赤を足しましょう  
右も好き左も好きと揺れている  
カラフルに飾ってみよう一人部屋

出雲市 吉岡 きみえ

すばらしい世紀を越えて生きている  
世につれた唄のテンポに馴染めない  
一丁あがりわたしひとりのめしができ  
無い袖を振るのも振らぬのも辛い  
めんどうなことはごめんと寝てしまふ

出雲市 竹治 ちかし

無駄少し削ると寒い風に会う  
はつきりと見えぬ写真を良しとする  
酌量の余地あり親と子の絆  
妻の手に僕と歩いた道がある  
眼の中に森を映しているゴリラ

出雲市 板垣 草丘

自分にも他人にも飽きカメラ拒否  
薬より睡眠わかっているけれど  
収入は年金だけの聞き合わせ  
雪のけて大根ぬくのも久しぶり  
間食と尿回数頻度表

岡山市 川端 柳子

いい人と言われたいから無理をする  
サンブルになあれ長寿のいい笑顔  
二十一世紀ひと先ずバンザイしてみたが  
母の倍生きて遺影の母のよう  
ゆっくり歩む命の刻を稼ぐかに

岡山市 井上 柳五郎

新世紀どこまで行ける老いの道  
低金利すずめの涙もうながい  
医師からの禁酒こわごとそを酌み  
戦友の倒れたしらせ寒い風  
はだか木の貯めて待ってる春の音

倉敷市 井上 富子

足元にチャンスの種が落ちている  
ライバルがまた人脈を掘り当てる  
おだやかなオーラを放つ恵比寿顔  
リフレッシュ楽しい事だけ考える  
白い息 夢を育てる寒稽古

岡山県 矢内 寿恵子

核のない平和を希う初詣で  
筋書は仏が残してくれました  
埋れ火の消えないように辞書を繰る  
ぼっくり死心残りのあれやこれ  
リストラを会社の都合と言われても

ポーナズで買えぬ十七歳の玩具  
岡山県 小林 妻子

ご先祖に申訳ない休耕田

関係はないがリストラ ホームレス

新世紀へともす小さな残り火だ

ばあさんも寒い山へついでくる

岡山県 荻野 鮫虎狼

広告に騙される欲持ち合せ

寒行の太鼓淋しく山を越し

お隣のねずみが餅を食いに来る

新世紀去年と同じ陽が昇り

九分九厘出来て一分で行き詰り

岡山県 富坂 志重

当たら困るから宝籤買わぬ

八十路来てあの世の道が見えかくれ

静かな暮し一筋の道たどる

曾孫背負い歌う黄色いサクランボ

生きのびて世紀の朝陽拝む幸

岡山県 大石 あすなろ

古稀の声とまどいながら祝膳

フランデー少しおしゃれな会話する

向い風覚悟で座る回り椅子

苦も楽も運ぶレールが軋み出す

来た道にいくつもあつた神の毘

岡山県 福原悦子

新世紀ころ耕すペンを持つ

雲行きが悪さに狂う予定表

昨日の悔い胸におさめて朝の靴

同窓会熱い息吹が寄ってくる

気前よく飲んで無駄口叩いてる

岡山県 山本玉恵

まっ白いページは母の息づかい

骨壺の軽さに深いふかい哀

差引はゼロでもつづく名コンビ

単身赴任の小窓に朝の陽がのぞく

陽を吸うた土の心を知る素足

広島市 森田 文

へびの絵は渾身の作 児の賀状

寝返りを打てば隣県ゆうお宿

訪れる人なき寺の竹さわぐ

箱根路のドラマに胸を痛めおり

新年会苦にする芸のない娘

竹原市 森井菁居

どんぐりを拾う昔の詩を拾う

天狗の鼻折られ背伸びが恐くなる

傷ついて甘い言葉を真に受ける

ことごとく裏目裏目の人頼み

目覚めたら恐いと思ふイエスマン

竹原市 古谷節夫

平成の孫から届く年賀状

不景気を追いつけず神が出て来ない

パソコンとケイタイだけは持たぬ意地

失敗と挫折乗り越え六十路坂

内視鏡リアルタイムで腸の旅

竹原市 時広一路

胃は元氣五度の潰瘍もう忘れ

一切れのレモン紅茶を柔らげる

海広し裸になれる風と逢う

納得をして脇役に徹し切る

例外と信じ十七歳を見る

竹原市 小島蘭幸

僕の子だぶつきらばうに席譲るのは

妻も私もふっくら歳をとっている

初恋も昭和もいつまでも熱い

ハートの傷はいつもけろりと治るのさ

石段も坂も楽しくなる句碑よ

竹原市 三宅不朽

降る雪も大地も処女の新世紀

父より生きて父に似たころ思う箸

滝のごとき男を男恋しがる

曲り角ほしいと思おう日向ぼこ

じゃがいもの花の紫子沢山

広島県 藤解静風

以心伝心同じ日付けの文が来る

自分よりわたしを知った友がいる

じいちゃんが唄うと笑う恋の歌

ここが踏ん張りどころと一歩また一歩

男子厨房に入るべし老いの準備など

美祢市 安平次弘道

難癖をつけるとバラが開かない

胸中を覗けば鬼を飼っていた

告げ口をするから敷居高くなる

ナースにもそれとなく言う医療ミス

激論にしてはあっさりけりがつき

宇部市 平田実男

極楽はいらぬポツクリ死ねたなら

肩書きがないから折られない名刺

一日がとっても永い休肝日

鏡にならず養育費はとられ

妻の行く通りに歩くフルムーン

香川県 神保坊太郎

もう一つ地球が欲しい荒しよう

無視すると神さまだってキレるかも

うさぎには羽根を生やした数えよう

相性が良いと易者も言ったのに

いい加減にしないと立つぞ筵旗

香川県 瀧井 勝

どん底に生きて思案のありつたけ

清貧の味で未来の子を育て

柵にまつわる里の良し悪し

涙脆くなって目立たぬ席を選る

肩書きに慣れた頃には下ろされる

香川県 清川 玲子

身辺を整理して待つ新世紀

母に似たお女将のおでん食べに行く

餡雑煮に慣れてさぬきの嫁になり

餅つきもすっかり嫁が仕切ってる

校長になってもどって来た母校

香川県 山地 マツエ

妥協拒否それから風が強くなる

一人住む老母を気遣う雪の夜

十七歳母の視野から消えかかる

娘がくれたセーター古希の身を守る

松山市 丹下 美津子

結婚も離婚も派手な人気者

寄せ書きの国旗は父の青春譜

不況風飛ばす人出の初詣で(こんびら参り)

ゆるめたり巻いたり妻のネジ加減

はつきりと白黒つけてからの仲

高知県 赤川 菊野

スピーチへ一句を入れて花を添え

男です向う傷なら二つ三つ

カルシウム不足か何時も吠えている

アレルギーセンソク母の遺産です

神風と国を信じた青春譜

高知県 北川 竹萌

捨てようと思うものにも一工夫

永年の付き合い心和やかに

無造作にやって仕舞うも若い血か

成人式未熟の叫ぶ知事帰れ

氏神の玉砂利踏んで初詣で

北九州市 梅田 宣司

命名の筆を洗って祖父となり

バスガイド先ずは鳥居の由来から

鳥居くぐれば妙に美人らしくなり

半世紀オイとハイとの夫婦仲

胃を切ってから新しい味に会い

唐津市 樋口 輝夫

子は絵馬に母は祈りの百度石

まだ空けぬボトルを遺し句友は逝き

神童と俺はよばれたことがある

七十路坂のど飴舐めて新世紀  
痛むのは歳のせいだと医者が言う

年賀状残った老友を拾い書き

唐津市 山門 幸夫

新世紀脱皮始まる初日の出

お賽銭銀河のように布に散り

おらが干支啓蟄までは寝て暮す

騙されて咲いた花ほど可憐なり

唐津市 山門 タミ

沈む陽よ明日があるから美しい

騙されて寒に花々競い咲き

吹雪く日は気になるボチは小屋の奥

蛇皮の財布に幸運願う初春

辰から巳バトンタッチは除夜の鐘

唐津市 井上 勝 視

二人三脚出来る間の有難味

社名入りのタオル懐古の冬の風呂

単細胞ストレスのない有難さ

曲り角間違えてから運が逃げ

切り札は持たず虹追うカタツムリ

唐津市 仁部 四郎

貧しさが生んだ誤解を子に言えず

軍歌集焼却父の七年忌

憲法の賞味期限を騒ぎたて

生意気が辞めて会社がうろたえる

国債を校長が買う定年日

書き初めの無の字うらはら人恋し

唐津市 宗 水笑

若水と思えばどこか違う味

苦勞した人の話で螺子を巻く

身震いの喫煙場所に星が降る

帰省して里路に馴染み減りにけり

唐津市 久保 正 剣

しなやかな知事の名刺にあった棘

怖いのは女だてらと青二才

チチンブイ母には医療ミスがない

空き缶カラコロ木枯しはミュージシャン

少年の大志に目盛りのないメジャー

熊本県 高野 宵 草

ささやかな贅 元旦の酒うまい

賀状一本旧友との絆半世紀

ちぎり絵にわたしの虹を貼りつける

植木市せまいわが家をつい忘れ

情性とヤサボれぬ日記出してくる

静岡県 蘭 田 猿 杏

肩幅が狭くなつたとご挨拶

草虱つけて散歩の土産かな

昭和史が次第に遠く新世紀

新世紀古き音色の寺の鐘

新世紀的が大きく見えてくる

亀岡市 井上 森 生

耐えたから水仙の黄が輝いて  
太陽は不変 世紀を跨ぐとも

シクラメン燃える炎の競い合い  
新世紀わが遺伝子を引き連れて

滋賀県 中 宗 明

変声期脳天破る高い声

東大に熟語知らない子が増える

愚かでも自己に忠実悔いはない

甘やかすペットますます主役取る

大和高田市 岸 本 豊平次

新世紀鎌首立てた年賀状

四分の三生きた世紀が過去になる

振袖に厚底雪の成人式

差障る耳も居ようがよくしゃべり

奈良県 渡 辺 富 子

カラフルな菓の主張聞きもらす

地の果てへバイクを飛ばし見た夕日

椅子をける覚悟ができて切る啖呵

飼い犬の一瞥に会う朝帰り

池田市 栗 田 久 子

ウグイスの初鳴き聞いたけふる朝

降りながらもうとろけてる名残雪

人生の設計図引き直す春

十七歳すり抜けた子が巣立つ春

敗戦で軍解放され頭空

白黒をきっちり決めて友失う

年賀状返事待つ事淋しかり

年賀状年毎に減り歳感じ

池田市 岡 本 吉太郎

ジーンズでいとはんオツハー叫んでる

底辺の仲間決して裏切らぬ

二十歳ビジョンを持たず踊ってる

ちまちまと女々しく愚痴るやさ男

池田市 大 谷 篤 子

CMの美女にはすぐに踊らされ

広告はしないが客の足絶えぬ

自分史の終章どんな色にしよ

シンボルの顎の黒子を取ってみた

吹田市 野 下 之 男

野良猫も飼猫もただにヤードで済み

火の山の機嫌伺う新世紀

火の山がまだ拗ねている神の国

余所行きの妻の電話は張りがある

箕面市 唐 住 実

ラストには勘定の待つ酒をのむ

ローマには通じぬ奥の細道を

申告書二十五gまで済み

ロンドンへ乗ってしまったエコノミー

枚方市 二宮山久

店長になった息子の店のぞく

八十路越え新世紀へ父母元氣

もう飲まぬと肝に銘じた酒を飲む

幸せは妻が元氣な床の中

枚方市 森本節子

ゆらゆらと赤いロウソク聖夜ふけ

年末の阪急地下で人に酔う

可愛らし己さん一つ買う社務所

老犬と呼吸合わせて散歩する

守口市 結城君子

たたずんで木枯しの音きいている

新春の顔を作って祝い合い

今宵写真家のお供K-2へいどむ

映像の旅いま終るああ吐息

守口市 井上桂作

お正月金もないのにやって来る

年金を旅のみ使う果報者

生徒らは叱られるたび強くなり

立ち止り妻待ちながら朝散歩

寝屋川市 酒井勇太郎

露天風呂猿と混浴するスリル

話題無い夫婦滑車が軋みだす

台本が無くとも今日の幕が開く

満足を求め男は修羅となる

寝屋川市 北岡波留吉

嫁が来て寒さ和らぐ過疎の村

雪の道素足で歩む修行僧

平和な世紀祈って歩く遍路笠

沖繩の悩みを外に平和ほけ

寝屋川市 太田とし子

今年のテーマ先ず食べること生きること

鶯よおいでようちの梅の木に

ひとときの安らぎ貰う鈴を振る

電線を雪にゆずった雀たち

交野市 山川日出子

羽根つきやかると凧上げ今いずこ

年始め雑煮にしたい月の餅

真産の上祖母うまそうに土饅頭

竹の精パンダにパワーつけている

大阪市 清水利武

暖冬の子報が狂い酷寒に

病院の赤ん坊盗む鬼が出た

若いから出来たあの日の寒稽古

黄門が単車で走る撮影所

大阪市 松尾柳右子

大根にマグロ食事が進みます

正月に源泉税の計算し

正月も勉強してる受験の子

ホノルルで鳥にエサやり罰金だ

やきいもの声聞きながら柚子の風呂  
少し酔い少しはしゃいだお正月  
水漏れの修理正月明けになり  
花札に一度日の目を見せようか

大阪市 玉置英子

携帯より性に合ってる黒電話  
おみくじの大吉帰途はくいだおれ  
肘つく子目にするママも疲れ気味  
いにしへの栄華を今に巖島

大阪市 清水絹子

正月の行事こなして小正月  
おそ咲きの菊凜として寒い朝  
老齢化すんで福祉おいつかず  
悪役は正月ドラマも悪役で

大阪市 中田あい子

去る世紀来る世紀への除夜の鐘  
命ある喜び深し新世紀  
日が暮れるあかりが恋し人恋し  
一日のラストに感謝ミレーの絵

東大阪市 指宿千枝子

母の手のひびは輝く勲章だ  
今日一日発作なかった仏間の灯  
老いてなお明日へかける夢多く  
眠られぬ夜は塔誌を友として

堺市 黒田真砂

新世紀も株価値迷開け胡麻  
びっくりをさせてしゃっくりとめてあげ  
お人好しお世辞を鵜呑みしてしま  
ペン書きでお許し願う年賀状

羽曳野市 福田満州

ぼろぼろの字引に老いの学を積む  
日記帳遅々 万歩計も遅々  
七十の坂道政論疎くなり  
東北の味が届いた冬便り

和泉市 西岡洛醉

古墳掘る遺跡のカメで町おこし  
厚底でケープルに乗るヤングママ  
雪国の旅喫茶で過ごす街の人  
新年会天ぷら残し満腹す

岸和田市 藪野ケイ子

ゆっくりの老後パソコンやめとこう  
若者がハンドルを切るタイヤ音  
憧れたマドンナ古稀のさわやかさ  
決心の固さ目もとが只ならず

岸和田市 長谷川呂万

七草をすらすら言えて満足感  
IT音痴でも何とか生きる倅せを  
ささやかな感激に生きばつくりと  
訃報欄なつかしい顔想い出す

岸和田市 池田寿美子

教室の隅で静かに大器座す

和歌山市 垂井千寿子

一呼吸してから入る癌の部屋

友の目を気づかう切手逆であり

幸せがはち切れそうで怖くなる

和歌山市 榎原公子

太棹を打てば吹雪いて来る津軽

飯を炊く昨日を今日を積むごとく

地味に愛育てています枇杷の花

ふかし芋ああ弟妹の泣き笑い

和歌山市 福井桂香

春の酒とろりと月の盃に

スーパールの若菜で祝う七日粥

トピツクの渦が崩れてゆく速さ

人生に彩りそえて繭を脱ぐ

尼崎市 的場十四郎

長短を見分け励ます新社員

波風は立てない母の丸い背な

一輪に笑いも入れて風邪見舞

パスポート不況尻目に海に飛ぶ

西宮市 秋元てる

貧乏性母は畳の日焼けなど

贈られたトックリセーター持て余す

大声が取り柄と司会役が来た

健康も金が要るとは知らなんだ

孫の描く柿が真っ赤に熟れている

どの船も自由な主張波を切る

花束とうきょうき乗った泥の舟

ラストダンスひとりでもいいよ過去抱いて

西宮市 刈田泰司  
芦屋市 黒田能子

肩書きも名刺も持たず生きている

ぐるぐると回りつづけたままのコマ

ふえてきた白髪に茶髪などいかが

玄関の帰る人待つ明るさで

神戸市 池田善守

元旦も一年中の一日よ

年賀状一年前を読み返す

新世紀へたな儉約やめました

請求書妻からどつと定年後

神戸市 小林一夫

雪いつか雨にかわりて惑う恋

初雪のしばらく降るを見ていたり

餅を焼く匂いの中の雪だるま

酔いて疲れて七草粥のあたたかさ

兵庫県 大谷幸次郎

初日でて力士の背中広くなる

曲り角これから荷物重くなる

リハビリへ歩けることは素晴らしい

老い二人しっかりねじをしめ直す

鳥取市 山本益子

木の芽和え母の秘伝を活かして

何よりの薬と思う深呼吸

十指みな結んで開く元気見せ

口車うっかり乗ると落し穴

倉吉市 山中康子

川柳の海で拾った玉手箱

時過ぎてやきもちや々と萎みだし

嬉しさは名も無い花の名を知られ

大根を煮る平凡がむずかしい

米子市 神庭詩郎

春うらら地震被害の屋根直し

健康が取得勉強オール3

減給はしたがリストラされず済み

間違いの電話怒った声で切り

鳥取県 國森武子

長く病めど姉桜色のはだで逝き

おだやかな死顔にせめてすくわれる

一族の年長組になってゆく

供養していつかは弥陀の手の上に

鳥取県 上田俊路

震度三また揺れ安堵遠くなる

タクシーが娘の車より安くつく

かばってやった孫と一緒に叱られる

白髪染めに何で茶髪が怒られる

鳥取県 太田幸枝

冬眠の蛇がバトンにたたかれる

防犯のカメラ犯人つかまえる

伐らないで森も獣も叫んでる

新世紀孫も成人仲間入り

鳥取県 吉田孔美子

新世紀明治生まれも元気です

父の肺今ならなんとでも出来た

脳天の指令届かぬ心の臓

震度十ぐらいの愛が欲しかった

松江市 川本畔

焦点に背を向けてから楽になり

腕カパー姑が譲った春日和

純粹なチャペルの音を信じよう

色っぽく脱がせています玉葱よ

出雲市 板垣夢酔

肩張った人の言葉はよく響く

巡礼の鈴がのどかな道をゆく

断酒会はいれと医師と看護婦に

どん底を見てから貧乏神が来る

鳥根県 伊藤寿美

飽食の街で瘦せたい本が売れ

乳房吸う主役を囲む祝い箸

故郷の山が霞んで見える街に住む

猫背だねあなたもそうねと減らず口

香川 池内 かおり

赤なまこおやじの口も饒舌に  
三世代お箸もはずむキムチ鍋  
元旦につづき点滴寝正月  
成人にまだ程遠い悪ふざけ

高知県 小澤 幸 泉

もういいよ二十世紀のことだも  
日めくりが加速度つけて走りだす  
冬の旅今日は西安 明日聖地

悲しみも涸れて独りの米を研ぐ

熊本県 岩切 康子

初詣で挙式の宮も派手好み  
雲抜けた初日車内で浴びる吉  
はっとする赤い満月神秘的  
消しゴムで消せない過去が疼き出す

### 第63回 大阪川柳の会

日時—4月3日(火)17時開場 会場—サンケイビル本館  
3F33号室 題と選者—△人形・田頭良子選△ほぐ  
す・前田咲二選△少数・岩佐タン吉選△変わる・磯野  
いさむ選 各題2句席題なし 会費—千円 18時締切

### 第15回 吉本川柳

「志」 選評 河内 天笑  
投句先 54275 大阪市中央区難波千日前11—6  
〒0075 吉本文芸館(06—6643—7799)  
投句締切 3月11日(便箋に3句以内・80円切手5枚同封)

### 第27回 夢楽賞授賞兼

### 第13回 親善川柳大会

日時 13年5月12日(土)午前10時

会場 旭川市五条四丁目 ときわ市民ホール

宿題1部 3月25日締切 2句詠 投句料千円用紙自由

「納得」 播本 充子・齋藤 大雄 共選

「音痴」 福井 千鶴・大野 信夫 共選

投句先 078240 旭川市豊岡十条3—3—13 古川昌子方

宿題2部 3句詠 出席者のみ 当日会費千円 12時締切

「譲る」 北出 郁子・大橋 政良 共選

「気力」 岡崎たけ子・葛西 未明 共選

旭川川柳社

### NHK学園生涯学習フェスティバル

### 第13回 九州川柳大会

日時 13年4月22日(日)11時開場

会場 大分県・湯布院町中央公民館(JR湯布院駅5分)

事前投句 3月15日締切 2句吐・所定用紙

「愉快」佐藤真砂延選・「踏む」高田富男選・「インスタント」  
坂本柳峯選・「女」森中恵美子選・「先輩」吉岡龍城選

当日投句 大会当日PM1時締切・2句吐

「待つ」進藤すぎの選・「利口」外山あきら選

投句料 二千円 出席者は葉書同封(住所・氏名記入)

投句及 186001 国立市富士見台2—36 TEL 042—15772

用紙請求 -8001 NHK学園九州大会事務局 | 31511

# 自選集

橘 高 薫 風

屠蘇祝う酸素ボンベを傳かせ  
リストラの見事な素首落としかも  
席も変らず酒も変らず  
私には勝ち負けもない新世紀  
過去は夢未来の夢もまたの夢

黒 川 紫 香

惜しい人でしたとふたりとも喪服  
覚悟していのちあるまで生き抜こう  
おきばりやすと肩叩かれた京の路地  
美しい人美しく老い給う  
携帯で話す相手もご老人

正 本 水 客

愚痴を聞く耳はべつに持っている  
太鼓判押してもらって帰って来  
山盛りのごちそう出された夢を見る  
口裏を合わす障子をしめられる  
妻がいるだけで正月それでよし

田 口 虹 汀

煙いのが居るから今日も出ず暖簾  
妻に手を取られ表の雪を見る  
点滴の数が殖えてる指を折る  
いい年にしようとしよと力士四股を踏む  
土筆でも頭で土を押す形

森 下 愛 論

無視されて何うろたえる自尊心  
字余りの歌はうたなり花の乱  
苛立つと真空地帯に迷い込む  
これまでのいのち繋いだ酒嬉し  
癖のない酒で盃寄って来る

木 村 あ き ら

今夜だけ二合にしよう芽出度い日  
南から世紀の春が湧いてくる  
ライバルの辞書に手垢がついている  
電照菊園を知らないままに咲く  
少年の枕に夢がたとある

新世紀足の裏より活を入れ  
立佞武多昇天赤々と凜々と  
地球から見れば矛盾する人間  
難産の牛にもあげる生ビール  
りんご囃む音も真冬の音になる

齊藤 焔

喜怒哀楽分け合う友よありがとう  
開眼法要原色の幕巡らして  
主題より枕ととりで聞く法話  
特記事項無しで一日締めくくる  
褒められることは無いけど生きている

堀端 三男

三十年の古巣からマンションへ

一つひとつに淋しく過去を焼く煙  
思い出を焼いてぼっかり穴があく  
主治医からも病歴貰うて出る転居  
思い出ぼろぼろ転宅と言う句読点  
風花がやけにしんみり手にふれる  
雪おんな淋しがりやで困らせる  
盛りのいいお店知ってて誘われる  
意地悪な小指で約束してくれぬ  
針千本そのままにして嘘聞いて

阿萬 萬的

西村 早苗

メッセージの陰でうごめく金の蔓  
ああ言えばこう言う政治家の睫毛  
良心は疼くが縁は切れ果てる  
嘘と無言で通しています夫婦仲  
弥次馬の一人になって見るテレビ

榎本 吐来

浜静か蟹が真つ直ぐ歩いてる  
日覚ましに明日を約束して眠る  
茶柱の縁起かついで老い深む  
年の功上手に振っている尻尾  
寒波襲来プリア大根が煮えている

石川 侃流洞

脱皮どころか肩の凝るほど着ぶくれる  
いま一度穴に戻るか春の蛇

八木 千代

梅が香れば蛇一族も這い出そう  
尾に気合いこめて梢にのぼる蛇  
連翹も蛇のかたちに咲いてみる

藤井 明朗

個人主義強調子羊は迷う

二〇〇一年 歳を頂くとそを酌む  
春へ楽しみひ孫と会えそうな  
教育改革 森総理の熱意決断の秋  
二十世紀の曇り時々晴れの今日の幸

舟木与根一

向う傷消えて馬齢を積む老後  
飴玉で孫がわたしを飼ひ馴らす  
たこ焼きが売れてリストラ落ち着いた  
お利口さん夫唱婦随を演じきる  
口喧嘩しながら家族確かめる

恒松叮紅

沙汰のないのは幸せという家族  
嬉しくてうっかり話聞き洩らす  
助かっています元気な蛇口音  
気の抜けた返事がかえる電話口  
雪模様 男が理性見失う

土橋 螢

指先で触れたらはじけそうになる  
人の世に花の匂いがする如月  
ありがとう一番憎い女にも  
筆硯多様五七五の散り蓮華  
もう一度逢いたい二十一世紀

野田素身郎

身障四級栄進をあきらめる  
排尿の回数増える寒の入り  
寒波きて足が重たい後遺症  
バランスシートはまずまず除夜の鐘を聞く  
正月の帰省かなわぬ管理職

月原宵明

仁王尊睨み続けて新世紀  
迷うたら水平線に問うてみる  
海を見て山を眺めて欲捨てる  
真実がない手袋でする握手  
すぐ昼寝する癖があり職が無い

波多野五楽庵

頬杖のなんと悲しい美しさ  
空しさをにぎると風が逃げてゆく  
依存症 寺山修司読みはじめ  
身の奥の奥に火がつく海の音  
目札をしたのが税務署徴収課

玉置重人

福笹が揺れてミナミに流れ着く  
凶が出てまたおみくじを引きなおす  
注連縄の稲穂に雀騒がしい  
消去法私が消えるから嫌い  
パソコンのささやき知らんフリをする

遠山可住

豊作へ落穂拾いが絵にならぬ  
水道のしずくへ耳が起きてくる  
声かける風がうれしい冬の花  
やあやあと喜寿が気軽うやって来る  
君よ見たか地球が一番美しい

酒ビールミカン 正月ぬくい部屋

満足にひたる正月朝の酒

正月にはまり込んでる金粉酒

正月から三面記事で賑わされ

いい気分美人にお酌してもらい

きつちりと俺のピリオド俺が打つ

短気かもバラの花束枯れやすい

春なのに春の記憶がもどらない

花道に遠い僕が見捨てるな

裏腹な握手それでも手は温い

忌憚なく意見言わせてにらまれる

マイペース先は急がぬ老いの坂

手を引かれ来た校門を巣立つ春

無理利かぬ体忘れる春の風

バランスを取り合い回る夫婦独楽

万場の拍手喝采幕が開く

住み着いた猫が欠伸をして長閑

山男母が涙で送り出す

心から握ってくれた手は温い

眠りから覚めた埴輪にある笑顔

宮口笛生

両川洋々

河井庸佑

工藤吟笑

元服の昔を偲ぶ成人式

成人の自覚成人式荒れる

次々と古老塔碑へ急ぎ給う

新世紀 自分史みじめに思われる

定年制 塔に活性化進む

狭い庭夢抱く老母の四季の花

カタログのようには咲いてくれぬ花

曇る日も照る日もあった八十路坂

気配りは歩幅合わせてくれる孫

煩惱をシックに包む春の風

気がつけば足の力量忘れとり

手を振って歩けば元氣取り戻し

原発の岬へ刃物の猛吹雪

水仙が岬で春を先に告げ

梅咲いた里でろくろの音がする

新世紀まで生きていた無に還る

余白まで真つ黒に描くペン走る

ペンが迷うか心迷うか涸れてくる

幸せは曾孫二人に会う長寿

俺の目はまだ黒いうち後輩よ

西田柳宏子

藤村 女

越智 一水

野村太茂津

(故)金井文秋

イースト菌奇術の種を持っている  
切り札として欠点を知っておこ  
信と義にこだわりチャンス取り逃がし  
虫眼鏡でも無理ですと言う漢字  
旅の気分で行けますか黄泉の国

川島諷云児

接ぎ木して傘寿の花を咲かせたい  
同じ靴なのに軽い日重たい日  
生きてゆくことの楽しさ難しさ  
自分への礼儀で髭を剃っておく  
今日あって明日が分からぬ余命表

小西雄々

野心抱く蛇は冬眠しておれず  
枯れること忘れ吉報朱のキャンナ  
喪服脱ぎすぐ炎の彩をまといたい  
祈るのは嫌いでないが無神論  
妖精を目当ての客の独り言

芳地狸村

元旦の足が忙しい初セール(りんくうプレミアム  
アウトレットにて)  
あちら語で困るスターの珈琲店  
橙色の帽子おくられてる祖父  
ワールドのグルメを競うフードコート  
関空がオレンジ色のサンセット

小林由多香

二回もの精密検査胃も疲れ  
垢抜けた仁王になったすす払い  
飲まなけりやいい人だのに荒れてくる  
十八で軍隊のめし食ってきた  
大小屋の掃除を犬に見つめられ

弘津柳慶

課長のカラオケ御世辞のアンコール  
子も孫も揃って権利主張する  
受話器を置いて未練をまだ残し  
さまざま顔が揃って通夜の席  
右派と左派 市長上手に泳ぎ抜け

板尾岳人

サクラサクラお目にかかれる風の音  
三月だ寒さ堪えているサクラ  
おいサクラお前も恋をしたかろう  
恋人が居りますサクラ咲き急ぐ  
鉛筆を削るとサクラ開花する

河内天笑

お葬式喜劇の幕を下ろす式  
永田町錬金術を習う町  
人間が死に絶えるのを待つ自然  
辛辣なこと言い合える仲になり  
ピーポーが来てピーポーが去る五分間

# 秀句鑑賞

同人吟 小林 妻子

— 2月号から

秀句鑑賞に初めて白羽の矢が立った。重い荷であるが引き受けることにした。

川柳塔にも好作家と言われる人達が林立している。広い視野に立つて全国的に川柳界で活躍されている方達が多く、私の鑑賞が絵になるとは思っていませんが牛尾緑良氏は「作句も鑑賞も心の出合いです。人に接し句に接し自然に社会に接して、大きな響き合う心を養うものだ」と申ししておられます。

助太刀を得た思いで好きな句について私見を申し上げ、肩の荷を下ろしたいと思えます。

熱燗とふんわりいのち長らえる

西口 いわゑ

お酒好きのいわゑさん、雰囲気が分かりませんが。私など酒も煙草もやらず食べるだけの人生です。悲しい事いやな事忘れる思案がありません。少し私もふんわりしてみたいです。

千円の豆腐が喉にひっかかる

藤田 泰子

高かったので飲込むのが惜しかったのか面白発想である。軟らかい物のイメージを打破して、当然でないように見せかけているの

が良い。当然を当然に言うて没。当然を当然でないと言つても没だそうです。

血洗う気分転換にはなるな

小島 蘭 幸

とても真似など出来ないが何時も目標にしている人である。休日奥さんの留守か、何でも句にしてしまふベテラン。新しい言葉をとんとん生み出す人であり敬服。

おそろしい真面目な人の鼻の穴

桑原 道夫

言葉の組み合わせと発想にいつも佳句を見せられ、立ち止まらせる何かがある。

鼻髭が伸びていても出逢うと顔をそらす程の真面目さだ。私も大きな鼻の穴です。只今

アレルギー性鼻炎。

つるべ落としへ洗濯物が風邪をひく

古久保 和子

風邪位ならこちら干さないうちに石になる。たばこ税取つて差別をするなんて

鷲見 正子

税金まで払つて折角吸うた煙を吐くからでしょう。全部吸えば良い。川柳らしい句。

検査結果刑執行のようにつつ

土曜日のチラシ妻の目釘付けに

神夏磯 典子

どちらの句も女らしさの句。女は神経が細い。総合検診でも一寸何かがあれば神経を尖らせるところがあり、そして女体とは神秘でありデリケートでもあり、そんなところをついている。チラシの句も主婦そのものであり台所もご他聞に漏れず不況、女の念が見える。オゾン層今日もごっそり壊される

新家 完司

具象の川柳家、故中尾藻介氏を継承した様な作家として有名である。いつも簡単な句だと思ひながら、成る程を連発するようにになる。簡単な事がなかなか真似が出来ない。何故だ。広っぱに子供の声もごどらな

野口 節子

少子化の波はいずこも同じであろう。広っぱはアワテチ草が生えてひっそりしている。どの家も老人ばかりで後継者は街から戻らない。百姓も伝統の行事もさびしい限りである。昂りの余韻を星と酌み交わす

徳田 ひろこ

昂りの中には沢山の思いがある。読者の想像が広がる。星と酌み交わすに多分良い事があつたと思ふ。現代川柳に打込む姿勢に敬服。

さりげなく抜く荒馬のコンセント

上田 宣子

うまく表現しましたね。さりげなく、コンセント、言葉の組合わせの妙。荒馬はご主人ではないと思いますが、私など荒馬のコンセントを抜いた事がありません。あやかりたい。いらいらが禁酒の壁をぶち壊す

西村 黙光

ペテランの句が光ります。酒の句は大変好きです。私は一滴も呑めないのですがこんな句に出合った事はありません。酒呑みついでい加減ですね。身から出た錆にならない様に納得のいくまで聞いて手こずらす

堀江 正朗

目のご不自由な正朗氏芳子様はおしどり作家として有名。目が見えているとものと納得のいかぬ事がある。何時迄も仲良くお元気で成り行きて結んだ紐がほどけない

岸 桂子

各地でいつも好成績を見せてくれる好作家である。沢山のお友達もいる事でしょう。実感句とお見受けする。伝統川柳を見た様な。

前置きが長いドロ口でも吐くのか

仁部 四郎

珍しい句に出合った。分り易いのに思いも充分満ちたしてある。直ぐ真似でもしたくなる。

コンパスを縮め老後の青写真

久保 正剣

あれもしたい、これもしたい、体さえ健康であればと誰でも想う事でも、年齢とも相談しなくてはならない。教えられるものがある。宴会の酒に仮面がずり落ちる

永田 俊子

課長が今日は幹事で新年会。初めは幹事らしく振る舞っていたが無礼講になり、盃の総攻撃に遂に正体を見せた。酒の句は面白い。ウインドーに映る私に影がない

赤川 菊野

香川県白鳥でお逢いして以来ですね。私も大きくなり過ぎた影を切り捨てたくになりました。菊野さんも影がない様でご自愛の程を。まだ胸にゆれるものあり古日記

大石 あすなろ

面映ゆい句ですが古日記とよく噛み合いました。女性ばかりの柳社で私一人何時も見せられます。男性には手の届かぬ範圍ですね。もう一人の自分に会ってみてドキリ

川端 柳子

「百歳だなどとお化けの顔をほめ」こんな句がありました。皆お化けの様になるのです。私だけとは思っても、女は鏡を見る回数が多いのに「ドキリ」とは参りました。

聞き流すことも世渡りかも知れぬ

森井 菁居

そつですね。竹原川柳会のおしどり作家でもあり、波風の立った記憶はないだろう。あの満面の笑みは聞き流すコツを熟知している。魚にはすまないぐらい下手に食べ

森田 文

海に近い暮しと遠い暮しの差もあります。私の地方は中国山脈の真ん中で、海へは北も南も四十キロ位ある。イカを買っても洗濯する位洗う人もいる。笑わないで本当です。生きるため斬らねばならぬ人がいる

高瀬 霜石

リストラは厳しい。ホームレスに落ちて青い天幕で冬を越す人達にも、生きる権利はあるんです。非情な世の中ではあるが……。折れるほど抱きたいおんな目の前に

舟渡 杏花

「ふあうすと」誌上でも佳句を拝見しています。北の好作家と聞く。川柳の醍醐味だ。

最後に印象に残った句を記しておきたい。

珈琲と漢字で書くと芳しい

三宅 保州

還らないものばかり待つ古い椅子

西山 幸

# 水煙抄

## 板尾 岳 人 選

横浜市 芦 田 鈴 美

月明り優雅に歩く千鳥足

島根県 福岡 博利

老父の背で明治小さくなつていく  
行列を見ると並んでみたくなる

記念日をバラに催促されている

お年玉でやつとデビューの新紙幣

四日目のおせちが揺らす体重計

横浜市 鈴 江 純 子

新世紀 大吟醸が幕を開け

神戸市 山口 光 久

見ぬ振りが丸くしている嫁姑  
良妻を演じきつてる肩の凝り

花の香に覗いてみたい塀の中

心地よい誘いが畏を隠し持つ

軽口に乗って誤解が運ばれる

横浜市 荒 井 広 和

肩の凝る愚痴に付き合う縄のれん

反論のチャンスを逃がす風見鶏

人脈が切れて余生を丸く生き

初売りに膨らむ夢の福袋

徳利を振り正月の胃が甘え

連れ糸解けないままの大晦日

北九州市 岡 田 幸 生

仲なおりする気の今夜鍋料理

退院の妻からやつと出たジョーク

休肝日 詩囊ちつとも脹らまず

霧の夜スリルが欲しい宿の下駄

香川県 原 賢

意識ない母に四度目の初日の出  
脇役を癒しに戻る父の城  
農を守る軍手片手を干しておく  
正論の言葉かき消す風に遭う  
種一つ植える所を捜す妻

堺市 村上玄也

気晴らしに行った映画で泣いてくる  
童顔に白髪のせた友の顔  
それぞれの顔で人待つ戎橋  
片思い待つ事だけは慣れている  
欲張った願いにはずむお賽銭

鳥取県 竹森 富久江

厳しさの陰から毬は転び出る  
火の海と化したところが鎮まらぬ  
厳しさを論してくれる坂もあり  
そろそろと渡ろう明日がみえるから  
流れ星うれしい波を待っている

鳥根県 菅田 かつ子

雑草もそわそわしだす春の風  
誰に会うつもりはないが化粧する  
ほめられて十八番の茶わんむし  
あれこれと聞いてくれている母の耳  
萎びてもプライドがあり鉢の花

横浜市 三村 八重子

ケイタイの中で広がる子の世界  
羽化した子 旋回もせず視野の外  
衰えが邪魔する指のボタン掛け  
闊歩した積りの歩幅伸びがない  
ここだけと声を落せば耳が立ち

横浜市 伊藤 ふみ

幾山河越えて行けるか新世紀  
還暦へ亀の足並見習おう  
しあわせはふつくら温い福寿草  
玉砂利の踏まれて思う人の業  
どん尻も最後は同じ点に着く

大阪市 岩崎 公誠

父の背で学んだ知恵で生きている  
愛の棘ところに刺さり抜けません  
人生を降りたい人と仲が良い  
生き甲斐をいつも支えてくれた妻  
大人への一步の式で大暴れ

鳥取県 河本 照子

正義派に神様の目が届かない  
諺にいらだつ気持救われる  
夫には何故か内緒の化粧代  
につこりとこちらが先にすれば済む  
単身赴任気楽な面もきつとある

倉吉市 大下智子

いい事を酒の肴に座が和む  
新世紀これから仕込む下垂体  
鶴亀も寿命が縮むゴミの山  
厄年も騒ぐが何も術はない  
血が騒ぐけれど笑顔は忘れない

鳥取市 福永ひかり

露払いだったと思う名刺折り  
リハーサルやって自信をつけておく  
花嫁のブーケもらってまだひとり  
たっぶりの金が疑い深くする  
問わぬ罰ただ少年という理由

鳥取市 山宮愛恵

いい今だ君とあしたの米がある  
花に酔う明日の花を考える  
点と点紡ぎ続けて灯を点す  
さりげなく心遣いが置いてある  
老いの坂お金にたよることばかり

鳥取市 録沢風花

強かに生きて生かされ新世紀  
木々の実も踏まれて土にまた還る  
元旦の産声ばんざいしてしまう  
三ヶ日隣の犬も寝正月  
おごそかな夜明け至福の陽を拝む

神戸市 木村忠義

初詣で紳士淑女がどっと増え  
おみくじが痛いところを衝いてくる  
失業はばくもだという休耕地  
干し物へ意地悪をしに来る時雨  
自分だけ得したときの窮屈さ

河内長野市 大西文次

誘われた音楽会で生欠伸  
満身創痍 口は元気に動いてる  
痩せ過ぎを気にしてくれる養命酒  
ひらき直られては妻に勝ち目なし  
期待した娘を連れ去った馬の骨

大阪狭山市 矢野梓

おいしいと言わずに箸がよく動く  
やさしさに触れて遺言書き直す  
お年玉手のぬくもりも添えてあげ  
パンフレット集めて春の旅を待つ  
遠い日の恋打ち明けるクラス会

横浜市 巖田かず枝

新世紀まだまだバトン渡せない  
新世紀もう泣く人はおりません  
服を着た犬は幸せそうに見え  
達人と自負する旨い鍋料理  
雪かきを頼めば腰を揉まされる

横浜市 田中笑子

良い返事期待するから腹がたつ  
百までは生きると母は竹を踏む  
腕相撲 巨面相で競う汗

折紙を折って指先たしかめる  
検診に二の足を踏む訳がある

和歌山市 上地登美代

ふる里の駅で拾った田舎弁  
まだまだとプラス志向で行く余生

絵に描いた餅を追ってる見栄っ張り

広い世間を狭くしている自己嫌悪  
渦の中仮面を変えて突破する

尼崎市 松下比ろ志

七人の敵など忘れ屠蘇を飲む  
いつもより大きく踏み出す初詣で  
元旦や白さ目に滲む日記帳

山茶花の一途に白き冬姿  
生年月日書くとふる里思い出す

尼崎市 軸丸勝巳

一喝に龍馬も笑う成人式

張り切ったおせち二人に持て余し

初夢に富士もなすびも出てくれず

喜寿の新春あとは余禄として生きる

お浄めのように初雪街に降る

尼崎市 河津正治

時効まであと幾日の日を数え  
リストラに暦の日々が短すぎ  
コスモスの風が地を這う寒の入り  
何となく後ろ姿が素敵です  
孤困い風邪に気をもむ寒牡丹

倉吉市 牧野芳光

じわじわと敗者の位置に押されてる  
望まない所にばかり動く駒

平日はこの世を拗ねる背広着る

満月に過去がスルリと落ちてくる  
近付けば炎の匂いする女

大阪市 尾崎黄紅

愛に変わりはないダイヤでもガラスでも  
髪洗う泡もちいさくなつて老い  
一本の杭削られていく思い

自己主張には程遠い紙コップ  
老いの恋笑っていたが老いて恋

大阪市 榎本日の出

鉛筆を強くにぎって進まない

わたくしの情報交換立ち話

物さがし頭のネジを先ず捜し

のびのびと育てたはずだ頼りない

親不孝されないようにとる機嫌

大阪市 中澤伽羅

真似されてはじめて知った僕の癖

元号は平成のまま新世紀

積み立てる介護ロボット買うお金

本棚の隅で金魚がおとなしい

つまらない日にはつまらん顔でいる

大阪市 小泉ひさ乃

初春の和服姿に自惚れる

明日は明日 今日の命をありがとう

金婚後は労り合う余生

気が付けば話相手は妻ひとり

補聴器を外して付けるイヤリング

大阪市 一本勇太

尾を振らぬ男が渡る風の橋

新薬が欲しい脳波の錆止めに

風下で肩の力を抜いて見る

虚と実の接点にある男の譜

世の中にほどほどと言ういい言葉

岡山県 国米さくゑ

階段をゆっくり昇る夢抱いて

遠い日の飢えを知ってる柿の皮

平穏な暮しで今日も米を研ぐ

忍従の礎石の上にある平安

切れそうな鎖つくり半世紀

高知市 小川てるみ

日曜日土佐の素顔に触れてくる

漬物が苦手で主婦の顔がない

老いてなお愛と言う字を温める

反論はしない私が負けるから

張りつめた心が切れる冬の雨

和泉市 小坂凡英

緒を切った堪忍袋は膨らまぬ

心眼を開けと和尚目を剥くが

意気地なし転ばぬ先の杖探す

遺言状仏はなんともし召す

頼まれもせぬに力になるつもり

京都府 前上英一

可も不可もない道を選び黄昏れる

ふる里へ春の手紙が飛びたがり

靴音の弾むリズムに今日の首尾

散策の靴に絡んだ小さい春

程の良い距離で友の輪歪まない

三田市 久保田千代

初暦ピリツとめくり希望満ち

鶴が舞う北の大地は今日も雪

最果ての鶴は流転の空に生き

美しく生きる努力の万歩計

来る年も花が見たくて種を播く

竹原市 正畑 半覚

川崎市 小林 久美子

故郷の山は親父の背なのよう  
教えられなくてもちゃんと親に似る

一言で変わる人生交差点

八方破れもしや必死の覚悟かも

明日こそは挑戦したい山がある

鳥取市 田村 邦昭

磨かれたレンズは嘘を知っている

暖かい家にはやはり母が待つ

おみやげの酒に嫉妬の愚痴を言い

石段が願いに踏まれ丸くなり

直球を投げてた父が曲がる球

高槻市 生田 義一

山茶花の花咲く野辺の散歩道

みんな留守小春日和の日向ぼこ

花一輪ささやく如く無人駅

長電話受話器に犬の吠える声

日の丸を掲げ屠蘇飲む初日の出

八尾市 興田 明

忘却の日記ときどき声立てる

夢を追い鉄砲玉はいつたきり

それぞれの顔を浮かべて賀状かく

正論と吐きすぎていた疲労感

なんとなく不安年金介護など

しがらみのぜい肉削りながら生き

逃げられぬ老いと向き合う新世紀

肩の凝り知らぬ利口な捨て上手

松飾りとれて平常心もどる

雪かきもして駅長は客を待ち

岸和田市 不破 仁緑

世紀末の鐘全身で聴いている

この年の予想に鬼も笑えない

新暦先ず休日確かめる

赤字国ライトアップで紛らわせ

冬眠をしたいと思う時もある

和歌山市 武本 碧

しばらくは巻かれていよう渦の中

以心伝心 夫婦で磨く未来像

来年をそっと覗いたれんこん煮

生き甲斐が煙となった玉手箱

思い出を掬う余韻の手の中へ

今治市 渡邊 伊津志

冬霧を押し出すように牛が啼く

福耳が心の贅を溶きほぐす

ワイシャツもホックにしたい指になり

観客の心に彩が出る墨絵

生かされているから恩を返さねば

今治市 中村好恵

夫婦にもやがて介護の時が来る  
白菜を漬けて迎える小正月

へそくりが開きなおった小旅行  
沈丁花の香りにひたる回り道

今治市 野村清美

静寂を破って届く寺の鐘  
待つ事に慣れて笑顔の花時計

財産も無いが借金無い暮らし  
しんしんと更けて時計の鼓動聞く

愛媛県 宮本末子

掃き寄せて父は落葉を捨てさせず  
瓶で咲く水が命のヒヤシンス

ひそかなるものに大豆のはぜる音  
平凡の隙を狙うて来た非凡

愛媛県 花岡順子

大吉は嘘と判ったパチンコ屋  
冗談の中でつづいてみる秘密

かわいいのは自分見ぬ振り知らぬ振り  
石垣の高さにあえぐ人がいる

愛媛県 黒田茂代

二千年思い出したくない悪夢  
てんでこ舞いの今日は欲しいな二十五時

叱られながら夫に従って生きて来た  
わたくしの涙が抜けないアルコール

愛媛県 安野案山子

歯車が僕の周りでずれていた  
永遠に許されぬかも知れぬ罪  
それなりの夢で我慢の再生紙  
夢のある男に脳をゆさぶられ

高知県 近森功

さあ翔ぶぞいよいよ二十一世紀  
遺産などないが宝の孫五人  
寒いのは寒椿とて同じこと  
躰糸とれば娘ははね小馬

高知県 桑名孝雄

歯も齧も生きた証の自信作  
敵ながら天晴れ知らん顔で来る  
妻の出すサインをいつも間違える  
地の果てまで無理だ草履がすり切れる

高知県 百田幸

大風呂敷破れて嘘がこぼれ落ち  
錆びつかぬように揺すぶる万歩計  
出まかせを言つて世間が狭くなる  
満点でない友だからうまが合う

鳥取市 山口千代子

未来像燃える世紀に陽が昇る  
世の中が安泰すれば神も笑む  
幸せは人それぞれの感じかた  
寡婦故に夫のよさが身にしみる

鳥取市 近藤 秋星

凜として雪に耐えてる寒椿

新世紀何はともあれおめでとう

生きているからこそ美味しい酒が飲め

老人ホームにいても私に明日がある

鳥取市 岡田 信恵

新世紀巳年を期待年女

蛇年は金の苦勞がなさそうだ

冬眠の蛇を描いて春を待つ

年賀状添え書きあつて友の愛

倉吉市 牧田 みち子

好きに伸び乱れ寒菊好きに咲き

夕焼けが好きかカラスが追いかける

病む人を少し和ます茜雲

オーロラを見たい夢だけ捨てきれず

鳥取県 平井 栄翁

酒よりもうまい蛇口の酔いざまし

あの世まで持つて行きます下心

十二月 慌てる事は無い八十路

ハードルを下げて年金満ち足りる

鳥取県 鳥羽 直市

年金に感謝しながら膳かこむ

幸せだおでんと妻が待つている

幸せの灯を消さぬよう生きている

大正生まれまるい枠から抜け出せぬ

鳥取県 鳥羽 玲子

医療費の値上げ長生き辛くなり

テープ切る夢ばかり見て老いて来た

重ね着をぬいでうららか気も軽い

買物の腕を磨いて老いてゆく

鳥取県 藤山 弘子

愚痴を言う相手がいればよしとする

リストラへギア切り替えて動き出す

震災の畑に種をまいてみる

震災の思い出捨てて歩み出す

鳥取県 山下 節子

舞い込んだ手紙私を変えました

自分史にたつぷり載せた自画自賛

宇宙へのチケット今に売り出すよ

声出して念仏言える歳となり

鳥取県 西垣 美知子

母の荷は心も解ける花結び

忘れたらどんなに楽になるだろう

極楽はこの世でござる大ジョッキ

精一杯生きる夫婦の無言劇

鳥取県 西沖 彰雄

子や孫を見れば答えは二重丸

挑まれた囲碁だ孫には負けられぬ

ふと貰う笑みに埋もれ火炎えたがり

生きている限り消さぬ埋み火を

鳥取県 蔵本悦子

バンザイで春の香りが風にのる  
やさしさが少しほしいとおかゆ炊く  
愛情が足りてないからクリーム煮  
ハンガーにいい事だけをかけてます

鳥取県 澤裕子

勢いをつけて跳びたい夢を抱き  
やさしさが広がる母のちらし寿し  
満腹になれば柔和になるハート  
可も不可もなく満ち足りて茶を啜る

鳥取県 橋本静江

種を蒔く気持ちもあらた新世紀  
デジタルが私の生活おびやかす  
ロボットに握手をされる新世紀  
こっそりと愚痴を捨てあう嫁姑

米子市 小塩智加恵

地震から隣と話深くなる  
山は嘖き地は大揺れし国の厄  
新世紀 挨拶にきた余震の二一  
兄弟がみんな無職になる晦日

米子市 猪森スミエ

ストレスは溜めぬ茶の間の金平糖  
故郷の地図に苔むす欠け地蔵  
パソコンに鶴の一声届かない  
長電話鬼が時どき咳払い

米子市 足立由美子

千羽鶴千の祈りを持って舞う  
誰も無口でひたすら鶴を折っている  
倅せな人の隣に住んでいる  
役に立つ梯子がいつもポケットに

米子市 森脇麗

おめでとう夫と交わす屠蘇の味  
初詣で何はさておき健康を  
垣根越し弾む会話は花のこと  
被害地を照らして月も涙する

松江市 津川紫晃

木枯しの音にも冬が重く乗る  
震災地まるく包んだ師走風  
一に二を足して五にする老いの知恵  
秒針が休まないから新世紀

安来市 原煩惱児

行く末が五百羅漢の中にある  
蘇る戦 舞鶴記念館  
古里は福井ですよと越ひかり  
記念日をよーく覚えているおんな

益田市 岡田たけを

病む妻と炬燵で祝う雑煮餅  
屠蘇祝い炬燵にもぐる寝正月  
正月も五日過ぎれば餅に飽き  
貧乏性七草粥の誕生日

島根県 毛利 幸

新世紀 夢が膨らむカレンダー  
腰のきくソバが私に発破かけ  
やれやれと座った途端鳴るチャイム  
カレンダー私の運を笑ってる

島根県 多々納 テル子

迷うたび仏の灯借りている  
目的へいつ気に通す針の穴  
新世紀宇宙を近くする平和  
老眼に新芽が見える冬木立

島根県 持田 多輝子

どの谷へ投げよう私の命綱  
かくしたい事油断してのぞかれる  
真実を明かせば傷が深くなる  
水平線 海と空との口づけか

岡山市 大森 純子

ルノワール夢二雨夜の品定め  
せめてもの抵抗保留することに  
少年の姿おとなの三面鏡  
宝くじ買うと神さま仏さま

倉敷市 家守 政子

独り居が仏の夫と向い膳  
年玉のお札に孫は肩を揉み  
玄関に威張っています亡夫の下駄  
お雑煮を犬とふたりで分けて食べ

宇部市 高山 清子

割勘にもやつぱり座る順がある  
ブランドで飾り心は飢えている  
かといって言えばプライド傷つける  
大学を出てピカピカの失業者

府中市 岩本 雅代

宝くじ夢はやつぱり驟り雨  
露天風呂肌にはらほら雪の華  
新世紀平和な鐘を期待する  
福袋抱えた人の波に居る

札幌市 三浦 強一

自分史は未だまだまだ翔ぶつもり  
天翔ける夢賑ますかたつむり  
素顔では出ぬひと言へ酒を飲む  
長男は悲しからずや農を継ぎ

東京都 井上 つよし

初日浴びて波が奏でる春の海  
病む友の啓蟄願う賀状来る  
つつましく無口な貝が真珠抱く  
生傷に塩をすり込むインタビュ

八王子市 井上 京一郎

賀状だけ続く疎遠の友があり  
お隣の庭から雨を教えられ  
愛想は要らぬ無口が握る鮎  
津軽三味 耳より胸で聴くビート

横浜市 金森徳三

二千年生きた気になる初日の出  
最低と最高 明日が気にかかる  
自分史に一行空けて待つ叙勲  
金婚を共に迎える古時計

横浜市 平達也

かがやいた昔もあつた青い空  
妻の愚痴 男定年羨ましい  
思い出を捨てつつ老いの旅支度  
鏡など見てやるものか皺のばす

横浜市 山梨雅子

孫からのメール返事は声を聞く  
老いてまだ賀状の増える趣味を持ち  
着付けする時から疲れ初詣で  
謹呈と言われた本の中にいる

横浜市 保田絹子

類撫でる風の戦慄 新世紀  
あどけない孫に血圧下げられる  
出来不出来笑つて食べる有機農  
先走る話に耳が追いつけぬ

横浜市 吉田裕峰

ご多幸が束で舞い込む年賀状  
連れ添うて見えぬ振りして半世紀  
ワイキキの浜辺で夫婦一区切り  
自分史に強い味方と妻称え

横浜市 秋元和可

新世紀何か良いことある響き  
三ヶ日過ぎてカレーの美味しくて  
灯がともる窓にそれぞれ物語  
嫁姑仲良きことを不思議がり

横浜市 川島良子

飽きるほど見ても飽きないキミと居る  
春だもの哀しい詩はうたわなない  
好物は禁止されてる物ばかり  
死ぬことの恐さ知らないから怖い

野田市 那賀島雅子

忍従の美学はいつか死語となり  
ストレスがたまり笛吹く耳の奥  
親不孝ピアスの穴に風通る  
追いつ風背を押されて出る勇氣

日立市 加藤権悟

老農に株価は無縁麦を踏む  
また元の話にもどるワンカップ  
何度目の決意を新春の陽が笑い  
縄のれん二ん月の風通り抜け

岐阜市 平野あずま

ワープロの賀状に四面楚歌の筆  
ひそやかに新芽育てて冬木立  
コーヒーの香り右脳のよい目覚め  
魚心詰めた豪華なのし袋

唐津市 岩崎 實

翔び立ちへ希望と不安抱えつつ  
若人を引き立て託す新世紀  
老体へ光と影が綾を織る  
木々の枝葉を貯めて春を呼ぶ

奈良市 乾 春雄

なにごとくも笑つてすます老いの知恵  
風を溜め飛び立つチャンス待っている  
おしゃべりが先頭でくる見舞客  
勝ちたいと思いつくり靴を履く

奈良県 古手川 光

核兵器死語にさせたい新世紀  
暖かく地球がなつて行く不安  
血圧が上がるニュースが多すぎる  
ピッピッと電子レンジが偉そうに

奈良県 江波 正純

同じへま同じ小言がついてくる  
肝臓に許しを乞うて呑んでいる  
どの駅で乗り違えたか十七歳  
いるんだよ輝いている十七歳

伊丹市 延寿庵 野 鶴

おしゃべりへテンポを合わす聞き上手  
ひと握りおまけをつける量り売り  
寂聴のやさしい喋りこころ癒え  
プライドを捨てると靴が軽くなる

篠山市 倉垣 恵美

かくれんぼしようネと孫の年賀状  
寝言まで敬語使っていたそうな  
放心のわたしへ気合い入れたひと  
逆らえぬ老いの話に花を添え

尼崎市 森 安 夢之助

のこのこと口出しをする里の母  
どの顔も疲れています終電車  
大事にします孫からのプレゼント  
老妻の背に幸せと書いてある

川西市 井本 清山

好きなこと言つて食べてる貰い物  
親が病み呼び捨て聞きに帰る里  
生き馬の目を抜く人もいる都会  
みちのくの小町の里は米所

兵庫県 安達 厚

村内の噂は妻が連れてくる  
新世紀どうつてことない通過点  
過疎地です無人駅です年の暮れ  
浮き沈み二十世紀が暮れて行く

兵庫県 広瀬 房江

新世紀 初心に帰る深呼吸  
とりあえず数の子出して酒の燗  
お姑さんの真似は出来ぬとおだてられ  
日溜りに猫と私と福寿草

京都市 山本 磔

雪羅漢よ亡母と話をしていますか  
幸運を探しています呑んでます  
真実に嘘を交えて生きてます  
やる時はやると夫が申します

京都市 丹後屋 肇

リストラの通告にへたる作業服  
神が居る地球で殺し合う歴史  
危機を嗅ぐバランス感覚かも知れぬ  
大寒の堂で微笑む如来像

三重県 尾崎 勤

鼻水をすする善人らしい音  
投げられぬ大きな石を持ちたがる  
一人勝ちできず輪にいる友がいる  
同じミス今は叱っている立場

和歌山市 根田 美子

メールより消印嬉し年賀状  
新世紀七草粥に願ひ事  
親介護わが身も大事新世紀  
ぐずぐずと思案するより先ず一步

和歌山市 土屋 起世子

母と娘の紅が異なる初鏡  
新旧の世紀跨いで友の声  
飽きる程二十世紀に恋をした  
手品なら許しもするがひったくり

和歌山市 前岡 健三郎

今世紀 宇宙の謎も解き明かす  
渦を見る平和な海へ鎮魂歌  
筋書きはないが渦巻き妙魅せる  
姫林檎小さい実だが立派な木

海南省 堂上 泰子

犠牲者の涙が変えた少年法  
少年へ優しい絵筆用意する  
感謝する心子供に教えられ  
若者へ褒める言葉を用意する

田辺市 大峠 可動

新世紀一つの過去を断って踏み  
点線の点は弱者の胃の痛み  
群れを出て精神分裂症かも知れぬ  
ご自愛もかしこも一筆ずつの華

和歌山県 村中 悦男

脳天を空白にした三が日  
噂にはやっぱり立てる耳をもつ  
本当と思ひ込ませる嘘に会う  
過去を捨てはじめて軽い肩になる

和歌山県 中村 君枝

見え透いた嘘も方便丸く住む  
実がならぬ柿に剪定笑われる  
歩調合うまでが苦勞の夫婦道  
欲の皮はがれぬようにするのみ手

大阪市 遠藤 正敏

モノリザの微笑み毘かも知れぬ  
貧乏な神が味方になると言う

ロボットの捻子をゼロから巻き始め  
また馬鹿になる新世紀の屠蘇を酌む

大阪市 大川 道子

身を寄せた鉢でタンポポよく育ち

喋るのは口と限らぬ証拠品

あの頃の母の宇宙を知った今

お国から大きな負債背負わされ

大阪市 榎本 舞夢

薬玉が割れて明るく新世紀

福の神お忙しの初詣で

節分が過ぎてひたひた春が来る

通り抜け一句のために行く予定

大阪市 三浦 千津子

たつぶりの湯にゆつくりと冬至風呂

母だから愛を補う座を守る

ああ言えばこう言う妻と共白髪

春の音さらり重ね着脱ぎ捨てる

大阪市 中井 正秀

ライターでろうそく付けるお坊さん

追い風を味方に付けて一人抜く

小遣いを値上げの狼煙ノーと妻

お寒い布団が僕を放さない

大阪市 亀井 円女

気味悪いくらいこの頃欲が無い  
女偏のうろこ一枚拾い切れず

裏は見ぬまずは信じて生きて来た  
まだ八十路翔んで夢見る新世紀

大阪市 伴 洋子

企みを抱いて静かな蟻地獄

無になつて見えてくるのはエゴばかり

悠然と風受け止める父の胸

下戸隠し酔ったふりするウーロン茶

大阪市 星野 きらり

失言が尾をひき寒波よびよせる

寄せ植えに私の居場所たしかめる

渋抜けて落さぬ我も柿の木も

新世紀ゆつくりと行くゴールまで

吹田市 木下 敏子

髪染めて明日天気にしておくれ

残り火をゆつくり燃やす眉を引く

新世紀初心に戻る墨を擦る

低音で響き合ってる夫婦独楽

吹田市 二宮 栄子

親信用する兎しない子お年玉

ばあちゃんの料理うまいと世辞を言う

かるた取り孫と本気で競い合う

家中がオッハオッハで騒がしい

吹田市 太田 昭

階段に年々歳を教えられ

電線がひゅうひゅう寒さ持つて来る

あかぎれがまた痛み出す寒の入り

飽きの来ぬ妻の背中を見て老いる

吹田市 須磨 活 恵

吐きだして確かめて見たい我がこころ

愚かさを無言で諭す父の墓

簡単に妥協はしない冬の日

ほろにがき春を味わう七日粥

豊中市 みき わきみ

親ゆびに力がある草履好き

銀杏散る私のまほろば御堂筋

ダイレクトメール夫はすでに死にました

建てづまり庭にうぐいす来なくなり

豊中市 江 見 清

この歳で初心に帰れとは辛い

今年こそ今年こそはと初詣で

初詣で願い多くて梯子する

だんだんと自分の全て見えてきた

高槻市 乙 倉 武 史

金よりも男新庄夢を買う

それぞれに夢をあため生きている

野良犬と万歩コースの顔馴染み

花好きの亡妻が遺した沈丁花

高槻市 左右田 泰 雄

シャンプーの泡で心の錆落とす

明るさがニュースに欲しい昨日今日

目にごみが入っただけと言うほろり

急用が出来て一寸という電話

大東市 井 上 すみれ

晩秋の雨にうたれて窓さみし

調子のり後から悔いる挫折感

チョンマゲと和服がビタリ日本人

今日もまた流れに乗らぬいじつぱり

八尾市 田 中 トシエ

花を買うきつといい人いるんだね

廃校へ記念樹だけが残される

甘い汁本音を知って吸わぬ知恵

満潮も引き潮もない老いの四季

八尾市 平 川 幸 枝

夢破れ首をすくめて新世紀

不可能なメモを消してるカレンダー

次の日も右に同じの日記帳

手袋の右を失う同じくせ

枚方市 安 達 忠 央

あわ消えて等身大の日本です

ラストですスタートですと鐘の音

シャボン玉はじける前のプロポーズ

今世紀ラストの味が蕎麦すすする

東大阪市 今岡 貞人

ストレスを風にくるんで投げる空  
暗い事たんと残して世紀行く  
百歳の素足にはかす銀の靴  
甘言につくり笑いを返しとく

東大阪市 笠井 欣子

冬帽子似合う老母の初詣で  
祝膳喜寿の夫とおめでとう  
小正月過ぎて始まる医者通い  
しめ飾り初穂つつきに初雀

東大阪市 田中 美弥子

夫信じ放し飼いはしたけれど  
何もかも愛あればこそ許される  
母ゆずり忍耐だけは負けませぬ  
嘘許し結び直した太い糸

羽曳野市 森田 四三郎

賞味期限切れた夫婦で惚け合戦  
また同じ話に戻る老いの愚痴  
あとわずか余生と散歩 田舎道  
裸婦画廊の前でびたりと止まる足

羽曳野市 山本 たけし

退院でやっと跨げた新世紀  
腰痛も生きてる証喜寿迎え  
見捨てよか将また迷う思案橋  
裸から今日を築いた自負誇り

羽曳野市 永田 章司

便利さがロマンを奪う新世紀  
待つ人がまだ帰らぬか窓灯  
酔眼に通り過ぎてく降りる駅  
親子鷹年始め集い未来論

藤井寺市 吉田 喜代子

家中を燻製にした長電話  
奥様に付いて行きます定年後  
ロボットに優しい介護されるかも  
二十一世紀月のウサギはどこへ行く

富田林市 中崎 深雪

車椅子押す孫の手の頼もしき  
行き帰り同じ道でも違う色  
打ちあけてみると意外に味方いる  
人生で一番若い今日の日よ

富田林市 山原 昭水

平凡でよい幸せの鯛焼く  
仏にも鬼にも出会え暮らす日々  
呑むときはいつも感謝を忘れない  
母が好きな菊菜の種を蒔いている

河内長野市 杉谷 カズエ

折り方を思い出しつつ鶴を折る  
高齢をやたら振りまく年女  
葉ボタンの好み小さく新世紀  
ご無沙汰が長く旧姓書き入れる

河内長野市 木太久 正一

カレンダー選手交替待つ師走  
蛇の夢少し早い  
が年の暮れ  
過ぎし日の顔そのまんま賀状くる  
娘と孫が風のように去った朝

柏原市 永浜 加津子

恙なく十年日記世紀越え  
おない年身につまされる突然死  
北風に背なを押されて急ぎ足  
年頭に手抜き誓ひ七十路

堺市 荻野 像山

誘つといてさつさと軒かく夫  
無駄口を面白そうな顔で聞く  
下手なピアノ聞かされ胎児腹を蹴る  
名曲も隣の音はやかましい

堺市 斎藤 さくら

木枯しが吹いてる庭に赤いバラ  
正月の目標ひとつ叶えられ  
北風が窓を叩けば鍋料理  
凶のくじ読まずに結ぶ初詣で

堺市 和田 つづや

ハッピーバースデー実は私も誕生日  
赤い花咲かすつもりの青い鉢  
丸書いてちよんと世の中渡りたし  
草笛を吹いて少年期に戻ろ

岸和田市 木村 正剛

大過なく定年迎える無位無冠  
肩書きを何とつけよか定年後  
二世紀に跨がり酒に酔っていた  
百年の計を本気で立てている

和泉市 横山 捷也

着ぶくれが老人会で頼られる  
衣食住足りて病の百貨店  
病窓から富士を見てたと初便り  
もう少し待てと言いたい寒椿

泉野市 備後 三代子

箸使いうまい女優の好感度  
困碁の勝ち見えた扇子のゆとり風  
夫の留守ひとりの夜の隙間風  
種まきに種間違うた老いぐらし

泉野市 稲葉 洋

カントリーライフに回帰する齡  
背も影もシティーボーイは無理と言う  
風向きはとつくに変わっていた不覚  
簡単に手に入るなら欲しくない

大阪府 澤田 和重

化粧しておとこ化けたい時もある  
格好のカモにされてるお人好し  
詫びにゆくネクタイ地味な柄にする  
思いやりいっぱい詰まっている童話

川崎市 塩 沢 ひで

お受験が迫ってママの声尖り  
夕御飯 成績表が温める

七草を揃えて老いの意地通す

川口市 原 沢 かね子

装って隠せぬものは背のライン  
お人好し甘い言葉の陰で泣き

殺伐の世に生き明日はミス터리

富山市 沢 江 和代

ダイエット元旦の計から外す

パソコンを使いこなせた夢を見る

テレビからやと唄える曲流れ

富山市 松 見 たえ

老いの医者引退出来ぬ過疎の村  
それぞれのドラマ始まる朝の音

三代の女系家族を塗り替える

横浜市 生 坂 サト子

穏やかな日差しに角も丸くされ

名産のうどんの腰に唸らされ

CMの度にチャンネル落ち着かず

横浜市 石 原 三郎

寂しいが孤独楽しむ時もある

老妻がまだ口を出す煤はらい

エアポケット揺れば夫の手にすがる

横浜市 北 沢 街湖

売込みの電話へ文句切つてから  
あちこちが綻び出して医者通り

正直なもので目線が物を言い

横浜市 福 田 由美子

神様も出足気になる初詣で  
新世紀迎えて私かわらない

御利益の期待分だけおさい銭

横浜市 布 山 嘉信

酔いさめて待つていたのはさようなら

新米が入りリストラ加速され

お笑いに微笑むような福寿草

横浜市 長 島 亜希子

ヤング向けの店増えわたし若返る  
つり銭が十円多く嬉しい日

修理する捨てるで夫婦割れている

横浜市 豊 田 羊子

大晦日 火の用心と子等の声

胃を切つて心臓機械命延び

新世紀さあさやるぞと伸びをする

鳥取市 河 田 のり代

初転びこんなプランは無かったが

福袋自分勝手な夢を見せ

宝くじ買う毎夢が多くなる

鳥取市 横田春名

親に似ずかしこいお子と褒められる

野暮なこと言い出しそうで気を配り

じつと手を見つめ半生 自画自賛

鳥取市 宮脇道子

歳だから何あつてもと子に言われ

万歳と両手を上げて一人旅

そば処そばの畑は見あたらず

鳥取市 田中瞳子

安産の神にも祈願合格を

新聞を読まぬとパジャマ脱がぬ父

ちよつと留守したただけなのに家事の山

鳥取市 福島庸二

新しい世紀の運を巳に任せ

年が明けスピード緩む三が日

自販機に嫌われている五百円

鳥取市 西尾敬之介

忘年の鍋にチョッピリ蟹の足

宙に舞う外れ馬券の空しくて

老婆心くどくど孫に注意する

鳥取市 有沢せつ子

法話聞き心支える火を貰う

いつの日も心の窓は拭いておく  
いやな事うまく忘れていい目覚め

鳥取市 谷岡清子

初対面歳ききたがる老い仲間

後もどり出来ぬ人生足まかせ

南天に老いも負けぬと紅を引く

倉吉市 牧田賀寿恵

番犬が小屋の中から出て来ない

たんすには着物がいっぱい詰めてある

新米に粘りも艶も負けている

倉吉市 西脇日出子

捨てがたき亡母の衣でドレス縫い

百歳を越えて世紀を股にかけ

恋に燃え涙で消せぬ親心

松江市 小川注湖

未来凶へこの石段を登つて

食卓に妻の味盛る嫁料理

長話 焦点は何だったろう

鳥取県 下田茂登子

新世紀どの花咲かす紅の色

新世紀どんぐり出番待っている

無職でも気力はもっている二人

鳥取県 山岡久枝

チューリップ飾って春を呼んでみる

よそ行きの姿に鏡嬉しそう  
大根が主役の冬ももう少し

鳥取県 岡嶋 金子

病名は医者より確か年の功  
病床に元氣が出ると黄色花  
入院の正月餅が固くなる

松江市 山根 邦代

いけないと言われた事がしたくなる  
離乳食 私の方が太り出す  
年賀状孫の自慢をしてしまい

松江市 松浦 登志子

紅白をのんびり見てるお正月  
たかが餅チンする嫁に煮る姑  
鼻歌の母が得意の半次郎

出雲市 梅 ミツエ

山茶花が切られて涙とめどなく  
寒い空 虹がほんのり浮かんでる  
バーゲンで好きな帽子を買ってみる

出雲市 加藤 スズコ

余命表曆は知って知らぬ顔  
泥付きで温もり貰う雪野菜  
別姓の問題老いは解けぬまま

出雲市 伊藤 玲子

嬉しくて仏様にもお年玉  
凡々と私と生きた箸一膳  
ご話の帰り夜空が美しい

島根県 武島 ちよえ

冬木立 裸同士が手を繋ぎ  
盃を交わして結び目をほぐす  
こだわりを少し残して妥協する

島根県 松本 聖子

目が覚めて亡夫と過ごした日を惜しむ  
新世紀 亡夫と迎える夢を見る  
ばあちゃん孫の賀状を持ったまま

倉敷市 森本文子

手の届く限りを清め新世紀  
日めくりの一枚ずつにある影絵  
希望への波打つ胸で待つ神籤

倉敷市 撰 喜子

ストレスがたまると財布軽くなる  
品のいい人がつけると高く見え  
目減りする老いのパワーを頼られる

岡山市 清水 金太郎

寝正月すれば日頃のつかれでる  
賀状来るやっぱり手書きのあたたかさ  
二十一世紀生ある限り頑張るぞ

岡山県 土居 ひでの

新世紀巳年へよいしよする門出  
お年玉巳年へ光るランドセル  
厚ぞこのズック待つてるランドセル

宇部市 中田 忠夫  
老骨にふる里だけは捨て切れぬ  
一寸来て妻の用事が多すぎる

道案内教えてほっとして別れ

宇部市 藤本 一規

苔むした灯籠一つ宇宙あり

この峠越えねばならぬ時がある

あやとりの相手がいない侘しさよ

香川県 伊勢 八重子

初詣で善男善女の顔で来る

さらさらと嵯峨野を渡る竹の声

挨拶の破魔矢が触れる初詣で

松山市 山之内 八重美

吊し柿すだれのように過疎の軒

日の丸が一番好きな戦中派

縁起いい巳年再起のバネにする

松山市 高橋 宏 臣

切り口をなだめすかして八起きする

針穴が糸を嫌ったわけでない

両天秤かけて話が逃げてゆく

今治市 塩路 よしみ

年金の粹すれすれにおしゃれする

しあわせとひらがなで書く太く書く

梅の香にほんのり母の忌が巡る

香川県 松村 輝夫  
健康で福の神さん連れにする  
来て欲しい福が勝手に道迷う

豆を撒く人が何やら鬼らしい

青森県 福士 トキ

忘年会こっそり若さもらいます

窓を打つ藪に初夢さらわれる

二十一世紀今朝も変らぬ餅ふくれ

新潟県 高野 不二

銀行は正直粗品貰つて来

古希くらい同級生もたんという

おしゃべりが黙って注がせる通夜の酒

秋田県 秋野 宏

五感さえ達者であれば多色刷り

手に入れて三文価値の愚に気づく

人物も花も控え目好きな性

秋田県 湊 修水

金持ちにとても住み良いお国です

一ランク下げて気楽にやりなはれ

花婿は涙新婦はVの披露宴

東京都 清原 悦子

辞書にない事が詰まった母の知恵

穏やかな空気の中で太り出す

地下鉄で傘を忘れている安堵

初鴉今年は良いと信じよう

千葉県 大川 晩翠

成人式ごく一部です駄々こねる

ラーメンで開運絵馬の鈴が鳴る

静岡県 増田 扶美

湯豆腐にだんだん欲がとけていく

北の駅悲しみ抱いたまま凍る

進退に迷い言い訳土に生き

静岡県 中西 雅

七転び八起きの道は長かった

電飾のチカチカ見栄が見えかくれ

ねずみ年巳年の飾り隅に置く

浜松市 岡本 まち

故郷の山青くして静かなり

深追いをしたばかりに火傷する

終章を悔いないように今を生き

尾張旭市 三浦 きぬ

二度と読むことがないのに仕舞い置く

耳が痒い良いことも何もなく暮れる

無病息災幾人探し出せるやら

生駒市 飛永 ふりこ

一二三弾みつけたら起きられる

陶器市売りと買いとの胸算用

小雪舞い葉はたんの息震えてる

鹿の子にねだられにぎり一つ減り

奈良市 田中 賢治

花園にラガーが咲かす寒椿

窓越しに手摺りの鳩もこちらを見る

神戸市 船津 とみ子

勝つことに徹する脳梗塞を病む

ライバルの消息無視す新世紀

新しい年のんびりと読書する

尼崎市 尾宮 弘治

ピンクめくセーターも良し白い髪

リストラを俄庭師に煽て上げ

ツリーにも両手を合わすお祖母さん

尼崎市 桑原 東園

幸せはこれ最高と寝正月

口論に負けた腹いせ蹴るボール

退屈なぶらんこ風に揺れ軋む

宝塚市 飯西 ミサヲ

あてもなくことわざ事典開けて見る

しあわせと思えば今日もそうだった

万歩計うまいうどん屋連れてって

川西市 西内 朋月

震災の霊を鎮めよルミナリエ

窓ガラス拭くこともない年の暮れ

神様に東西南北みな恵方

茶柱がたつても一人朝の膳  
手ぶらでも友の来訪快い

川西市 田中喜俊

淋しさは老人となつたせいでしょう

篠山市 谷田多美子

不安より期待大きく新世紀  
幸せは年越しいわし艶な色  
あと戻り出来ぬ昨日の世紀末

姫路市 北条てる代

ライバルと握手の裏で火花散る  
殺意などあろう筈ないバラの刺  
犬にまで愛想振りまく下心

姫路市 服部一典

勤めより長く年金貰います  
戦争を知らぬ親子が議論する  
懇談中 話が途切れ眼鏡拭く

兵庫県 徳平穂子

悪夢だと心の中に鍵かける  
初詣で初心にかえれと鈴を振る  
新春が初心にかえし研ぎ直す

兵庫県 黒崎美沙子

蜂の巣の退治を願う冬仕事  
年賀状 年一回の顔が見え  
言い切つた後の心のさわやかさ

兵庫県 岩本美緒子  
旅がまだ出来るかと問うお陰さま  
花と一つのころ欲しくて花を画く  
物忘れに大物顔で過ごしとく

兵庫県 山本泰子

夕暮れの空に明日をみる茜  
山積の苦勞私金のメダル  
老いの身に忘れるという強い武器

京都市 勝山美千代

洋風化七草粥も嫌われて  
干し柿も顔それぞれに味を持ち  
粕汁に目もとを染める年となり

京都市 三宅満子

生きて来たとおりに出ている顔  
身体  
巳さんと親しく呼ばれ面映ゆい  
古戦場もライトアップの大阪城

長岡京市 山田葉子

幕おりて魔法がとけた顔ばかり  
自立とや母には重いテーマだな  
ありふれた日々をゆつくりいとおしむ

檀原市 西本保夫

内職にたっぷりあつた寝正月  
ドアの家似合いませんよしめ飾り  
通院が出来る健康持ちつづけ

新世紀残り人生脱皮する

和歌山市 松尾和香

生かされた二十世紀の底力

小児科と言わずに子供クリニック

大阪市 平井露芳

豊かさに一つたします新世紀

二世紀にまたがる風邪に感謝する

コーヒールより生姜湯のんで風邪退治

和歌山市 吉田比佐子

大阪市 野田栄呼

一枚の賀状で友の安否知る

年玉をあげれる元氣つなぎたい

やんわりと本音伝えて不安増す

豊かさの中のひずみが水しぶき

空席が多く淋しい通夜の椅子

鈴の音に願ひ託して遍路みち

和歌山市 今一步

大阪市 中川千都子

転んでは起き新世紀今老いて凜

口紅の色替え二十一世紀

正月は神へ仏へご挨拶

いつになく目標高く二〇〇一

着飾ってどこへ行くのと聞かないで

賀状すら届かなくなり友想う

大阪市 中村叡子

大阪市 熊代菜月

靖国の宮で日の丸セット買う

柳誌待つ早く逢いたい人がいる

お月様だんだん欠けて寒そうに

大船と違って乗った泥の舟

脱皮して老いても夢を膨らます

格言の日めくり戻す大晦日

大阪市 伊藤博仁

大阪市 津守なぎさ

パソコンについては行けぬ頭と手

元旦が二日つづいた時差の旅

木枯らしが戸を叩いても開けません

熟年のカップルあつく手をつなぎ

成人式私語とケイタイ禁止する

日本の桜自慢のマウイ島

大阪市 中村忠敬

吹田市 木村無禄

お雑煮の餅に入れ歯が負けている

幾らでも飲めとお墓へ掛ける酒

介護より解雇が怖い昨日今日

パソコンの賀状に混じる筆の色

犬嫌い嫌犬権を主張する

今時の餅は焼かずにチンをする

吹田市 後藤 志津香

新世紀巡り合わせて生きのびる

新世紀素敵に生きて若返る

お年玉二〇〇一円おまけつく

高槻市 大崎 侑子

ロボットは三K従事苦にもせず

新年の期待裏切る新安値

新しい服をいつでも褒めた母

高槻市 執行 稲子

赦す気へあふれる愛の拳かな

軋むからその手に乗らぬ口車

定年の土壇場後悔極まりて

枚方市 二宮 紫鳳

新世紀夢もでつかい初詣で

八十路生き母の背中丸さかな

母達者 年賀の声に元氣出る

寝屋川市 岡本 勲

環境破壊緑の地球沈みそう

万歩計早く歩くと急き立てる

怒るより笑って過ごそう新世紀

枚方市 小川 良吉

失敗を気にして夜の手酌酒

フリーター増えて気になる新世紀

日溜まりで仏具を磨く母の背な

枚方市 大昇 隆広

世は移る生きる苦勞も変りゆく

流れゆく時間に我も流れゆく

道具増え人も自然も遠ざかる

東大阪市 内海 綾乃

国会は子供みたいにすぐごねる

ホームレス テントの周り掃除する

献血車 大雨なのに待っている

八尾市 鷺見 章

静かなる音楽を背に昼の食

旧友と昔がたりをして過ごす

悲しみを耐える涙が頬流れ

八尾市 山本 宏至

セピア色の昔カラーに戻す夢

正当な意見通らず目が尖る

痛み分け涙が仲裁してくれる

八尾市 高橋 明子

寝正月ふる里遠き母の顔

来年は初孫連れて帰ります

蝶々が何所に居てたか舞っている

八尾市 中島 春江

百歳のチンチン電車まだ稼ぐ

不景気で竹輪の穴が太くなり

鯛焼にレンジでチンと活を入れ

河内長野市 印藤智子  
三ヶ日過ぎてこつそり体重計  
絵手紙も春の色してやって来る

暖かくなったらあれもこれもする

羽曳野市 川口信子

似たような人も居るなど投書欄

玄関の金の成る木がしなびてる

青待てず飛び出す癖は親譲り

堺市 大橋錦

トコトコと孫の足音聞こされた

春に会う指切り信じ孫帰る

孫台風後の片付けはかどらず

堺市 田中紫

作らない料理番組見えています

好物は酒にタバコという米寿

年金を孫にとられてお正月

堺市 喜多美波

初日の出押し達者を噛み締める

介護より家族の愚痴を聞くヘルパー

続くミス命も軽くあしらわれ

堺市 梶本哲平

大阪弁わるいところりして罷る

大阪弁で喋ると漫才らしくなり

気にかかり出したらテレビ視てられぬ

根本の法に誤る少年A

歯に衣着せた話を嫌い抜く

不調にはどれも癌かと決めつける

泉佐野市 大工静子

九十を渡る橋さえ未だ元氣

星祭り高野山から請求書

暖かく暮らしています亡夫様

大阪府 東文江

安売りであればこれも高くつき

安心し老後わたしが看ると嫁

流しびな可愛い孫の夢のせて

大阪府 小栢こずえ

デパートも春の風か里帰り

新世紀ほこりあつてもやって来た

苦しい日取つた免許も生きる糧

大阪府 前田忠子

郷の味しゃれた鍋には似合わない

手料理の温かさが守る子の非行

南天の目にしむ朝の新世紀

大阪府 桑田ゆきの

早や家訓嫁に伝える父威厳

お浄めの水一口に飲む祈願

夢早くつかみたい手がみくじ箱

岸和田市 亀井皎月

## 高杉鬼遊

東野大八

「川柳塔」誌で永年おなじみだった高杉鬼遊(本名・久)は平成十二年十二月七日死去。享年81。浄覚院亮善鬼遊居士。大正九年(一九二〇)四月十二日生まれで、川柳歴は四十年になる由。時折、川柳塔誌の目次下に思いつくままの随想を書いた。その一、二を紹介しよう(要約)。

「今の家に住んで三十数年になる。近鉄大阪線高安駅を降りて西へ十分。風呂屋の前を通り、横の路地を抜けるのが帰宅のコースである。金曜日は定休日なので銭湯の明かりが消え、すこし寂しい。これからずっと寂しい日が続くのかと思うと哀しくなってくる。わが家には小さい風呂があるが、時々気まぐれのように妻を誘って銭湯に行く。

ひところ流行った「神田川」の歌詞とメロ

ディーが独身時代の風景と重なる。貴方はもう忘れたかしら／赤い手ぬぐいマフラーにして／二人で行った横丁の風呂屋／一緒に出ようねって言ったのに／いつも私が待たされた／洗髪が芯まで冷えて／小さな石鹸カタカタ鳴った(以下略)。「引用が長くなつて作詞の喜多條忠さんにすまないが、ここまで書かないと話にならない。赤地に金で小さな亀甲模様があつたセルロイドの石鹸函は、遙か遠い青春と共に今はない。そして妻は待つてくれない。

銭湯休業の貼り紙の終わりの店主敬白にある「ご利用」の文字が切実に感じられる。孫が帰省するたびに「銭湯へ行こう」とせがむ。そのたびに「利用」させていたのだ。銭湯はわが家にとっては生活の一部である。

銭湯閉業の最後の夜、カメラを持って入浴に出かけた。雨が降っている。空が泣いている。高安温泉を正面から撮る。大人三三〇円・洗髪一〇円である。脱衣箱は四十五番だった。(川柳塔)平成九年二月号。高杉鬼遊「食満南北居の玉屋町へ出入りしていた中に、画家の楠瀬日年も居た。生前、弟が「先生」と尊敬していた人である。弟の話は断片的だが、昭和40年頃と思われる。独身ゆえの自由さで、京都宮川町に流連(いつづけ)していた頃は、日年先生は奈良住まいして赤肌焼の寮を持ち、好きな陶器作りをするという仲々の風流人で、玄関に「郵便配達人お休み処」の看板まで出していた。

第二次大戦までの頃の暮らし向きは知る由もないが、この頃は華族との交友も深く、紅灯の巷に遊び、華族達の印章を彫つたりと手先の器用な人だったらしい。いま手許にある「泰」の印章は日年作であるが、これと別に一冊の本がある。東洋書院刊の昭和50年発行のもので「揮毫大観」という。一般人に対する揮毫のいわば手解きで、書画を鑑賞する一般人の人々へなる揮毫文もある。雅号に始まり落款・印章・揮毫・箱書・表装等の由緒や謂れ、形式等に関しなかなかの博識ぶりを披露されているのに感心させられた。

道頓堀の中座等に歌舞伎がかかると日年生は、松竹芸能社に迎えられていた事等を弟からよく聴かされたものだ。

日年先生の没後、弟が中座前の天牛書店で発見した日年著の『揮毫大観』を欲しくなつたおり、その店主が「あんたの先生なら、少々まけとくわ」と百円売値から勉強してくれたそうである。(「川柳塔」平成11年4月号・高杉鬼遊)

西尾葉先生宅へ老妻と共に挨拶に向いたおりのことだ。この鬼遊氏とはつたり顔を合わせた。

「ほんの十分ほどの所に私は住んでるので、すから、よく顔を出します」との如才ない話だった。葉先生らとみんなですしをよばれたがとでも美味しかった。

「うちの倅がホテルの地所に温泉のわく所があるというので、花咲翁のむかし話じやないが、ここ掘れわんわん、もつと掘れわんわん—でとうとう熱湯を掘り当てましてな。そのおり、この鬼遊さんに大分救けて貰うて—」とは葉先生の話であった。

この折、老妻は鬼遊センセイに大分あふられ、お世辞を言われたらしく、「世長けた苦勞人で、この方の生活の臭いがブンブンしてました」とは彼女の感想であった。

目次下の文章を見てもわかるように、この高杉鬼遊には、肌ついた人間臭と生活の風が生々しく息づいていたことだ。これを書いている折にも、その息づかいが甦つてくるのである。

彼の奥様は高杉千鶴子と申される。柳号千歩で絵をよくされ、個展まで催されている才女である。筆者は当初、鬼遊よりこの奥さんの方に肩入れして、何かと妙なアドバイスを忘れず、個展の案内ハガキを貰うとソワソワしたのだが、夫君御他界の折を機にお齡を伺つたら七十五歳と答えられ、ヘエーッとはかり仰天したものだ。一見六十歳代にしか見えぬ。

思うことは、何によらずズバズバ口にするのが筆者の天性のサガだが、高杉鬼遊との初対面の折、何かの拍子に鬼の話がでた。

「中国ではな、日本の鬼は、幽霊かお化けのこと、日本の地獄でうろついているトラフンの鬼共と丸つきイメージがちがう」とポロクソにコキ下ろし、この相手をイヤな想いをさせたものだ。と今もつて後悔している始末である。

「しかし、日本風にあしらは、鬼遊とはいい柳号だよ。おれは好きだな」と宣撫工作を最後に忘れずつけ加えたことを思い出して

いる。

この鬼遊氏は賀状嫌い、年賀状はとつこのむかしから一枚も書かぬ、とイバつていたことだ。フン、それはまことによい分別である—と一応感心しておいたものの、八十歳半ばを過ぎた今日、いつそ「鬼遊流で賀状書きをやめよう」と思ったのはなんと今年からである。

川柳塔社の相談役のほか、各句会やカルチャーの講師をやり、「川柳塔」『水煙抄』の選者もつとめた重鎮であった。以下、鬼遊の近詠を紹介しておこう。

一泊「二日鬼が薬を持つてゆく

福知山ズルソックスの国訛り

寒の冷え鬼がいたたく鬼殺し

銭湯の煙突寒いまま冬に

禁煙をしたのにそうかともいわぬ

死を言えば同じおいを笑うのみ

メイドイン・イタリーを着る醤油味

好きなことだけだけしたか誕生日

政治家のツケが回ってきた不況

秋蝶を追うまぼろしの背やぬくし

(以上、自選句から)

▼次号は「菊地 成吉」

# 誹風柳多留二四篇研究 27

重忠はのミたかんなでがてんせす

安四信2

七兵衛ハ衣を着ても乗り出され

明元校1

清・佐藤 賛。

山田昭夫・橋本秀信

小栗清吾・伊吹和男

大野秀二・粕谷長生

209 石尊へ信心で行くかしたやつ

山田 相州大山の石尊大権現阿夫利神社。六月二八日が山開き。盆は七月十四日より十七日までで、丁度盆の支払期に当たっていたので、借金通れのため俄かに参詣する不届者もいた。

この句の場合は、文字通り信心の参詣で、借金通れどころか、むしろ貸している立場の人間。

一四日すへハ野となれ山へたち

四八24

とつをハ山へかゝあは内ていっわけ

清・佐藤 賛。

一八15

207 初会でハとなりの部屋へいつて喰ひ

山田 吉原の遊女は初会の席では、客の前では飲食しないのが仕来り。しかし、腹の空くのは変わらない。そこで、

色置シ女郎ハめしを喰に行キ

安九智4

で、本句のような状況になったのであろう。

どくだてのやうに初會ハ喰ぬなり

一一19

清・佐藤 賛。

208 重忠ハあざむかれぬ男なり

山田 重忠は、源氏の重臣、畠山重忠。

悪七兵衛景清が、平家没落後、頼朝を付け狙うが、重忠によって露見する。「後鳥羽建久六年、東大寺大仏殿の再建落成し、結縁の

清 博美・佐藤 要人

為、三月頼朝奈良に入る、景清大工に打ち交り、偽の眼一と成り窺ひしも、重忠の家人本田二郎に見頭がされ、遁れて京都に入り、身に漆を塗り、清水坂の乞食の中に加はり居りて、又重忠に観破さる」(「史伝」二二卷)。

彼はまた、景清の行方について、馴染みの遊女阿古耶を「玉琴に、三絃胡弓」で「拷問」し、「誠をあらはす一曲に」「偽なきこと見届けたり、此上には構ひなし」と判決したが、「阿古耶は涙、尽きぬお札を伏拝」(「壇浦兜軍記」といった次第

首題句は、これらの逸話を詠んだのも。

なお、景清は片頬に痣があつたので、「あざむく」の「あざ」と顔の「痣」を通わせるむき(「柳柳浄瑠璃志」)もあるが、これは考へ過ぎでないか。

210 三河からきつゝ馴にし門へ来る

山田 正月風景の三河万歳。毎年同じ馴染みの家を祝つて歩く。

業平の三河・八ッ橋での歌、

から衣きつゝなれにしつしましあれば

はるくきぬる旅をしぞ思ふ

の文句取り。

三河から古風なしやれをいゝに来る

一八三

着つゝなれにし大紋ではやす也

二二八

清・佐藤 賛。

211 十徳の雪うちちはらひ〜

山田 十徳は「②室町時代の脇縫いの小素襖の通称。四幅袴とあわせて用い、將軍供奉の走衆以下の召具が着用した。また、江戸時代の儒者・医者・俳諧師・絵師などの外出着道服の一種で、黒紗の類で仕立てるのを例とした」(日本国語大辞典)。

この句は、謡曲「鉢木」の最明寺時頼の雪の佐野の場面。

「十徳の雪」で、最明寺の民情視察の途中の佐野のわたりの雪の夕暮れ、そして佐野源左衛門常世の鉢木を表現している。

ただこの句、芭蕉の、

こねやいはば雪見じつはつじつはま

を踏まえているのだから、十徳姿で詠んでいる芭蕉その人としても面白。

雪のかこ袖うちかはらひまもなし 安四智 4

袖打拂ふ佐野米のぬか吹雪

一三三三

大野 「鉢木」に「もと降る雪に道を忘れ。

今ふる雪に行方を失ひ。一所にた、ずみて袖なる雪を打ち払ひ打ち払ひし給ふ気色……」

とあり、「鉢木」の文句取ではあるが、十徳姿から芭蕉の句とした方が妥当ではないか。

小栗 同右。川柳で「十徳」は俳人を指すと思ふ。

清・佐藤 礎稿後半、大野兄説賛。

212 明日も来たく成もの木村よみ

伊吹 「木村」は江戸前期以来の相撲行司の宗家である、木村庄之助。その木村が読むのは相撲番付。

今日の相撲はいい勝負が多く面白かったが、木村庄之助が読み上げる明日の取組を聞くと、一層面白くなりそうで、また明日もという気にさせられる、という句。

関取りのおす板行に人だかり 宝三三三

清・佐藤 賛。

213 三度めハ張良からつ腹で行き

伊吹 韓の張良が、黄石公から三巻の兵書

を授かった時の挿話。

三度泥の中へ履を落したのを張良が拾ってくれたので、悦んだ黄石公は五日後に再会を約して去る。しかし、黄石公より遅く現れた張良に怒って兵書を渡さない。その次の五日目もまた黄石公が早かったので、張良は前日の宵から黄石公を待ち、ようやく兵書を授かる。それで、三度目に張良は、夕食もとらずに空き腹で行ったであろうという想像句。

三度目ハ張良四明にしかけ

拾五三

清・佐藤 賛。

214 人立をはらつて赤子内へ入れ

伊吹 子を捨てる親は、その子の将来を考え、出来るだけ御大家の前に捨てようとする。その御大家、家の前が騒がしいので、何事かと外へ出て見ると、赤子が捨てられており、大勢の人ばかりである。「これこれ見せ物ではないのだから」と言つて、人々を追い払い赤子を家の中へ入れる。

子の無い夫婦だから、この子は神様からの授かりものと育て始める、とまでは考えすぎか。

人だちの中に吾人ハ捨た親

四六三

清・佐藤 賛。

# 愛染帖

## 波多野五楽庵選

暇そうなベンが螺旋を追いかける

和歌山市 木本 朱夏

運命を垣間見ている万華鏡

大阪市 一本 勇太

やさしさに飢えやさしさに騙される

弘前市 斎藤 苺

耳を貸すことを忘れていた喜劇

弘前市 斎藤 苺

神水を戴くひとの面をして

弘前市 斎藤 苺

騙されることにも馴れて冬トマト

倉吉市 牧野 芳光

囁りが高まる朝が満ちていく

羽曳野市 吉川 寿美

茶番劇みんな悲しくないのかい

吉川 寿美

てのひらに吾が限界を握りしめ

大和郡山市 坊農 柳弘

父の背に渡った橋の数がある

大和郡山市 坊農 柳弘

誰にでも好かれる人になる歩幅

倉敷市 井上 富士

仲直りしましょう白梅見てるから

倉敷市 井上 富士

正確な方向指示器であった背

鳥取県 小西 雄々

品物では釣れぬ魚も御座候

唐津市 田口 虹汀

雪女ハローと言つて消えちゃった

唐津市 田口 虹汀

夢はいい誰に憚る事もない

今治市 越智 一水

十二月追われる風にはかり会い

米子市 門脇 晶子

約束を破る都合の良い雪だ

横浜市 清水 潮華

菜の花に埋もれ目かくし解けない

和歌山市 福井 桂香

簡単に読めぬすし屋の魚偏

倉吉市 松本よしえ

水槽で望みを食べているメダカ

尼崎市 田辺 鹿太

饒舌に連れ去られそう吹き溜まり

出雲市 岡 あきら

プロポーズされて溶けだす雪達磨

大阪市 小林 周信

ランチョンマットが一枚そこは亡父の席

富田林市 池 森子

七人も居ないが敵の匂いする

和歌山市 吉村さち子

笑うにも泣くにも丁度よい茶の間

鳥取県 石谷美恵子

虚と実の狭間に置いていかれそう

鳥取県 岩崎みさ江

仕合せな一日でした眠れない

弘前市 宮崎ヒサ子

Eメールで友達ごっこしてひとり

奈良県 渡辺 富子

花道でこむら返りのふりをする

枚方市 寺川 弘一

スランブに笑い袋がうとましい

岸和田市 宮野みつ江

いつまでも苦手を背負う冬帽子

寝屋川市 籠島 恵子

一枚の葉書いい風連れてくる  
噴火した女が抱く悔いの嵩  
鳥取県 西原 艶子  
乃木さんのような守衛がいる神社  
約束はきっちり守るホッチキス  
松原市 小池しげお  
その先は語らず糞虫が揺れる  
一周忌妻のリズムを抜け出せぬ  
和歌山市 川上 大輪  
少年がさびしい棒をくれると言う  
堺市 桑原 道夫  
蝶が湧く我が胸の水たまり  
大和高田市 鍛原 千里  
山茶花のもろい崩れはサスペンス  
冬かがみ女の愛が凍りつく  
京都市 都倉 求芽

啓蟄まで待てぬ巳年の運だめし  
自信過剰のポケットに穴あけてやる  
和歌山市 古久保和子  
ははの延長線上でみそ汁がたぎる

最終へ綴る言葉に未だ迷い  
窪川 光子

つかい棒はずれたような妻の留守  
枚方市 海老池 洋

ありふれた視野に妻子を遊ばせる  
弘前市 高橋 岳水

一番良い顔で迎えたニューイヤ―  
大阪市 川原 章久

留守電に溜息一つ入れておく  
倉吉市 米田 幸子

ガラグタを捨てるとわが家残らない  
枚方市 前 たもつ

繕えばまだもてそうな知恵袋  
愛媛県 宮本 末子

居残りの去年としばし話込む  
米子市 足立由美子

春の陽だふとんもボクもふくらまず  
羽曳野市 徳山みつこ

青かった地球は今も青ですか  
三田市 北野 哲男

千羽目の鶴が踏絵だと知らず  
美弥市 安平次弘道

焼くほどに姿丸める塩するめ  
鳥取市 西尾敬之介

寓話の中の男にうかと気を許す  
西宮市 門谷たず子

悪いことばかりが続くはずがない  
八尾市 村上 剛治

シャボン玉のらりくらりと生きたかろ  
西宮市 緒方美津子

パソコンをいじり時流にしがみつく  
横浜市 長島亜希子

血圧計が心の傷を締めつける  
八尾市 宮崎シマ子

白雲悠々亡母と重なるものがある  
岡山県 矢内寿恵子

星の雫を虫の目線で受けとめる  
高槻市 左右田泰雄

よく飛ばすきつと俺より若いのだ  
四条駅市 吉岡 修

白梅の白さに雪が降りたがる  
竹原市 正畑 半覚

縄張りの渦容赦なく攻めたてる  
米子市 野坂 なみ

ばね少し自信過剰の振りをする  
倉吉市 山中 康子

古時計母の歳時記知りつくす  
箕面市 椎江 清芳

保護色をゆっくり脱いで春を待つ  
鳥取市 福田 登美

疾風がなんだ頑固な石である  
和歌山市 榎原 公子

冬の絵に座るリングを光らせる  
堺市 桜沢 千世

シャガールの馬に出会った水たまり  
和歌山市 楠見 章子

円満の方程式を模索中  
尼崎市長浜 澄子

雲凍ててじつと動かぬ街を行く  
西宮市 牧測富喜子

カクテルの甘さに油断してしまい  
日立市 加藤 権悟

吹雪かない日でも必死に漕ぐ歩道  
弘前市 櫻庭 順風

愛無償十指で包んでいる産湯  
黒石市 千葉 風樹

地吹雪が本音も嘘もみな隠す  
米子市 政岡日枝子

ころざしどんどんされる冬の駅  
吹田市 山本希久子

恩のある他人でノーが言いづらい  
大阪府 澤田 和重

太陽が温くて脱皮してしまふ  
富田林市 藤田 泰子

四コマの漫画の主は僕だらう  
鳥取市 岸本 宏章

鍋焦げてまだやめそうにない話  
香川県 木村あきら

逃げ水を追って明日を生きている  
和歌山市 武本 碧

ハイハイの返事のあとで辛くなり  
伊丹市 櫻谷 郁子

炭火跳ねおもちの兵隊踊り出す  
横浜市 山下 省子

ひとりになるとどつと涙の出る喪服  
八尾市 吉村 一風

葉だと弁解をする赤ワイン  
黒石市 相馬 一花

生返事つばが背中にはね返る  
唐津市 仁部 四郎

富田林市 大橋 鐘造

死んだとて仏になると限らない

羽曳野市 酒井 一壺

ゆつくりと叱りますよと座らされ

和歌山市 山根めぐみ

泣いてすむ女が少しうらやまし

和歌山市 西山 幸

新しい地図にもきつい坂がある

大阪府 初山 隆盛

紙芝居酔こんぶを売る夢を売る

鳥取市 岸本 孝子

下げることに知らぬ頭をもてあます

愛媛県 中居 善信

本当の自分が見えぬはしやぎすぎ

川崎市 和泉あかり

天国の美女に飽いたら呼びにきて

吹田市 石原 靖巳

本心が見える眼鏡は欲しくない

西宮市 奥田みつ子

また一年うぬぼれと鬱くり返し

大阪市 松尾柳右子

順番に風邪を引いてる大家族

岸和田市 池田寿美子

さりげなく心の傷に嘘をつく

箕屋川市 太田とし子

曇りガラス拭けば秘密がこぼれ出す

鳥取市 夏目 健一

絵を描いて絵になる人を模索する

鳥取県 土橋はるお

借金取りのリズムにうまく乗っちゃまう

横浜市 金森 徳三

伸び切った輪ゴム小枝にぶら下げる

八尾市 生嶋ますみ

雪が降るみんな白紙にしておく

鳥根県 伊藤 寿美

闇に目が馴れたら見えぬものが見え

米子市 小塩智加恵

神様の電話番号皆知らず

横浜市 三村八重子

御多幸が上すべりする年賀状

大阪市 神夏磯典子

頂上へ憧れがある三角形

岡山県 小林 妻子

仕事場の焚火へ寄ってくる二ユース

札幌市 三浦 強一

ネクタイを外すと二男二女の父

鳥取県 土橋 螢

恩返し出来ない春の寺まいり

富田林市 中井 アキ

ライバルをほめて海ばら広くする

出雲市 園山多賀子

春や春自問自答は味気ない

川西市 松本ただし

窓際の辞令の先に付いた棘

藤井寺市 太田扶美代

続編へスタンバイした旅靴

弘前市 福土 慕情

ブランドが混んでいるから乗りたい子

弘前市 一戸 ツネ

窓の鍵錆びたままなる死亡欄

米子市 青戸 田鶴

大根も葉っぱも甘い冬最中

鳥取市 岩原 喬水

癌告知入院保険切れていた

箕屋川市 坂上 高栄

しがらみの波紋と思う水すまし

愛媛県 黒田 茂代

上戸もいただろう仏壇へもお酒

和歌山市 福本 英子

赤ちゃんが生まれた初春の回覧板

大阪市 鈴木トヨ子

まさかの時頼れる壁を持つている

姫路市 服部 一典

人生の坂を過ぎて重い肩

岡山県 福原 悦子

洗脳をし合って息吹く老夫婦

唐津市 山門 幸夫

世紀末宇宙に三人住んでます

唐津市 樋口 輝夫

才媛と言われた嫁の大欠伸

唐津市 岩崎 實

ある時は川の生命に励まされ

米子市 白根 ふみ

雪より白い椿がゆきに汚れだす

砂川市 大橋 政良

おどり場で居眠りが出るかたつむり

米子市 光井 玲子

お隣のアンテナ少し高すぎる

大阪市 中川千都子

悲しみに堪えれば元氣そうやねと

# 秀句鑑賞

— 2月号から

長浜澄子

二〇〇一年の仕事始めとして、鑑賞させていただきます。この厳しさに緊張そのものです。心にはいつも花束抱えている

山根邦代

ものごとは考え方次第、悪く取れば一層自分が惨めになるばかり、あたたかい心で接すると、多少風向きが変わるかも。

都会にも窓の返るとこ見つけ

和田 つづや

住めば都、こころの安らぐ所が身近にある幸せ、きつと逆境にも負けることなく、うまく切り抜けることでしよう。

最初から眉間を狙つたりしない

山本 磔

少なくとも、表と裏の二面考えられるが、意地悪く追い詰めたり憎い訳ではなく、今一度考えるチャンスを与え、立ち直つて欲しいと願う優しさがある、と理解したい。

たつぷりと抱きしめてやる膝があり

榎本 日の出

時として逃げ道も必要、難しいことは抜き、せて安らげるマイホームでありたい。

叩かれた方が忘れていた痛み

山本 宏至

逆恨みしても一刻、自分の慰め方は各々知つている。痛みもやがて薄れるが、日が経つにつれ疵痕として残るのは、相手の方かも。呆けるのがまさか自分と思わない

此の世には、期待しないまさかが突然起るから怖い。自分だけにはと思つているが。

川島 良子

愛恩よ焦らなくても良いのだよ

安野 案山子

幾つになつても、親の目には子供である。焦らずとも自分に合った道、目的を見付けて進んで欲しいものです。

満足な五体に感謝忘れてる

安達 厚

五体不満足 of 著者、乙武君二十二歳の爽やかな好青年振りが、眩しく輝いて見える。

こぼれ種らしい個性の花が咲く

秋野 宏

同じ両親なのに、意外な才能を持つ子がいる。長所として伸ばしてあげたいものだ。

それぞれの足音で来る新世紀

小泉 ひさ乃

新世紀を迎え、それぞれが新世紀のどこまで、どのように立ち入れるのか興味あるが、誰にも平等に一日二十四時間なら、楽しく丁寧に過ごしたいものです。

あるがまま受け入れ生きる一歩ずつ

伊藤 玲子

余白をどう埋めようか、お互いに悔いなくいい人生であったと思ひ度いものです。いい人と言われストレス溜めている

井上 京一郎

他人の口とは厄介なもの、まして悪意に取る人には、それだけの人と思えば気も楽になります。どうぞ自分を見失わないように。ほつとした途端涙が止まらない

黒田 茂代

ここ一番には、自分でも信じられないほど肩に力が入つて、気丈に振る舞えるから不思議。それだけに涙はその反動でしょうか。お気持ち痛いほど解ります。

停戦をしようじゃないか三宅島

かず枝

平凡がなにより嬉しい日が暮れる

照子

力むほど説得力が弱くなる  
風通しよい肩書のない名刺  
四十句余り二選三選し、心に残つた句です。

義一

## 尚香のむ

西出楓楽選

大根が煮えて妥協をしてしまう

雪が来る匂いが分かるお婆ちゃん

決断が出来ぬやわらか過ぎる椅子

話すほど心離れていく不安

母の夢 今は私の夢になり

まだ遊び足りぬとルージュけしかける

死ぬまでに解く宿題を抱いている

手のひらに載せる女の長い坂

饒舌なモーツァルトと雨の午後

キツチンの椅子もだんだん暇になり

夢ばかり話す男の背が寒い

愚痴を聞く耳がかなしい顔をする

姑の瞳に広がる海は風いでいる

生きていく炎をともし辞書を繰る

明日へは回せぬ老母の頼みごと

コンビニで人の情けを探して

孤独癖 冷たい返事してしまっ

ちっぽけな胸の振り子が右左

訪うナースの回数減って回復期

和歌山市 西山 幸

米子市 鷺見 正子

大阪市 神夏磯典子

箕面市 出口セツ子

八尾市 村上ミツ子

横浜市 清水 潮華

横浜市 川島 良子

藤井寺市 太田扶美代

和歌山市 木本 朱夏

鳥取県 西原 艶子

大阪市 川久保睦子

鳥取市 岸本 孝子

和歌山市 榎原 公子

奈良県 渡辺 富子

尼崎市 内田美也子

大和高田市 鍛原 千里

吹田市 山本希久子

西宮市 牧淵富喜子

八尾市 宮崎シマ子

悪口に蜜をからめてから返す

言葉尻にふくらんでゆく猜疑心

白い旗二本持ってまだ出せず

夜遊びのつけが鏡の中にいる

泣きに来た海がはげましくれました

迷わずに白旗上げて時を待つ

冬の蜜柑 世間話が好きですわ

脳みその手入れに苦労しています

自販機の溢れる街の失語症

出会いふれ合い花もだいじに日記帳

第三者しっかり評価してくれる

妥協点下げて孤独の影抜ける

ひとつずつ思い出を繰る冬ごもり

未だ化ける余力があつて紅を引く

申し訳なさそうに咲く残り菊

鶴首の花器へ静かな枝を活け

春の気配 背筋のばしておしゃれして

締切りがないと沈んでゆく小舟

2001年また平凡な朝が来る

十七歳こわれた時は直せます

うたかたの夢でも見たい落椿

十二時に帰らぬうちのシンデレラ

知恵を出す人間だから生きられる

饒舌な筆が余白を駄目にする

三分まとめて日記書いている

歳月の記憶もいつか臍月

横浜市 山下 省子

寝屋川市 籠島 恵子

富田林市 片岡智恵子

横浜市 鈴江 純子

岡山県 矢内寿恵子

倉吉市 最上 和枝

あきる野市 佐藤 季穎

羽曳野市 福田 満州

羽曳野市 吉川 寿美

鳥取県 さえきやえ

寝屋川市 森 茜

鳥取市 福田 登美

鳥取市 植田 一京

出雲市 園山多賀子

和歌山市 福本 英子

和歌山市 古久保和子

西宮市 奥田みつ子

堺市 桜沢 千世

東大阪市 北村 賢子

西宮市 緒方美津子

鳥取県 田村きみ子

和歌山市 福井 桂香

鳥取県 土橋 睦子

鳥取県 岩崎みさ江

米子市 足立由美子

大阪市 三浦千津子

山里のオルガンを弾く春の風  
春が来る化粧直しを急がねば

装いの仕上げに選んでいる香り

口紅がキリリ軽い言葉は言わせない

餅を搗く姿に夕陽の父や母

初出勤 戸籍係の忙しさ

淋しさより気まま選んでいるひとり

追えば罪 追わねば悔いが残る恋

ストロブの炎と遊ぶ 白昼夢

念入りな化粧の遅刻常習者

大吉が出てから用心ぶかくなる

うだうだと仏に聞かす独り言

新世紀心に星を離すまじ

飲みものをあなたに合わず午後後の茶房

美しい遺影に蘭がふさわしい

新米のむすびに里の母思う

もうすんだことよ春の陽満ちている

聞き上手と褒められながら疲れ出す

新世紀 吹くこがらしも清々し

過疎の村 農家が餅を買いに行く

やさしさに包まれたくてピンク着る

電飾が悲しくうるむ街不況

椅子もの知らぬ若さが恐ろしい

両手に荷物ひとりぐらしをかみしめる

鱈酒に写楽の目玉動きだす

長距離の電話言葉が速くなる

和歌山市 楠見 章子

藤井寺市 高田美代子

東京都 播本 充子

富田林市 池 森子

川崎市 小林久美子

和歌山市 細川 稚代

八尾市 生嶋ますみ

藤井寺市 鴨谷瑠美子

尼崎市 春城 年代

大阪市 中川千都子

米子市 白根 ふみ

岸和田市 宮野みつ江

大阪市 渡部さと美

尼崎市 長浜 澄子

東京都 後藤 早智

横浜市 田中 笑子

羽曳野市 徳山みつこ

米子市 木村 春枝

横浜市 芦田 鈴美

倉敷市 家守 政子

生駒市 飛永ふりこ

大阪市 板東 倫子

倉吉市 米田 幸子

熊本市 永田 俊子

弘前市 一戸 ツネ

横浜市 山梨 雅子

初夢はフグと一緒に泳いでる

片言で孫は文句を言う構え

魚つり船に乗る前計算用

泣いたからへのへのもへじ顔になる

一ドルのチップで足りる優越感

一日をゆっくりたたむ嬉しい日

新世紀 蛇もリボンで洒落ている

耳よりな話が好きなイヤリング

老いの顔おだててくれる水鏡

キッチンが分別ゴミに占拠され

家の恥 嫁の愚痴なら仏様

年ごとにパワーが減って口が出る

ボールペンしっかり握る返事書く

八尾市 井尻 民

和歌山市 田中 みね

交野市 山川日出子

出雲市 石倉美佐子

大阪市 津守 柳伸

和歌山市 吉村さち子

岡山県 福原 悦子

今治市 野村 清美

羽曳野市 西村りつえ

横浜市 秋元 和可

米子市 小塩智加恵

倉敷市 撰 喜子

神戸市 船津とみ子

幸さんの句―頑なな心がほぐれてゆく時間経過が巧みに表現

されている。白くて固い大根がうすく色づき、べっ甲色になり

透明感が出て煮上がる。まさに心がほぐれゆく過程そのもので

ある。大根を煮る行為は単に食べるためだけでなく、心を癒や

す作業でもあることを実感させられた。正子さんの句―雪深い

土地に住む作者ならではの作品で、お婆ちゃんの来し方まで見

えてくる。今よりもっと自然が厳しく、自然を畏敬していた時

代を生きてきた人であろう。そのお婆ちゃんに対する尊敬と、

労りの気持が句から伝わり、読み手の心を暖かくする。典子さ

んの句―決断が出来ぬというよりしないのは、居心地のよい今

の椅子を失う怖さからである。老境に入ればこんな椅子にすつ

と掛けた方がいいとも思う。セツ子さんの句―昔「話せばわかる」

と言いながら殺された政治家があったが、話すほどかえって憎

しみが深くなって、もっと深く刺されたかも知れない。





# 初歩教室

題一壁

吐田公一

川柳に限らず何事でもそうであるが、人間の進歩の根幹をなすものは好奇心を持つことにあると思う。

一つの現象が目映ったとき、その受け取り方は人それぞれによって異なるのは当然だが、その現象をどう捉えるか、常識的に「ナインだ」と看過するか、好奇心を持って捉えるかによって、そこに大きな違いが生ずる。前者は現象を単に肉眼で見たというだけだが、後者には心の眼で見るといふ働きがある。川柳を志す場合、日常茶飯事の事柄を常に新しい眼で見る、つまり子供が持つ疑問の眼で見ることをお奨めする。

## 添削句

○その度に夫婦の壁を塗り変える 煩惱児  
多少句意は異なるが、粗大ゴミといわれる感覺を採り入れると

▽定退から夫婦に壁ができてははじめ

○孫の書く書き初め壁に飾り付け 宗明  
飾り付けだけでは句に深みがない。

▽壁面に書き初め光る新世紀

○嫁姑壁とり除くよう力 栄呼  
下十音字が説明句

▽目に見えぬ壁横たわる嫁と姑

○弱虫の壁乗り越えた僕を誉め 好勝  
「自分をほめてあげたい」と言ったのは有

▽弱虫の壁を破ってチャンピオン  
森選手だったが、この場合の下五はどうも

○十七歳壁で温もり伝わらず 輝夫  
上七になってもここはのがいる。

▽十七歳の壁で温もり伝わらず

○ダンボール屋根にも壁にも変身し 侑子  
中八が冗長。どちらかを選べばいい。

▽ダンボールが壁にもなった震災地

○カーテンの壁に囲まれ試着する 謙次  
味わいのない説明句。やや下種っぽい

▽カーテンの壁覗きたい試着室

○ペン取れば壁がはだかる寿命かも 三美恵子  
方言には味があるが、さて文章にするとな

▽方言の壁がはだかる老いのペン

○倉敷の白壁柳のコントラスト 綾乃  
情景詩ならば情景が浮き出るように詠む。

▽白壁と柳が映える城下町

○知事室の壁を破れどまだ壁が 郁代  
見付けはいいが、表現と言葉探しにひと工夫欲しい。これからです頑張ってください。

▽陋習の壁を破ったガラス張り

○遺産が兄弟断ち切る壁になる 一典  
上四中八を整えるとするれば、着想はいい。

▽兄弟を断ち切る壁になる遺産

○可愛さに曾孫の写真壁に張る トキ  
独居老人の淋しさを強調するとすれば

▽壁に貼った曾孫と話す老いの部屋 賢治  
○マスメディア森を横目に壁の上  
下九音字の意味が解しかねる。

▽森総理世論の壁を越せぬまま 志津香  
○数々の壁にぶつかり新世紀

▽難問の壁がはだかる新世紀 ぶりこ  
○壁掛けに忍の一字が突き刺さる

○壁掛けにはなく「の」では 舞夢  
○恋の壁誰か破って下さいな  
説明句に近い。

▽手助けが欲し老いらくの恋の壁

○頑なに十七歳の厚い壁 サト子  
誰が閉じ籠るのか？

▽頑なに十七歳の厚い壁 千都子  
○壁側で涙こらえて向き直る  
涙の具体的表現が欲しかった。

▽壁側で涙こらえた別れの日

○壁の耳となりどうして聞く内緒 菜月

「となりどうして聞く」にひっかかりを覚える。また、壁に耳の句は多かった。

▽壁の耳内緒話を触れ回り

○年輪を角々に見せログハウス ふみ

ログハウスならば年輪を見せるのは当然で、この内容だけでは説明句といえる。

▽年輪の壁に重みのログハウス

○父の背が壁にはならぬ世の軽さ セツ子

下五の表現が今一つ

▽父の背を壁に世渡りした甘さ

○没落はしたが旧家のなまこ壁 彰雄

上八音字が説明句。着想はよい。

▽ありし日の栄華のあととなまこ壁 トシエ

○壁一つ隣は美人住んでいる

下五がこの句を駄目している。

▽壁一つ隔て美人のいる気配

○時の波若い壁には勝てません こそえ

時の波を時代に添うように表現すれば

▽I-Tの壁もこなして若い人

○おいそれとしりはとけぬ厚い壁 泰雄

上五の抽象的表現を具象化すると

▽姑と嫁立場ととけぬ厚い壁

○壁越しに無事を確かめ合っている ひさ乃

できるだけ具体例を引用するとよいのでは

▽壁越しに無事確かめている地震

○無党派と言う新しい壁を塗る 敏子

着想はいい。この調子で――。

▽無党派の壁武器として立候補

○この壁を通廻りして目的地 キミエ

長かった人生の壁という時は、幸と組合わ

せればよかったのでは――

▽長い壁速回りして今の幸

○要人の警護に盾と壁になる 晚翠

この場合盾と壁は同義語の併記となる。

▽シークレットサービス壁となる覚悟

○二年目というジンスクスに泣かされる 鈴美

ジンスクスだけは壁にならない。

▽ジンスクスの壁が破れぬタイガース

○悔しさに泣いてこぶして壁を打つ 英旺

具体化するには、リストラか米大統領選の

僅少差を詠むと句が冴えるのでは

▽リストラへ泣いてこぶして壁を打つ

○嵐去り壁の汚れは孫土産 喜代子

下五に無理があるよう。

▽壁のキズ可愛い孫の置き土産

○壁が無いグローバル化の波高し 章司

壁が無いではなく崩すが適當では

○岩壁のザイルに友の無事祈る 純子

▽岩壁のザイル信じる山男

佳句

新世紀壁をぬりかえ夢を積む (鳥玲子)

耐えて来た壁がこさえた座りだこ 栄翁

ベルリンの壁一夜でつなぐ西東 満子

南北の壁の崩れる日が待たれ 半覚

壁一重隣の人が気にかかる 政子

世の風波遮る壁に三世代 和香

壁紙を貼って我が家もロマネスク 無緑

温もりの一言壁も消えました 春江

年月を経てもとれない厚い壁 敬之介

深いしわ苦しくつらい壁のあと 宏子

新妻と雑煮の味が壁ができ 美代子

きびしい壁も叩きこわせたあの頃は 円女

壁破る限界知った泣きぼくろ 賢

不人氣の壁気にもせず続く首 像山

寝息まで聞こえる仮設のうすい壁 てる代

酒の乱亡夫が残した壁のしみ 幸枝

国境の壁に涙のあとがある トヨ子

壁一つはさんで姑の咳払い てるみ

愛憎の壁乗り越えた太い糸 美弥子

言い足らぬ所を言って壁ができ 志重

壁に穴あれば覗いてみたくなる 洋子

壁一面タレントがいる子供部屋 亜希子

(着眼点が良い)

ルミナリエ光の壁に亡母の顔 益子

(物語りを感じる)

私の句

壁に向き祈るしかないどん詰り



# 追悼 金井文秋さん

平成十三年一月十九日没 91歳  
法名 釋 清淨(浄土真宗大谷派)

## 金井文秋氏を悼む

西田 柳宏子

一月十九日十時三十分電話鳴る。川柳塔本社から千里さんの声。フツと厭な予感が走る。

「文秋さんが亡くなられました」90歳を迎えた文秋さんが、一月六日の川柳塔新年句会で、元気に句報を配っていた姿が甦える。

桃谷のNTT西日本大阪病院へ一月十五日行かれ、肝臓癌末期症状とかで十六日入院。

一月十九日午前一時十分逝去される。

夜の句会でも自転車で来られたり、大股で早い歩調でサッサと私など追越して行った姿が目につぶ。先に大坂形水、高杉鬼遊両氏を失い、今また文秋氏を葬る…実に淋しい。

葬儀の一月二十日は寒気激しく、加えて冷たい雨風の荒れた日だった。葬送は瓜破火葬場

文秋氏は明治44年9月2日生

自分で何も彼もやって、子供(三女一男)

孝行な父親だったようだ。

ふるさとを残して遠い遠い旅 文秋

この句は家に掲げてあった色紙の句(次女朝代さんによれば、若しかすると奥さんが亡くなられた時の句ではないかとの事)

文秋さんの御冥福を心からお祈り申し上げます。

合掌

これからはゆっくりしてネ文秋さん 柳宏子

## 追悼の辞

川原章久

とつとつあの慈父のような文秋さんが亡くなつた。何時お会いしてもあの笑顔で、優しいお声が返りました。もつそれも聞けなくて

残念です。昨年、最後の句会に大分お疲れの様子と、お顔色が悪く密かに心配はして居た矢先のこと、ああやっぱり悲しい現実になりました。

元同人で故好一氏に紹介され、南大阪句会へ行き、会長の文秋さんにお目にかかったのが私の川柳の第一歩でした。定年後それまで何の趣味もなかった私には、何もかもが第一歩からでした。

大先輩であるのに、皆から「文秋さん文秋さん」と心安く呼ばれ、私までもが何時も親しみと尊敬を兼ねて、ついつい「文秋さん」と呼べるお方でした。

お耳が遠いために、何処の句会でも一番前の席に居られるお姿が目から離れません。

何度か折りそうになつた筆を、今日まで曲りなりにも続けてこられたのは、文秋さんと亡き智子さんの、それとなくの御指導のお蔭だと思つて居ります。南大阪句会で最初に抜

けたあの天の句を短冊に書いて頂いたのを、今でも大事に持って居ります。

また句会で配られる何時ものゼリーは、家内の好物で最近孫娘が見つけ嬉んで食べます。毎月の句報にも随分御苦労が多かった事と思います。聞くところに依ると最後まで投句を続けられたそうです。

今後この通り弛まぬ精進をとのお教えたと思えます。

何時か「川柳は牛の涎、長く続ける事で上手下手は別だ！」とおっしゃいました。

この御教えを胸にこれからも続ける事を、御仏前に誓う次第です。

浄土から何時ものお声あめ笑顔 章久  
頂いた川柳いろはは忘れまじ 〃  
川柳に關魂込めて逝く日まで 〃

## 人生は儂いもの

寺井東雲

人生は儂いものと、今度つくづく思いました。

一月十二日に「渡すものがありますので、

都合つき次第おいで下さい。」との二女さんからのお電話があり、二時にお邪魔しました。

着くと机の前に居られ、「二、三日前から食べられないのです。行きつけの医者に大きな病院を紹介されたので、来週検査入院します。

四、五日かかるそうですから、二十四日の大阪新年句会は無理です。これを渡しておきます。」と言われ、句報の残り分、次回の賞品などを預かり、「お大事に」と言ってお別れしました。

その後すぐの十九日の午前一時に死去され、今夜通夜と言うのでびっくりしました。一週間前に話をした人がこんな事になるとは…。

これから南大阪句会の原稿を見てもらえず、編集を叱ってくれる人がないのは困ったことです。

一回り違いの同じエトでも文秋さんは、川柳一筋の行届いたお方でした。

今後は、この熱心さを大いに見習い、勉強致します。

私と同じ紙関係に勤めておられる息子さんの話によると、文秋さんが元気でボケずに居られたのは、川柳のお陰だとの事です。

今回の通夜、告別式に多数のご参列、誠に有難く厚くお礼申し上げます。

先生の目には見えない教えあり

東雲

## 金井文秋 作品抄

博識に見えて本屋の物知らず

人間から会話を盗った販売機

ごみ箱にある情報の落ちこぼれ

無駄な灯をこまめに消して嫌われる

危なっかしい福祉の中の長寿国

かすみ草君にはプーケ助演賞

働かせ過ぎを働かせ過ぎと言っ

男を選ぶ基準としての父がある

どう生きる三百六十五連休

背も腰も曲っていないから強気

欲のある顔と詐欺師に見抜かれる

歳時記を守った花にある香り

学歴社会規格人間製造所

三三五五 三三五五と七五三

鏡でも見せぬ老化を見る写真

転ぶときは転びます杖持っても

退屈もなく老いて行くありがたさ

まだ生きている足腰は修理する

もの忘れこんな美人の名前まで

長生きが子の定年を見てしまっ

九十まで持つ身体だと決めている

——『川柳塔』自選句から抜粋

# 本社 二月句会

二月七日(水)午後五時半

アウイーナ大阪

立春も過ぎたが、冬型気候は変わらず、あいにくの雨となった七日、百九名の参加を得て二月句会は、にぎやかに開催された。

はじめに、一月句会まで休まず出席され、十九日に亡くなった参手の金井文秋氏(91歳)の御冥福を祈り黙祷を捧げる。

司会者からは全日本川柳誌上大会への参加呼びかけがあった。

お話は相談役の西田柳宏子さん。高野山の川柳塔碑が、平成元年11月建立されたいきさつとその後について、思い出を交じえながら話す。

故西尾菜氏の碑文から「死してなお雅号を以って呼び合い、楽しくここに眠る」を紹介し、第一回法要に百名近い参加があったが、年々減っていくのが淋しく、参加を呼びかける。

月間賞は堺市の志田千代さんに輝く

(司会―遠野) (記名―月子・澄子)

(受付―睦子・保子) (清記―希久子)

## 席題「雪」

坂田和歌子選

新雪の六甲仰ぐ震災忌

雪国に雪どっさりとお正月

風花へ焼く芋の声あつたかい

雪愛でているのは雪を知らぬ人

妻のるす雪見の酒としゃれてみる

償いの心へ雪よもつと降れ

とほとほと雪明かりでも信じたい

雪だるままじ父に似た太いまゆ

霊柩車ゆるゆる牡丹雪の中

歩を縮め転ばないように雪の道

雪まつりあの日の友はもういない

雪だるま逢わねば恋は始まらぬ

雪明かり男心に火をつける

大雪の怖さを知らぬ奈良に住み

ひとひらの雪のごとくに逝つた母

身の丈ほどの雪女なら勝てるやろ

愛されて雪の重さをまだ知らず

雪女逢いたくなくて汽車に乗る

赴任して雪の恐さをまだ知らず

何もかも話そう雪深い里で

ああ平和いつまで白い雪が降る

雪白くわたしの罪が恥ずかしい

一升瓶持たす酒屋の雪だるま

けなげにも雪は汚物にふたをする

雪の夜の心中はなしときめいて

雪もよい今宵はひとり赤ワイン

雪うさぎ雪の温みを知っている

雪になり泊る理由はできたけど  
すぐ朱に染まる雪もわたくしも  
三叉路の雪に証拠をつかまれる  
住所録また一人消す雪ばかり  
雪が降る申し分なし昼の酒

雪国の人は上手に歩いている

佳

雪ですよそよつかと会話をれつっきり  
こいちやんにつくつてあげた雪タルマ  
哀しみを一つ握っている根雪

立春や雪ん子ころり転ばせて

雪降れば北のこけしがはしやぎ出す

雪の立場で真っ白になっている

ひと言が多くてぼたん雪になる

逢うてきたはてりを冷ます雪の道

かた乳房焦して雪はふりつづく

兼題「タクト」

シンフォニータクトがつくる夢の音

子のタクト五人囃子が唄い出す

憧れの指揮者の余韻持ち帰る

第九振るタクトが渡す新世紀

列島が揺れる能天気なタクト

タクト振り子供の羨しています

好意もつひとへ一途に振るタクト

由一

希久子

森子

澄子

義茜

かすみ

美代子

美代子

森子

美代子

靖巳

定男

しげお

みつ子

松原寿子選

剛治

仁清

和香

朋月

ダン吉

東雲

瑠美子

蝶が舞うタクトの魔術春を呼ぶ  
春ですよ土筆にタクト振ってます  
舞夢

コーラスのタクトは髭でもっている  
保子

九十二歳のタクト世界を制覇する  
いわゑ

シユトラウスのワルツタクトで滑り出す  
章久

フジモリのタクト日本で投げ捨てる  
正雄

ピアノニシモのタクトゆっくりきる空気を  
萬的

英雄のタクトが今日も手弁当  
一步

母ちゃんのタクトはいつも不機嫌だ  
月子

タクト振る奴をマンガにしておこつ  
紫香

ペテランの妻のタクトにミスはない  
諷云児

タクトにも疲労がたまっている音だ  
定男

何べんもおんなじ事を言うタクト  
しげお

赤い糸つけて夫の振るタクト  
菜月

あつち向いてはいタクトに魔法かけられる  
隆盛

オッハーのタクトが朝を切りひらく  
美子

路のとう春のタクトを振りにくる  
アキ

母さんのタクトへ揃う春の膳  
英子

欠点を探しつづけているタクト  
蜚

クライマックスタクト地を這い天を駆け  
柳宏子

ともだちの笑顔いっぱい呼ぶタクト  
朝子

大国は容赦のしないタクトふる  
稚代

タクト振る後ろ姿はすきだらけ  
義

科学者のタクトの先にある地球  
あやめ

指揮棒はげんこつだった父の音  
遠野

魔法のタクトで心を春にして女  
軸

兼題「偶然」 吉村一風選

悲喜劇を生んで偶然知らん顔  
剛治

偶然か妻の輪ゴムが飛んで来る  
清山

偶然が重なりすぎて恐くなる  
庸佑

親も子も同級生と言う御縁  
伽羅

頑張ったわけでないのに運が向く  
千里

偶然を美しくする花時計  
雅文

偶然が重なり起きた大惨事  
寿美

偶然にしては手順が合いすぎる  
あやめ

満員で足を踏まれてからの縁  
重人

勝てたのは偶然ですと新王者  
柳宏子

日航のニアミス人災としか言えず  
由一

偶然に逢っても火花散らす女  
紫香

偶然の失敗からもノーベル賞  
正雄

偶然にも春の森から響き合う  
寿子

美しい偶然だった人想う  
利昭

偶然に初版見つけた古書の街  
萬的

柿の木坂辺りで偶然を期待  
森子

偶然に櫓山で会う過去の人  
弥生

偶然を装い遺跡掘り出され  
満州

偶然に会った振りするネオン街  
たもつ

指定席隣の隣は美女だった  
希久子

偶然という神様の謀りごと  
アキ

偶然に出合ったことにする見合い  
倫子

偶然が重なり好きな人になる  
いわゑ

早退の上司と部下が甲子園  
一步

偶然にしては話がうますぎる  
月子

湯の宿で会っては困る人に会う  
楓楽

偶然の出合い 法善寺へ回る  
信治

偶然をこ縁に変えた老いの知恵  
月子

ジョーカーが来た偶然と思えない  
扶美代

偶然が重なり今日の大惨事  
寿子

三度目の偶然どこか生臭い  
天笑

偶然に来てこの街が好きになる  
朝子

偶然に聞いてしまった父の愚痴  
人

偶然を期待している回り道  
菜月

偶然の効果で花が咲くふたり  
保子

住

地

偶然の出会いうれしい縄のれん

天笑

天

偶然の風に火種が燃えたがり

たず子

軸

偶然が偶然を生みドラマ沓え

兼題「消す」 岩佐ダン吉選

噂消す男とつわさするおんな

蜚

古くても良きものは消したくないね

深雪

こめかみに消した男の影がある

アキ

古日記涙で消したあとがある

鐘造

嫌な過去すっぱり消して今生きる

いわゑ

屋根までも上がらず消えたシャボン玉

利昭

釣橋のむこうへ消えた影一つ

定男

悲しみをゆつくり消してゆく月日

和香

歳月も消せぬヒロシマのケロイド

隆盛

取り消せぬ言葉を吐いた日の別れ

朝子

情熱はまだ消し壺に溜めてある

春

真っ白に消したい過去が疼いてる

茜

リストラに笑顔が消えた青テント

とし子

あかり消したら星がよく見えるのに

金太

コンパクトの中の男をひとり消す

雅文

失言を大笑いして消しておく

瑠美子

過去を消す私の影も消えている

みつ子

消えてゆく虹だからこそ美しい

メ女

おばあさんが一人消えたらみな消えた

義

ばらが散る胸のあかりを消すように

いわゑ

煩惱を消したらおなか空いてくる

希久子

閑古鳥商店街の店が消え

東雲

シナリオのなかでは消せる罪がある

寿子

日の丸に決して消せぬシミがある

楓

人ひとり消すエンピツを尖らせる

たもつ

パイプが出来て老舗が消えていく

周信

本心は修正液でひた隠す

仁清

地球から核を消したい夢一途

朝子

今日の灯を消すと悔いのないように

希久子

自惚れはカルテの中で消えていた

扶美代

削除キー地球丸ごと消されそう

千里

九条を消したらエライことになる

重人

消去法でゆくと正論が風になる

森子

住

過去消せばいつか私も消えていた

正坊

あのことは消して明日を晴にする

シマ子

アハハと笑ったら涙が消えた

美代子

不安消すために毎日シコを踏む

信治

肩書きが消えて世間を広くする

アキ

人

九条のあかり消すまいペンを持つ

一步

順風満帆すつかり消えていた初心

扶美代

天

すぐ消える善意それでも今日明日も

弥生

不安消すとっても温い君の手だ

軸

この時代ぶじに渡って居るふしぎ

満津子

兼題「渡る」 前たもつ選

母さんが最後に渡る丸木橋

充子

渡し場であかか乗った泥の舟

剛治

カメレオンとても上手に世を渡る

雅文

渡る世間に気のいい鬼も居てまつせ

一風

世渡りの下手な親父のちびた靴

柳弘

世渡りを気にせぬ父のごつい手だ

昭子

世渡りの一つに黙秘権がある

飄云児

学力はないが世渡り甲の上

正雄

世渡りに拗ねたのも居る青テント

柳宏子

義理チョコでないで渡すのが怖い

いわゑ

川三つ渡って届けたチョコレート

寿美子

渦渡り復興の灯を見えています

つづや

あなたとならば渡れそうだと口説かれる

弘一

大人への過渡期で揺れている息子

哲夫

骨壺の中に私の首がある

セツ子

信号を確かめ渡る盲導犬

メ女

淋しくて海を渡った冬帽子

和歌子

フリーターと言う若者にある孤独

アキ

恐いけど渡る野イチゴ熟れている

定男

いい顔で三途の川を渡りたい

茜

行きずりの老婆に手を貸す歩道橋

かすみ

歩道橋老いの歩幅を試される

希久子

水溜れの橋を渡れば飢えてくる

柳宏子

NGがつづいて川が渡れない

とし子

渡し船蝶も一緒に乗せてやる

たず子

渡し船親子行き交う温い川

正雄

洋

つり橋を渡るおんが先をゆく  
あの橋を渡るとそこは僕の家  
丸木橋渡ると逢える胡蝶蘭  
煩惱を引きずりながら渡る川  
隅々に妻の指図が行き渡る

佳

欠席をした日に空は晴れ渡る  
橋渡る心の揺れを止めてから  
さむすぎて貴方の胸に渡れない  
太鼓橋手を放しなやすべりなや  
綾取りの橋を渡って嫁に行く

母さんが手渡すぬくいお弁当  
恩一つ返しに來ました長い橋  
世渡りは下手でもコロリ逝きはった  
世の中を一人で渡る顔をする

人

兼題「天」  
河内天笑選

ビフテキもキャベツも天の贈りもの  
天までの三十坪は僕のもの  
天国へ行き着くまでのお香奠  
天命を知って余生はわたし彩  
天罰と思ふ痛みに堪えている  
花結び天地無用の荷が届く  
娘の門出天氣予報を気にしてる  
リストラの心配がない天下り  
洗濯物干してわたしの高い天

天  
地  
人

瑠美子  
一夫  
岳人  
菜月  
尚士

瑠美子  
金太  
みつ子  
信治  
大輪

千代  
扶美代  
保子

充子  
しげお  
睦子  
希久子  
鐘造  
照子  
風云児  
寿美

掌の雪消えぬ間に願うごと  
人間の天敵人間かもしれぬ  
汗みずくここまできたと仰ぐ天  
天からの授かりものも反抗期  
満天の星を仰いで青テント  
天職と思ひせんべい焼いてます  
パパの夢天まで届け肩車  
内乱の国へと続く青い天  
核のエゴきつと天罰落ちてくる  
天地の氣もらつて弾む春の靴  
天女なら掃除洗濯しつくれぬ  
私の翼はいつも天目指す  
難病も天のさだめと受け入れる  
晴天に働きぶりを見てもらう  
運を天に任せさつさと飯を食う  
菜園で天を見上げるくせがつき  
有頂天おせじではめただけなのに  
天国で使えぬ貯金勘んである  
ボケないで天寿全うしたい夢  
天敵が僕の恋人狙つてる  
天国を出てお茶漬が欲しくなり  
澄みきつた天が許してやれという  
なにもかも許してしまふ青い天  
天下取る夢も挫折も十七歳  
夢抱いて天までとどけ豆の蔓  
天罰と思えば恨むことはない

佳

天にいま雲海ジェット機から眺め  
指とつう天与の機械もつている

度  
アキ  
ゲン吉  
月子  
美代子  
利武  
西女

一風  
楓楽  
正坊  
希久子  
深雪  
しげお  
大輪  
隆盛  
菜月  
弘一  
朝子  
一人

重人  
賢子  
半蔵門  
千里  
アキ

雅文  
欣子

天井の海老は私より厚化粧  
天の川携帶O.F.Fにする二人  
天からの試験か夫婦よくころぶ  
人間の驕りを天は見逃がさぬ

地

片思い天に草笛突き抜ける

天

父さんに家では天下とらせたい  
そのうちに要る宇宙ゴミ収集車

志田 千代

川柳は人間である  
21世紀記念ふあうすと川柳大会  
日時 13年4月1日(日) 11時開場  
場所 兵庫県民会館9F JR-阪神元町駅下車  
講演 「世界のユーモア」 音成日佐男先生  
宿題 「世」 田中節子選  
「求める」 山本桜子選  
「望」 久保内あつ子選  
「抱く」 小林幸子選  
「指」 西出楓楽選  
「伝える」 森中恵美子選  
「島」 石井冬魚選  
「進む」 泉比呂史 謝選

席題なし 各題2句 出句締切12時  
会費 二千円(記念品発表誌・懇親宴予定  
2月号P109で宿題「伝える」が抜けて  
いました。お詫びします。

# 老地獄

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

岸和田川柳会

長谷川呂万報

気に入らぬ嫁は息子のお気に入り  
川端康成の気に入りと言う伊豆の宿  
孫並べゆつくり配るお年玉  
欠点はパパそっくりの楽天家  
ここだけを直せばとてもよいお方  
欠点をかばいあつてる老夫婦  
東西の壁のこだわり少しある  
伝統の味にこだわる三代目  
頑に水にこだわる手打ちそば  
毛筆にこだわる父の年賀状  
伝統の味にこだわる古暖簾  
こだわりの妻にまかせぬ酒の燗  
核はゼロこだわるペンを持っている  
騒ぐ子等相手に教師不登校  
子等遅く救急サイレン胸騒ぐ  
ピーポーに子を持つ母の胸騒ぎ  
土俵外騒ぎを止める決め手なし  
すぐ騒ぐすぐ忘れゆく日本人  
自民党人騒がせな茶番劇

呂万 萬の 笑司 路子 甚一 狸村 東雲 昭二 俣子 洋 盛之 みつ江 ダン吉 弘子 鹿太郎 仁緑 東吉 苑子 穰一

東大阪市川柳同好会

森下

愛論報

あの人が音頭とるから騒がしい

富士子

うたた寝の小さな母の小さな咳  
誘惑を咳で上手に逃がしている  
気管支炎給ぐらいでは治まらず  
咳払い母が片付け始め出す  
盛大にずるい男のお葬式  
バツ一でだんだんずるくなる女  
ずるい奴ずるい相手をすぐみつけ  
伏兵を味方に入れて勝負する  
紅葉狩り母娘に贅の松花堂  
駅弁がおばさん族を喋らせる  
雨つぶが落ちて輪廻を説いている  
落日に映えて佳人の如き塔  
点滴はいのちの音で落ちてくる  
落ちてゆく友の背中を見たネオン  
甚五郎門だけ見ても日が暮れる  
義理ひとつ済ます門扉の重い音  
山門の風は情けを溜めている

美弥子  
猪太郎  
故文秋  
和代  
雅文  
萬的  
度  
愛論  
シマ子  
太郎  
みどり  
晋吾  
千里  
とみを  
東雲  
ばっは  
湖風

ローズ川柳会

山崎

君子報

おしやれさんお年寄には褒め言葉  
おしやれより背筋伸ばそう十二月  
秒よみの善くも悪くも二〇〇〇年  
むらさきの髪しつとりと老婦人  
耳底に軍艦マーチ十二月  
長田まで限なく照らせルミナリエ  
今も良い昔も恋し老いの春

藍  
哲子  
トミエ

喪中にて音なく過ぎる十二月  
あくせくとしてもせずとも除夜の鐘  
夢はまだはるかに  
また閉店寒気が湧える暮れの街  
中広のリボン時節は戦まみれ  
今どきもクレヨン一にママを描く  
ドレスアップ誰に逢うのか娘の笑顔  
夕茜わたしのころも染めたいな  
落葉はく老母冷たい風の中  
十二月心を締める紐が欲し

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

震度六心にゆれがこびりつき  
震災で墓石倒れたまま暮れる  
床の間も飾り地震の修理終え  
震災で年末仕事倍になり  
年末に間にあい墓地も修理した  
復興へ頑張る老いの底力  
暮れを掃く雪ない地割れ氣に掛かる  
西部地震人の温もり肌で知る  
ライフワーク地震と共に崩れ去る  
震度六恐怖は一生忘れな  
震災の思い出すてて歩みだす  
ボランティアの協力を受け有難い

サークル檸檬

小林 一夫報

もう十年生きるつもりの日記帳  
真ん中にすえられ愛に飢えている  
寒椿ぬくみを入れて独り逝き

正坊  
いわゑ  
哲夫

真ん中の空席を待つクラス会  
真ん中の鼻が妥協を許さない  
鍵穴の真ん中へんにあつた賭け  
老いた今自由と孤独だけ残る  
冬型の気圧へ自分甘やかす  
真ん中を歩くあやしまれぬように  
世紀の橋無事に渡つた爪のいろ  
真ん中の椅子へ嫉妬の目が刺さる  
良心の真ん中辺に住む悪魔

高槻川柳サーク卯の花

川島諷云見報

遠野 澄子 義子 房子 楓楽 希久子 智恵子 靖己 あずき

リストラへハローワークでつく吐息  
後継ぎがない吐息の小商売  
豆の蔓天まで伸びてきた吐息  
美人だため息だつて色つばい  
くやしさを涙はひとりになってから  
寅さんの涙に人は癒される  
美しく泣いて見せませう女優です  
流せない涙が胸の傷に沁む  
友情がライバルとなり軋みだす  
冬の朝開ける雨戸も身も軋む  
古くても軋まず走る父の貨車  
軋む日もあつた夫婦の糸ぐるま  
開け締めたんびに軋む嫁姑  
土壇場の人の情けは忘れない  
土壇場でああなたの心知りました  
土壇場で自信湧き出る年の功  
土壇場で踏み切りました産みました  
土壇場で男は背中など見せぬ

庸佑 武史 節子 たい子 尚士 澄子 求芽 吉之助 よ志子 波留吉 活恵 しげお 高栄 スミ子 義一 あやめ きよえ

どろどろのいじめに切れる十七歳  
年金をゆさぶるいじめゆるせない  
いじめから愛と気づいた縄電車  
いたずらのうちはよかつたいじめです  
MRI僕の肉臓輪切りする  
送らせて欲しいとねだる片想い  
立ち向かう酒豪へ僕のウーロン茶  
虫干しに心も干して灰汁を抜く  
ワンちゃん死んで主人と散歩する  
かくれ棲むごとく目深にする帽子  
除夜の鐘聞きつつ脈を確かめる  
惜しくない命ひとりでない命

三幸川柳教室

三宅 保州報

秀夫 泰雄 靖己 慶太 柳宏子 満寿蔵 無縁 五月 治三郎 晴美 諷云児

追い詰められた内気な猫が爪立てる  
大臣も内気だったと言う自伝  
多数決内気はいつも群隊の中  
無防備で流れに添っている内気  
内気でも生きた証の紳士録  
シャイだからいかつい仮面持っている  
運動会笛で走る子転がる子  
口笛が今日のドラマを誘い出す  
草笛が少女の顔にしてくれる  
警笛が少年法を塗り変える  
寒行の尺八の音が啼いている  
月のぼる銀河を鼓笛にして  
笛吹きケトル話中断させにくる  
SLの汽笛は父の底力  
一回でウンとは言わぬ臍まがり

美智子 公子 嘉平 健三郎 秀男 かず代 碧 満洲子 昭枝 当代 章子 美子 和子 栄之進

虫めがね無しでは困る字書を引く  
夕餉すむ家に二次会連れて来る  
前頭葉に点滅してる黄信号  
掌中の珠が謀反をくわだてる  
困難もあつたが出来た逆上がり  
あの文句心の襲に仕舞い込む  
お茶漬けへ小さな文句流し込む  
過酷さも文句は言わぬ足の裏  
生きてゆく決まり文句を抱いたまま  
ジャスマンティー殺し文句を聞かされる  
文句など言わない母の座りだこ  
飲み込んだ文句が喉で引っかかり  
寝言にまで妻の文句を聞かされる  
内気ですいとも抜け道探してる  
キュービッド内気な恋に気がもめる

佳句地十選 (2月号から)

赤川 菊野

日本一短い手紙読んで泣く  
自分史に軍靴の音がするページ  
新世紀輝く未来予約する  
人生の迷路にほしい道しるべ  
モザイクがそろそろかかる前頭葉  
咲き誇るバラにも見えていたやがて  
家宝です値打ちあろうとなかろうと  
ステッパが乱れて秋が忍び寄る  
冬空に洒落たジョークは消えたまま  
正論を吐く末席の箸袋

静風 重人 多賀子 諷云児 桂香 みつこ 度 森子 楓楽 寿美

城北川柳会

川久保睦子報

未来への夢は宇宙を回る街  
 喋りすぎ心配そうに猫が見る  
 さまざまなドラマを秘めて今の幸  
 熟成をまたぬドラマが出發待つ  
 人間の心の奥は悟られぬ  
 ハッピーな余生でドラマ終結す  
 ドンッ但未来は大樹かも知れぬ  
 天才のアイデア怖いことを言う  
 こたわりを捨てれば生きる知恵がわく  
 楽しみな未来に希望ふくらます  
 さんさんに待たせて彼は「忘れてた」  
 頼られてさんさん苦勞背かれる  
 長電話ネコもあくびを繰り返す  
 受け売りで喋った噂風に乗る  
 花と実のバランスとって生かされる  
 知られたいことだけ喋るあの人に  
 よう喋る客に疲れた両の耳  
 キリストの国で戦火はまだ絶えず  
 紅一つ引かぬ亡母への曼珠沙華  
 介護保険まだこの上に自費までも  
 チイハイバスプログラム組んでチイバス  
 終戦を紅いリングが喋りだす  
 ワイングラスに沈めた影がよく喋る  
 廃船が漂っています海の危機  
 したたかに生きて開化の春を待つ  
 ポストまで足早になる冬の中  
 善人の小さな嘘にだまされる

史風 静江 春蘭 義江 美代子 トヨ子 順三 求芽 はじめ 東雲 政子 久留美 登美子 ただし 寿美子 道子 志華子 あいこ 睦栄 高栄 朝子 達子 昭子 白峰 千里 倫子

スペアが大事安心して生きよ  
 自分史にギョッと詰まっているドラマ  
 少年の広場に落ちている未来  
 転ぶ度何か掴んでいる拳  
 ぬくもりを部屋に残して孫帰る  
 残り福無邪気な御手が引き当てる  
 意識ない母に四度目の初日の出  
 そっだとは気付かず逃がす福の神  
 耐えて来た父の背中を見て育つ  
 手を合わす心に嘘が隠せない  
 近すぎる福に感謝を忘れまい  
 新世紀地獄極楽見て通る  
 母一人極楽切符買っている  
 煩惱を水に流して初日の出  
 桃色の便りにポスト照れている  
 松の内すぎて二人の暮らし取り  
 七福の神を信じて初詣で  
 熟年の自由気ままな始発駅  
 家中の笑顔が囲む孫誕生  
 割れ鍋にとじぶた夫婦長持ちし

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

典子 あやめ 公一 ひかり 文仙 吟笑 まさる はつ恵 かおり 輝夫 勝 坊太郎 寿々女 いさむ あきら 放任 治延 八重子 マツエ 奴風

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

空の雲一気晴れて春日和  
 ニンゲンの背なにも見えるパーコード  
 平凡に生きろと額の亡父が言う  
 撒き餌にもミカンにも来ぬ猫が番  
 世紀末バットは人を殴るもの

故郷の姉のしぐさに母在ます  
 六十は小僧孕寿の山登り  
 あの城は持たぬ殿様二人居る  
 二次会はやはり若い妓居るところ  
 パート料タンス預金にすると  
 十年日記贈り傘寿の妻祝う

竹原川柳会 時広 一路報

寒い日は犬も私も丸くなる  
 流すものがいっぱいあつて目を閉じる  
 二千年洗い流して明日を待つ  
 流れ星恋の涙が落ちてくる  
 流れに逆らう蛙の母性愛もある  
 急流にせかれるモミジ追っている  
 えんま様も涙を流す時がある  
 生々流転椿さわまる滝の口  
 聞き流すことを覚えて敵が無し  
 壮快な和音が響く川下る  
 飲む会は和がだんだんと広がって  
 和やかな顔のままでは戦えぬ  
 ホーレン草と気あいあいと芽を出した  
 平和です料理番組みています  
 猫のしぐさへ夫婦の夕餉のみけり  
 寂しさをAIBOの芸が和らげる  
 家の内子供さずかる目出度さよ  
 ぐいのみ土の温みにある癒し  
 飲みすぎて無口な人が三枚目  
 出る咳を孫にやらぬと飲む薬  
 これ以上もう飲めません下戸の弁

晴翠 水笑 虹汀 高明 正劍 四郎 高朗 正劍 蘭幸 夏喜 寿枝 貞子 正宏 蝸牛 不朽 菁居 節夫 孝枝 汎美 房恵 栄子 笑子 万年 喜久恵 比呂子 未希 慶子 規代

手のひらに人という字を書いて飲む  
 名水で飲んでも効かぬ風邪薬  
 あの時は酒少々と言つたのに  
 よく飲むが干手観音には勝てぬ  
 羊羹の好きな男の飲みっぷり

尼崎尾浜川柳会

田辺 鹿太郎

精一杯生きぬき今日も静と動  
 子供部屋蛇が電池で動いてる  
 ようこびを配る小さなボチ袋  
 感動の一瞬産声聞く至福  
 ライバルがそつと横から進路指す  
 新世紀宇宙つめて動き出す  
 大掃除嫁先頭で皆動く  
 あの癖が好きで一緒になつた妻  
 初詣で家族の祈りバラエティー  
 屠蘇気分まだ抜けやらぬ宵戎  
 日々喧嘩しつつ健やか祈りあう  
 遠くから母さんの無事祈つてる  
 吊革の動きにまかす宮仕え  
 糸切れた凧を狂わす不況風  
 気遣いが端々に出る目の動き  
 正月を写そういい顔ハイポーズ  
 胎動へ母となる日の指を繰る  
 七福神巡りへ欲と連れ立って  
 暁に祈る太平洋の広さかな

南大阪川柳会

吉川 寿美報

百歳を輪切りにしたいその秘訣  
 東雲

包丁と勝負レモンが透けている  
 十二月輪切りにしたいものばかり  
 一日一善残り時間をあたためる  
 一日の長さ短さ浮き沈み  
 一日が長い土曜の休肝日  
 セールスの一日ノルマ追いかける  
 一日は気分しだいの長短  
 島国を離れ味わうおおらかさ  
 O型で太ってますの長女です  
 おおらかな夫の広い傘の中  
 おおらかな妻も時には夜叉を抱く  
 賑やかにやれと自腹も切るつもり  
 おおらかな夫私を掌の上に  
 おおらかな汗で主役を演じ切る  
 遠来の人気集めたルミナリエ  
 確かに男の愛を輪切りする  
 輪切りにした金太郎飴ありやありや  
 有頂天次の一歩の脚の位置  
 有頂天梯子外されたも知らず  
 有頂天私の耳がなくなつて  
 玉の輿決つて母は舞い上がる  
 遠来の理由を伏せた客が来る  
 遠来の客が落した過去の影  
 遠来の星の光にあるロマン  
 幻の酒遠来の友と酌む  
 遠来の白馬冬の旅を舞う  
 おおらかな胸で泣きたい時がある  
 おおらかなとも昼行灯とも言われ  
 有頂天の隙を狙っている二の矢

なぎさ  
 アキラ  
 朝子  
 重人  
 柳伸  
 久峰  
 頂留子  
 たもつ  
 直子  
 寿美  
 志華子  
 故文秋  
 淑子  
 雅文  
 ひさ乃  
 遠野  
 日出子  
 のぼる  
 柳宏子  
 蛙  
 敏子  
 章久  
 洋子  
 度  
 庸佑  
 珠美  
 千里  
 萬的  
 澄子

静風  
 喜美子  
 力  
 半覚  
 一路  
 その  
 江美  
 鹿太  
 尚利  
 孝一  
 哲嗣  
 龜与子  
 イサミ  
 まさ  
 美智子  
 弘治  
 夢之助  
 正治  
 満寿蔵  
 澄子  
 十四郎  
 諷云児  
 柳宏子  
 紫香  
 なぎさ  
 川柳ささやま  
 酒井 靖子報  
 癖のある字ですあなたとすぐわかる  
 二十世紀最後の愚痴を屑籠へ  
 ちぎれ雲一緒に消える亡母の声  
 きつちりと性格詰めるおもちゃ箱  
 あの時の嘘がきつちりつけとなる  
 きつちりと返事が出来たランドセル  
 迷惑をかけずに消える神だのみ  
 粗衣粗食でもきつちりとしてた母  
 計りなど要らぬきつちり年の功  
 きつちりな性格故に進めない  
 消え失せし想い呼びたい年賀状  
 これからは巨人嫌いの輪に入る  
 七人の敵もきつちり顔洗う  
 消えないように包んでおこう掌の温み  
 老眼鏡かけてきつちり値札見る  
 嫌いだが金の成る木を持つている  
 敵しさが消えて八十路の温い風  
 純子  
 恵美  
 多美子  
 美智子  
 とみ子  
 つや子  
 かほる  
 君代  
 美沙子  
 美緒子  
 毬子  
 房江  
 八重子  
 寿子  
 富美  
 可住  
 靖子  
 螢  
 まさ子  
 章久  
 忠良  
 多哥由  
 蟹郎  
 節子  
 枝

川柳会梨花

石上 悦子報

罪滅ばしの睡眠薬をもつひとつ  
 今だけの恋に生きてる私です  
 しぶちんやないで煎茶の一雫  
 ことごとく背く絵筆をもてあます  
 突然に病んでばらばら夢にすれ  
 ほろほろと泣かせ上手な村芝居  
 だんだんと男の腕になつてきた  
 冬の音万本の花地に返す

その時が来ててもこの手は離さない  
 ばらばらの心をつなぐ孫ができ  
 バラバラに植えてもちゃんと芽を出した  
 ばらばらのファッション個性とは何か  
 カリスマが掴むばらばらの心  
 家中の時計の時間ばらばらだ  
 人工孵化竜宮知らぬ貝や魚  
 人工の虹に動かぬ白い鳩  
 歴史まで取つ造でした考古学  
 ロボットでねつ囲まれた夢をみる  
 夫への愛は人工甘味料  
 しばらくは妻が胸はるポーナスだ  
 心では毎晩妻に手をあわす  
 良妻の仮面時々陽に晒す  
 妻の目がいつもちらつく靴の先  
 残り物食べ勇ましい妻の声  
 ウルトランの妻になりたい私  
 玄関に灯がついている妻が待つ  
 妻の座も母と格上げ自若なり

川柳大阪

坊農 柳弘報

雲さえも忙しそうなの暮れ  
 雲に乗り地球上から見てる夢  
 微笑むと集中出来る私です  
 ローカル線雲はゆづり語りかけ  
 働いた脳目も振らぬだが貧乏  
 集中をすれば勝てると言われても  
 明日へと夢かきたてるあかね雲  
 緊張の席にホットな巧い洒落

幸代 重忠 真砂 芳光 求芽 悦子 美恵子 よしえ 一夫 典子 行男 東雲 幸子 ただし 蛙 和歌子 高栄 喜楽 照月 芳香 すがお 呷笑 かよこ 柳昌 美花

好きな人どうにもならん雲の上  
 的を射る短い祝辞巧い人  
 封を切るまでは集中する鉄  
 夏雲のように心が燃えた頃  
 集中のかたちへゆたかなる写経  
 雲掴む話がノーベル賞になる  
 世に巧い話おませんか  
 ひとつと支えられない悪友ありがとつ  
 巧妙に支配されている亭主の座  
 うまいなあきつちりサイフ空にされ  
 一芸に集中させる玉の汗  
 集中の横で子猫が欠伸する  
 紅白に集中あとは除夜の鐘  
 集中力高めジャンボの列にいる  
 神経を集中して見る政治記事  
 雲は流れて昨日の敵と和解する  
 新世紀へビも一皮脱いで行く  
 華やかなネオンの陰でぼつたり  
 五割引きそごうに人が集まった  
 言い訳が巧くて猫になめられる  
 墨を打つ匠はよそ見などしない  
 集中力だんだん鈍る歳やろか

川柳塔なら

坊農 柳弘報

騙されて別れの日まで踊り抜く  
 笛吹きの上質な妻に踊らされ  
 血走った群れが行き交う暮れの街  
 踊り子のしなを支えている鼻緒  
 タイエット宣伝効果無視をする

青道 章久 希久志 川童 朝子 利昭 一風 宏 信醉 洛醉 國治 鉄心 ダン吉 敏 金太 まつお 本蔭棒 一步 笑風 重人 柳弘

世紀末心残りがたんとある  
 口コミで広め集まる仲間達  
 フライパンだけで始めた新世帯  
 踊らされ踊って消えたバブルです  
 旅の朝蛇口の水も踊りた  
 行列が宣伝がわりラーメン屋  
 切り捨てた良さが分かった三十年  
 平凡に暮れて今年もありがとつ  
 倒産も宣伝になる店じまい  
 塾とパチンコ宣伝上手景気よく  
 宣伝が下手で幸せ逃げていく  
 化粧品の宣伝老母もたちどまり  
 鍋の底つついた流転人生譜  
 一つ鍋つつく二人は出来ている  
 薄着してワルツの膝が笑い出す  
 着ぶくれの車のろろ暮れの街  
 車内ピラわたり近頃世に遅れ  
 宣伝に洗脳されて無駄遣い  
 入相の鐘に消したい罪一つ  
 妻の乱つづきこげ癖ついた鍋  
 ためらいを明日へ引きさる夕茜  
 早耳が人の不幸を触れ回る  
 鍋つつく箸痛いとこ突いてくる  
 女から別れ切り出す古都暮色  
 ラストダンス踊れなかつた靴がある

大原川柳社

矢内寿恵子報

くたびれた胃に青汁を注ぎ込み  
 雲行きを知りつつ学ぶ人だまり

とし子 敏子 沙置子 あやめ 美和子 春雄 さと美 美代子 水魚 むつみ 茂雄 絹子 春蘭 長生 國治 章久 孝子 眞生夫 道子 和夫 秋雄 良一 秋泉 弥生 恵子 昭子

雲行きはどうあろうとも朝の靴

雲行きは安泰我が家若返る

雲行きを伺いながら忙し

一雨が来そう雲行き忙し

雲行きが怪しい先に寝るとする

雲行きはどうあれ明日は旅立つ日

雲行きへ心模様かゆれ動く

雲行きをやたら気にする老母の旅

雲行きをそつと伺い仲間入り

雲行きはどうあれ今朝もめしを炊く

雲行きに悪さに狂う予定表

雲行き都合に任すのはごめん

雲行きがいいから飛躍してみよう

雲行きに悪さに本音言ひそびれ

雲行きに任せて待とう新世紀

くたびれた羽織は父の殊勲賞

横着者一気仕事にくたびれる

行く雲よ明日も良い夢くださいな

伸びきった輪ゴムお前も定年か

雲行きを読んでいるのは風見鶏

尼崎いくしま川柳会

春城 年代報

新世紀地球に夢が先走る

孫子にも六百円背負わせる

新世紀何でも拝む喜寿の坂

二十一世紀老いの財布が空になる

二十一世紀八十路の元気で見ています

新世紀不老長寿の夢をみる

新世紀三日天下の睨み鯛

あすなろ

絹子

静子

たづ子

みさえ

南花

敏子

巴子

しず

貴美子

悦子

妻子

辰江

玉恵

あやこ

さちこ

こふゆ

みづえ

はじ芽

寿恵子

東園

昭三

富江

夢之助

正子

純

一笛

ロボットと暮らす二十一世紀のわが家

いざこざを白紙に返す縄のれん

真つ白な雪の中から赤い実笑う

哀しみの沸点に咲く白椿

白旗が政治を軽いにのにする

どこまでも白無視なんか気にしない

自然から自然に戻す繭の白

白墨折れる 十七歳の笄

冬の空の澄んだ空気に嘘はない

新世紀テレビの中の初日の出

冬の夜を灯し耽読方丈記

母の手で飲ませてくれる風邪薬

元日の風だほほほ笑みして光る

思慕というには少し軽いフライパン

笑い袋に詰め込んでやる白いまなぎし

十年日記いのちの保証ないままに

未来凶や冬草のなな椅子一つ

除夜の鐘消えたところから新世紀

明日咲く蕾をよつて床の花

無関心のはずが繰り出す初詣で

子期しない年賀状来て葉書買う

富士山も葱の畑も同じ雲

はまゆう川柳会

中後 清史報

今日も無事五体を伸ばす仕舞い風呂

成るよに成ると歩んで五十年

五年後の自分に書いたラブレター

五感まだ確かに生きて今日の幸

半蔵門

満寿蔵

千恵

和子

久子

歌子

義芳

一

郁子

節子

光穂

紫香

武庫坊

芳子

恵子

年代

薰

比ろ志

美也子

しづ子

沙置子

保夫

孝一

太一

生米子

純子

惠美子

あたたかい母を囲んで五目めし

山積み難問抱え五里霧中

仲間入りしたが句作り五里霧中

広めようパラリンピック五色の輪

我が家の五右衛門風呂は文化財

五月晴れ飛行機雲が一を書く

冷静になると周りが見えてくる

周波数合わせてくれる嫁が居る

悪戯も孫なら周りとませる

周囲には心ゆるせる人が居る

周り見て忘れたチャックそつと締め

島めぐり船から拝む那智の滝

周囲からちよつと気になるほめ言葉

患って周遊の旅夢と果て

年の差か尺度がちがう母と娘と

寂しいね年賀状が減つてゆく

百八つ聞いて一年締めくくる

去年より呆けも可愛くなった母

年の暮れ慌てて掃除手抜きする

若い気へカメラは年を見逃さぬ

年輪を問われ未熟が狼狽える

ほたる川柳同好会

田辺正三郎報

つまずいて初心に還る二度三度

初笑い一酒がいけます三姉妹

しめ飾りに先ずお客あり初雀

ポケットに欠伸を入れた初仕事

めでたさも蛇百態の初だより

この歳で初心に帰れとは辛い

修也

公治

比斗志

美佐子

光

登

佳子

てる坊

雅視

苗子

泰作

慶一

国彰

雄造

さだ代

平和

すみれ

サト美

悦子

利ぼん

清史

直次

保子

昭子

ただし

蛭柳

見清

初登庁パソコン持って胸をはる  
初外遊首相いつもの援助グセ  
初孫を壊さぬようにそつと抱く  
丸顔とまたにらめつ初鏡  
愛と憎すべりセツト新世紀  
母さんが全てでないと言つ出会い  
ささくれた母の手すべて物語る  
手のうちの手すべてを見ている余裕  
度胸一番すべてが無かの正念場  
十七歳すべてのように騒がれる  
三世紀生きて天寿を全うし  
母の愛すべてが無私のボランテア  
逆らわず妻をたてればすべてよし  
ご自慢の芋煮えているほっこりと  
味自慢互いに元祖名乗り合い  
寒さには勝てぬ自慢の脚線美  
言いよんで自慢と卑下は紙一重  
グイェット自慢の包丁錆が浮き  
亡き母の自慢の味にたどりつく  
世紀末願いはずれた宝くじ  
文明の予測当らぬ世を願う  
留守電に借り忘れるなど入れておく

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

信男 契子 賢次 陽子 敵子 桂子 久子 久子 久子 久子 雪子 柳童 黒兎 幹治 喜美子 祥風 まみ子 勝 祿骨 須美子 馬洗 正安

春夏秋冬彩り変えて川流る  
もつ一年もつ一年と石の上  
老いて来てこの一年を大切に  
二〇〇一年やっぱり米を研いでいる  
一年の長さ短き胸へ問う  
一年の早さ重ねた年を恋う  
七人の気配が動く初詣で  
梅一輪一気配何かが弾けるぞ  
きなくさい気配何かが弾けるぞ  
ただならぬ気配のなかへ来てしまつ  
上達は望めなくても止められぬ  
待望のチャンスだ脇見などしまい  
福耳に祖母が望みを託してる  
農耕へ望みは捨てぬ雪囲い  
天上を望み浄土ほどの辺り  
カゴメカゴメあなたのおしほ私です  
大望を野心があると疎まれる  
歩かねばかたつむりにも追いつけぬ  
身に合った願いに神も氣を許し  
数の子の一粒づつにある命  
踊る気になつて氣づいた酒の酔い  
住吉の枝に絡んだ凶のクジ  
告知受けそれでも世紀越えました  
小走りへコトコト冬もついでくる  
朝めしがうまいも少し生きられる  
そろそろと思ひながらも長つ尻  
新世紀そろそろ宇宙旅予約

かわはら川柳会

上田

俊路報

比ろ志 比ら志 江美 江美 富喜子 高栄 一笛 朝子 朝子 房子 松煙 いわゑ 哲男 澄子 無祿 義子 靖巳 みつ子 てる 鹿太 春蘭 五月 美代子 求芽 正坊 悦子

そろそろと鍋奉行さま出番時  
そろそろと炉端恋しい茶わん酒  
お見合いのそろそろ返事胸はずむ  
這えば立て立てばそろそろ羽さがす  
旨くてもそろそろ飽きた旬の味  
木枯しを聞いてそろそろ森眠る  
晩学の夢がそろそろ叶いそう  
身を削りはた織る鶴に教えられ  
少年は新聞記事を汚してる  
新年のテレビはつるの大うつし  
茨道されどいつかは糧になる  
鶴一羽おいて枯野が狂い出す  
鶴よりも長生きしたら要介護  
切れそつな紙できつちり鶴を折る  
一日一善されど悪人なりおとこ  
松茸のしろは黙ったままで逝く  
トラブルが起きないように鶴を折る  
神の森松喰い虫は容赦せぬ  
岩穿つ松も二ミリの虫に負け  
人きらいされど独りはさむいさむい  
松の木は枯れる日の丸はあせる  
僕は人は枯れる日もあるさ  
曲げるだけ曲げてめでたい松という  
新車より気楽に乗れる中古車  
暇な主婦新製品にだまされる  
破魔矢買うされど悲しい赤切符  
折鶴を一つ残して孫帰る

倉吉川柳会

松本よしえ報

登生 一薫 余更子 寿子 静子 泰良 俊路 登生 一薫 余更子 寿子 静子 泰良 俊路 登生 一薫 余更子 寿子 静子 泰良 俊路

新年に酒は熱爛じいとばあ  
千羽鶴子供像をあたためる  
満願の折り鶴飛ばす朝の窓  
戦はないされど家庭が崩壊す  
子供等は松ぼっくりでこま作り  
千羽鶴記憶の先に白い指  
初日の出はみ出している孫の筆  
新春も葬儀車が行く会者定難  
やせた身を鶴にあやかり長寿乞う  
新しい恐竜もいる21世紀

横浜あおば川柳会 清水 潮華報

軽快な着メロ響く通夜の席  
イソップの世界で遊ぶ児の寝言  
自分史に強い味方と妻称え  
取りあえず丈夫な娘かと聞いてみる  
びんの蓋老いの力をためされる  
強がりを言いつつ妻についてゆく  
携帯のメールごっこに顔がない  
吹き荒れる風に耐え抜く濡れ落葉  
児と同じ時空の中の桃太郎  
日本の童話が好きな恩返し  
強がりを書いて孤独な影法師  
あなたとのホットラインはベル三度  
留守電に氣どつて入れるメッセージ  
身の安否気遣うテレに時差の壁  
お互いに励ましあって切る電話  
強い子に育てと揚げるコイノボリ  
破れない紙欲しくなる障子貼り

民枝 賀寿恵 ゆり子 紀美子 久子 悠子 よしえ  
和枝 康子 次男  
あらた 広和 裕峰 為佐子 雅子 敏  
絹子 二重子 八重子 嘉信 かづ子 亜希子 笑子  
純子 道子 早智 街湖

ケイタイに心のすき間癒される  
馬鹿力取柄にしてお父さん  
亡養をさせて婚家に追い返す  
休山の散歩僕はトムソーヤ  
なげなせとお話先へ進まない  
人間の世界に飽いて読む童話  
千年後お伽話になった核  
電話口返事出来ない口が  
子守唄代わりに童話聞かせてる  
母子共にグリムに抱かれ夢の中  
セルスの電話へ雑な演技力  
雪折れないと病弱見直され

堺川柳会 河内 月子報

新年は五子八孫と共白髪  
口喧嘩夫に勝つてこはん炊く  
今日の罪時計進めて過去にする  
本心が見えない位置でまくしたて  
行進のどん尻にいる金の卵  
淋しくておなかないばい食べている  
しなやかに午後の人生トラバユ  
時計進めてウサギは油断してしま  
シーズンオフ五大陸など翔び回る  
人許したあとは御飯の味がする  
仕事終え五時から元氣取り戻す  
下心ご馳走並べ友を呼ぶ  
新世紀も変らず世話になるご飯  
がむしやらに前進だった半世紀

政勝 省子 三郎 サト子 鈴木美 和可 良子 徳三 句多留 かず枝 ふみ 潮華 満秋  
春蘭 紀美女 勇太 森子 冬虹 アキ リつえ みつこ ルイ子 千代 さくら 紫 美波 八千代

ITが進む私を置き去りに  
しんがり後は後を見ずに進むだけ  
子沢山ほめる叱るも早口で  
ごはんだけ炊けるも早口で  
豆ごはんほどよい塩は妻の愛  
晩ごはん家で食べると息子から  
停年で今日が最後のお弁当  
皺ひとつございませんととつに古稀  
よく進む手捲き時計をまだ腕に  
早口で叱られみんな聞き流す  
ごはんよとたまには言うてほしいなあ  
世の進歩どこ吹く風のマイペース  
シクラメン豪華に咲いた年始め  
早口と無口のままで共白髪  
信号青盲導犬はゆつくりと  
話また昔に戻り進まない

川柳塔鹿野みか月 土橋 螢報

ワイン酒を棚に並べて下戸でいる  
幻の縄文杉を隠す森  
米事情それから農家減るばかり  
おだやかな死顔にせめて救われる  
大祓い罪を蓄めないようにする  
成人式祓い済ませて焼き鳥屋  
お祓いで罪が消えたと思いきむ  
お祓いがすんで御神酒の列にいる  
地を祓い人をきよめる初吹雪  
おろおろとお祓いうける年女  
二枚舌がとりつく蛇神を祓う

泰子 日の出 舞夢 伽羅 美子 玄也 つつや 哲平 甚一 楓 かりん 深雪 朋月 五月 柳宏子 梓 幸枝 小鹿 弘子 武子 汲香 節子 由多香 きみ子 茂 睦子 隆風

大切に毎日見たい鏡拭く  
 子供等に汚れた鏡見せつける  
 正直な鏡の中で老いている  
 歯目 白髪古希の鏡は御多忙だ  
 スキンケアしても無駄よという鏡  
 美しい頃もあつたという鏡  
 鏡に映してお金を倍にする  
 よく映る鏡は見ないようにする  
 過ぎ去ってゆくも鏡があり反射鏡  
 昭和史の悪夢も消して新世紀  
 蒔いた種子そろそろ芽ぶく新世紀  
 新世紀笑ひ袋をふくらます  
 新世紀たいしたことは望めない  
 一隅に生きて新世紀の雑煮  
 新世紀介護保険の中に生き  
 祓えたまえ清めたまえ十七歳  
 お祓いで頭は坊主らしくなり  
 祓い給え清め給えと酒を飲む  
 死に場所を浄めお祓いしてもらう

久枝 和子 孔美子 和枝 かつ乃 盛桜 芳光 諷人 八重子 実満 くに子 はお 富久江 野草 石花菜 喜与志 完司 蝋

川柳塔まつえ吟社 恒松 町紅報  
 吉報を弾んだ毬が待っていた  
 吉報へ祝う財布が派手になる  
 北風がやつと吉報連れて来た  
 吉報を受けてグラスを二つ出し  
 吉報が耳の底まで弾んでいく  
 吉報へ夢は大きくなっていく  
 冬眠の蛇が余震で眠られぬ  
 新世紀蛇は冬眠切りあげる  
 たたら炉は大蛇のような炎はく  
 ナース脱ぐストッキングは白蛇なる  
 くちなわのごとき黒髪結び上げて  
 藪蛇になるから余計な口出さぬ  
 祈るのはあれもこれもと欲を言う  
 欲捨てることを祈ってばかりいる  
 飾らないことは祈る父の背な  
 合掌しても神様は信じない  
 冬の蝶祈る形で舞っている  
 十七歳祈る気持ちの母がいる  
 ライバルがにつこり開ける福袋  
 小さめの方に福あり福袋  
 故里の匂いがして福袋  
 日本は平和だ億の福袋  
 福袋優しい笑顔詰めからない  
 福袋優しい笑顔詰めである  
 合格の知らせ嬉しい預金帳  
 御神酒呑み嬉しがり屋の天の邪鬼  
 日記にも一句詠み込む嬉しい日

雄々 房子 保子 政子 滋丘 静美 茂美 注湖 文夫 日出子 聡美 多賀子 邦代 小鹿 きみ子 蝋 久枝 幸子 桂子 知恵子 すみこ 煩惱児 秀子 智恵子 たけし 義良 紫晃

嬉しいがメツチャ悔しい銀メダル  
 嬉しくて奈落の縁へ蹴つまずく  
 嬉しくて何はともあれ杓を抜く  
 川柳クラブわたの花 吉村 一風報  
 痛い目を知らぬ子供に旅させる  
 産声の中に豊かな可能性  
 お迎えがきてもまだまだ行けません  
 夢叶え孫も明るく新家庭  
 びびる子に出来るできると暗示かけ  
 可能性にかけてみますと車椅子  
 昇天の煙笑って屋根を越え  
 不幸せ樂しがつる坂を越え  
 糸通し使わず穴を通せます  
 肩抱いて帰る母子のほほえまし  
 新しい風を迎えて新世紀  
 あつい喉もつ一日だ選挙戦  
 あの子なら安心出来る看ってくれる  
 絵道楽定年過ぎてものを言う  
 ひと山を越えてひと山待つ暮らし  
 折り込みのチラシが嵩む十二月  
 可能性まだ捨てきれぬ火種抱く  
 生きていく限り可能な道をとく  
 難物に母は可能な道をとく  
 少子化で希望校への願書書け  
 残暑まだお地蔵さんも汗の盆  
 ひもじさも寒さもなれど喜寿孤独  
 猫の顔可能な限り種を蒔く  
 歩いている夢を見たよと車椅子

太泡 与根一 町紅 一風報 宏至 剛治 ミツ子 道子 君子 春子 一風 幸枝 隆盛 美千子 恭一 奈良司 友甫 正純 朝子 一道 賢子 ますみ トシエ まさと いっふみ 春江 知佐子 美代子

どうにでもなれと熱爛しみわたる  
医者の指示うっかり忘れ看護婦さん  
ただ一人涙知ってる亡母の記  
日記帳ぬすみ見て知る子の心

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

それぞれの指一丸となる拳  
一丸の支えて今日の日を生きる  
大海へ一丸となる雑魚の群れ  
癌告知一丸となる血の絆  
一丸で主張した分肩が凝る  
一丸となつても家は火の車  
鶴の声から集団が引き締まり  
一丸へ母校のタスキ甦る  
一丸に背く私の道がある  
家族こそいざと言う時一丸に  
指揮棒で追われ一丸ベーターペン  
仕切り直し重ね阿吽の息が切れ  
母と子の間乳房が張ってくる  
阿と吽の間に演じ切るドラマ  
阿吽の息一言居士に乱される  
阿吽の形で化石になってゆく夫婦  
夫という阿吽の戦士いる限り  
バッテリーの阿吽の息が生む魔球  
刀匠の阿吽の合った続け打ち  
煮くずれてやつと阿吽になってくる  
内緒話阿吽の仁王聞いてくれ  
歳重ね泡沫の恋なお懲りず  
泡沫の恋イヤリング揺れている

民子  
明  
八寿子  
八寿子  
彌道子

保州  
さち子  
佐代子  
富美子  
健二郎  
豊太  
三喜夫  
君枝  
ダン吉  
よしこ  
あつむ  
英子  
めぐみ  
大輪  
和重  
輝子  
輝子  
精子  
三男  
吞天  
優子  
稚代  
佐一  
紀美代

泡沫の愛知りつくす雪の舞い  
排水口泡沫語る未来の凶  
生きてあるあしたは骨になる命  
ハネムーンで消えた新婚甘い夢  
人生は泡沫茶毘の煙は一筋に  
水泡に帰した策士の茶番劇  
現身の儂き絆抱きしめる

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

暇の出た人形だけれど捨てられぬ  
青い目の人形連れてお嫁入り  
いつまでもお人形さんでもあるまいに  
紅をひくくまだまだ私も女です  
人形になつて言い分聞いている  
人形もいつかは歩く夢を見る  
人形になりたくはないヤジロペエ  
口紅の濃さが秘めた下心  
痛む身をさするが如し春の雨

豊中もくせい川柳会

田中 正坊報

喜寿の顔それなり当てにされてます  
自信のない顔へ好物添えてやり  
人により使い分けする顔を持ち  
不景気に太陽の塔浮かぬ顔  
焼印を押しシンボルで売っている  
学園のシンボルとして楠大樹  
国賓へ富士はやさしい顔をする  
白い鳩高く飛び立て新世紀  
調べたい調べたくない子の机

寿子  
美子  
射月芳  
柳宏子  
千寿子  
鉄治  
和香

かつ子  
聖子  
恵美子  
好栄  
ちよえ  
はるみ  
博利  
清泉  
白汀

疑いが晴れて明るい調べ室  
知り過ぎているから案内できません  
辻褄を合わせる嘘に悩まされ  
マンションの広告多い金曜日  
介護保険否応なしのほつたり  
おせち重売るほどつくって孫を待つ  
ありたい読経にお布施包み替え  
新世紀威張った富士を眺めたい  
鯛焼きの温みと帰る初詣で  
美しいうちに散つとく寒椿  
十円の価値を落語になつかしむ  
輝く月疲れた地球見てござる

川柳塔おとり

原みさを報

今年から嫁も加わる初笑い  
安ものがいまでも指に笑つてる  
年甲斐もなく走つたら腰笑い  
巳の年も笑つて過す夫婦坂  
初恋は今でも胸がキュンとする  
初めての見合い中学生のよう  
初恋は胸の真ん中痛みます  
初春の成人式も荒れる国  
しつかりと組んだ櫓を攻めあぐむ  
しつかりと根付くまで水絶やさない  
結び目はしつかり明日に繋げよう  
しつかりと男結びの雪囲い  
鎮魂のドラマしつかり科白いう  
しつかりと土に爪跡残したい  
携帯という網の目に縛られる

紫香  
骨  
庸佑  
慶子  
高栄  
求芽  
一笛  
ただし  
諷云児  
英子  
喜美子  
メ女

艶子  
邦昭  
一弘  
仁子  
真一  
義弘  
道子  
雅通  
幸次郎  
登章  
宏美  
舍人  
雄々  
黙々  
和子

しつかりと結んだ縁共白髪  
しつかりと石橋叩き生き残る  
親は子にしつかりせよと愛のムチ  
百までの予定ゆつくり日を紡ぐ  
予定より多めに持って旅に出る  
エンマ様僕の予定は何日でしょう  
道草も予定に入れて混仕度  
国祭までの予定が流んでくる  
元旦の予定日呱呱の声あける  
今朝の雪すつかり予定狂わせる  
結婚はまだ空白の予定欄  
今年こそつける予定の出納簿  
予定外出費に追われのし袋  
年末の予定あれこれかどらず  
終点が見える私の予定表

川柳塔打吹

米田

幸子報

面影を偲ぶ写真が若すぎる  
水鳥も岸辺のゴミに鳴いている  
まじまじとみればがっくりする白髪  
麻酔さめ岸を小舟で渡る夢  
花嫁人形に今はてきばき指図され  
菊人形小春日和に勢揃い  
三途の川岸を離れて逝つた母  
まじまじと見れば見るほど器量よし  
古稀近し悟りの岸はまだ遠い朝  
マネキンが裸のままにさむい朝  
釣れぬ日は岸に竿立てふてねする  
マネキンが妻より色気つくつてる

千秋 千秋  
以和万津 以和万津  
小生 小生  
清子 清子  
孝子 孝子  
彰雄 彰雄  
紀子 紀子  
風花 風花  
伝住 伝住  
庸二 庸二  
敦子 敦子  
野草 野草  
富貴子 富貴子  
みさを みさを

面影の無いご先祖の百年忌  
だれひとり向う岸から戻って来ん  
私は岸に上がれぬ白鬼  
人形は目鼻の位置で百面相  
まじまじと見て狐とも手をつなぐ  
岸に寄る空き缶に棲むスガニの子  
母の面影冬の絵皿に盛り忘れぬ  
まじまじと見れば髭あり菩薩様  
湖岸には伝説があり水にこる  
まじまじと種も仕掛けも見ぬかれた  
人形のような女で手が出せぬ  
悲しみが押し寄せてくる冬の岸  
神様の糸で踊って泣く人形  
向う岸望みの椅子が見当らぬ  
携帯がとどかぬ向う岸がよい  
執拗に面影追つてまだ独り  
五十年添つてまじまじ見すじまい

京都塔の会

都倉

求芽報

派手好きは老いのきざし秋の風  
温い秋燃えそごなっている紅葉  
テーパーからの尺八の音に師をしのぶ  
終着駅へそんなに急ぐことはない  
一つの旅に一つの石を友とする  
犬は犬なりに不満を訴える  
価値観の違いでこれ意見され  
十二月例年どおり午前さま  
例にひく昔話がくどすぎる

かつみ かつみ  
石花菜 石花菜  
和歌子 和歌子  
順子 順子  
よしえ よしえ  
睦枝 睦枝  
和枝 和枝  
照彦 照彦  
雄々 雄々  
玲坊 玲坊  
玲泉 玲泉  
博丈 博丈  
芳光 芳光  
克枝 克枝  
やえ やえ  
螢 螢  
節子 節子  
幸子 幸子

例ひいて納得させて論す父  
判例にのつとり人の罪裁く  
実例はここにありますがバカな僕  
吉例の顔見世に憂き捨てにゆく  
ブライドを例えれば捨ててみるこただ  
テーマソング若き昔が燃えてくる  
青天をテーマにしたら雨だった  
これからのテーマ介護と手をつなぐ  
テーマにまつまると失敗談にする  
永遠のテーマはやつぱり嫁姑  
バイブルの魔法に心しずめられ  
年の瀬に魔法の財布はしくなる  
魔法よりドリムジャンボ信じます  
貴方なら素直にかかりたい魔法  
気まぐれな魔法にかかりネオン街  
行き詰まり魔法の杖が欲しいなる  
手品師の種も仕掛けもある魔法  
戦前の子には魔法の夢がある  
媚を売る女の魔法にしびれてる  
気難しい父が魔法によくかかる  
魔法から醒めてパンザイしています

岩美川柳会

石谷美恵子報

大トロの寿司母さんの誕生日  
トロあわびアフリカ産をきつとる  
勢いに乗つたらバブルははじけた  
満天の星にもいやな星がある  
ひたひたと胸に染み入る母の愛  
欲ばりな親で満点取れと言っ

庸佑 庸佑  
満子 満子  
福子 福子  
宏子 宏子  
磯 磯  
高栄 高栄  
波留吉 波留吉  
典子 典子  
柳宏子 柳宏子  
求芽 求芽  
英一 英一  
益子 益子  
輝美 輝美  
芳子 芳子  
メ女 メ女  
美智子 美智子  
百合子 百合子  
豊次 豊次  
吉之助 吉之助  
紫香 紫香  
友照 友照

ちらし寿司赤青黄と春を盛る

勢いは亡ぶものなり彼岸花

二番手がひたひたの鼻の差を狙つ

勢いでもらつた嫁が大当たり

ふところの寒い時にはキツネ寿司

天然のり食べて白髪を黒く染め

勢いであと三年は生きられる

昨日も今日もひたひたと生き延びる

飲み残す薬が棚に満ちている

ひたひたと雑魚には丁度よい水位

やさしさが広がる母のちらし寿司

満ち足りて私だんだん退化する

勢いで増やした田圃持て余す

隙のない女の心信じたい

母さんの寿司です日本一の味

新世紀女まだまだ強くなる

姫様が握るお寿司は食べれない

不意の客くるお寿司はひと走り

負けん気の勢い見せる杖の先

ひたひたと長い影引くサスペンス

結局は寿司買いました誰も留守

手間かけてつくった寿司のひとり箸

堺川柳会(前月号)

河内 月子報

出る杭は打たれるというその通り

打算では続かぬ今日もボランティア

家一步出れば忘れる妻も子も

計算も打算もあつて成功し

純白のドレス打算を寄せつけず

陸子

克枝

一瑤

圭一郎

重忠

孝男

完司

螢

喬水

静生

裕子

節子

公乃

多哥由

一京

季芳

和歌子

かつみ

きみ子

寛

徹

美恵子

春蘭

日の出

さくら

舞夢

五月

言うつもりないのにお世辞ヒョイと出る

そのかわりしっかり打っている父なし子

水際でもんどり打っている打算

ソプラで嫉妬子犬が手に負えぬ

相談はしちやいませんがテレパシー

住みやすいこの街からは出られない

揃て行こ七福神の寺めぐり

口止めがばろり話の中に出る

方言を丸出しにして友と会う

淋しんぼに戻る酒宴の帰り道

即答はしないでいいと照れながら

素気なくしててもわかる手の温み

そろばんをしっかりはじく手の白さ

不安だが出たと勝負かけてみる

留守電にしようっかり出る電話

そのない仕草で美女の手を握り

パッシングされて出る杭強くなり

表へ出る言うて裏から逃げました

訳などとはどうにでもつけ飲む宴

そうかいな知らんかったと手当出し

ふみ出す一步靴のかたちは古いまま

代議士に出て鈍色になる女

相続へ姉妹はつきり敵味方

こっそりと出たら夜逃げと間違われ

顔に出る貴方の蛇はとりやすい

川柳塔きやらぼく

願ひ事箇条書して初詣で

伽羅

深雪

冬虹

みつこ

千代

紀美女

りつえ

勇太

梓

つづや

五月

八千代

泰子

玄也

なぎさ

かりん

半銭

哲平

甚一

朋月

美子

文

楓

美代子

天笑

玲子

すみゑ

旧友の賀状むかしのままで読み終える

隣まできてる老人会の誘惑

最後まで心騒ぎのした曆

初詣でデコマンだけが長い列

欲さたり捨てて肩の荷軽くなる

神だのみあなたもですか初詣で

末吉のみくじ若木に結ぶ春

白鳳の卑弥呼を偲ぶ湯に浸り

正月が来てても世の中揺れている

大きな揺れのかなで私は動けない

そのうちに千羽の鶴も翔ぶだろう

元旦に揃わぬ顔の孫想い

初春に子供くれたエネルギー

新世紀寿ぐ蛇の出番だよ

枯菊をもやす逢いたい人ばかり

あの雲もあの樹も新世紀なのだ

新年はむかし話に花が咲き

あたたかい正月人間やめられぬ

翠洋会

穴吹

尚士報

古いの水晶玉を信じよか

玉串を供え日和の上棟式

玉のこしガラスの靴がはきました

答弁は玉虫色で逃げ切られ

子沢山光らぬ玉が多すぎる

新世紀玉虫色の夢を抱く

勾玉が古代のロマン語り出す

くす玉が割れて明るく新世紀

ラムネ玉振って未来を呑んでいる

ふみ

日枝子

天雀

千春

寿々子

てい子

瑞枝

八重子

麗

田鶴

初枝

春枝

恵子

ゆき

千代

晶子

やえ

照子

絹子

千梢

さと美

恭昌

富子

叔子

舞夢

志華子

玉の輿乗ったつもりが泥の舟  
ふところがぬくなりましたお年玉  
生かされる限りひらけぬ玉手箱  
注射より効いた二合の玉子酒  
ビー玉の輝く霸氣に負けている  
風雪に耐えて舞い込む福の神  
安らぎをくれるあなただけの神  
福袋夫婦喧嘩のもととなる  
神殿の裏に落ちてた残り福  
眩しくて目が合いませんね福の神  
七福神飾って今年ひとりぼち  
福の神にもある表裏の顔  
老い二人寄り添うように福寿草  
幸福が逃げないように蝶結び  
福笹を買って見初めた福娘  
祝盃をライバル注ぎにくる不気味  
盃におもかげ浮かぶ初句会  
盃の底に浮かんだ医者顔

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

会美 東雲 宣司 靖巳 澄子 久峰 日の出 真理子 伽羅 春 喜美子 蛙 正坊 楓 榊 千枝子 正雄 義 尚士 絢子 りつえ 一壺 桂武 利武 滝し 洞庵 一知 美代子

幸運を掴んだ指ではじかれる  
掴むもの掴むと姿消えている  
猫の恋うっとり見てる独り者  
うっとりへ妻が邪険に袖を引く  
うっとりとしてうっかりと妻忘れ  
うつりと眺めたキムタクパパになる  
うつりと零の数だけ読んでいる  
うつりと小春日和に詩を吟じ  
核ゼロのその日うっとりする地球  
うつりと世紀を送るルミナリエ  
あざやかな夕日うっとり漕ぐ手止め  
資産分け身内俄かに増えてくる  
大臣の資産公開信じかね  
何よりの資産元氣なこのからだ  
資産家に世継ぎが生まれない皮肉  
資産分けする財もなく揉めもなし  
遺言に資産は全部妻にやる  
少しある資産を抱いて揺れる老い  
資産家の昔を語る鬼瓦  
資産家の門が冷たい大理石  
ご先祖へ心残して村を出る

富柳会

池

森子報

明子 重人 敦子 かつみ 専平 久仁子 満寿藏 美喜 ダン吉 みつこ 庸佑 僕 昭平 志洋 吐来 四三郎 さとみ 昇 聡 泰子

追い風に男男をとり戻す  
一生をかけて男の華になる  
命ありて夕陽は咳唾珠を成す  
逆風を逆手にとった立志伝  
黙禱の終りを咳が待っていた  
追い風に戻りそこねたブーメラン  
淋しさを誇張するように洩れる咳  
永遠に地球を愛し美しく  
ピンクの口からこわい言葉聞く  
アドリアが生まれドラマは活気づく  
追い風にためらい傷が痛みだす  
秋風や襟のフリルの華やかに  
出席と書いて妻の赤い服  
徒競走急ぐレンズが蓋のまま  
混沌の世に追い風は思案顔  
追い風によろよろ辿り着く花野  
追い風が止んだ巷は冬景色  
急がないけれど母待つ星の国  
渡ってはならない橋をまた渡る  
おうつらに吹く風太い絆持つ  
咳二つ入れて休みと電話する  
俺だけに冬ばつかりがついてくる  
炎の橋をまっすぐ渡る炎の途  
密封をしたまま二〇〇〇年の冬

川柳高知

川竹

松風報

花梢 扶美代 亮年 満秋 萩乃 東雲 宏 ひろこ 信子 春蘭 一夫 勇 誠 紅紫朗 三和子 一慧 みき 信博 義清 たかし 欣之 森子 幸 孝雄

車一台持つて人並だと思つ  
お隣の額を聞いてる赤い羽根  
歩きたい走つてみたい車椅子  
人並の暮しつ戻りつした記憶  
この橋を行きつ戻りつした記憶  
半世紀父の記憶が遠くなり  
原爆の記憶が風化する怖さ  
里の香の記憶が哀し風見鶏  
幼児期の記憶へ母が欲しかった  
戦争の記憶の中に飢えがある  
苦い茶も正座も我慢菓子が出る  
焼香へ正座の足が動かない  
足音へ正座し直す女客  
嫁にやる父は無骨な正座する  
神妙に正座で小言聞く子供

川柳ねやがわ 江口

佳風 佳功 圭風 快風 京子 朱坊 哲史 暖風 典雄 三郎 良雄 美々 訓生 日出子 あやめ 勇太郎 庸佑 故秋 光子 弘一 かすみ 冬葉 朝子 利昭 修

紙一重ほくも天才かも知れぬ  
天才ではあるが情緒不安定  
赤ちゃん人は人をなごます天才だ  
並外れた嗅覚妻が怖くなる  
天才に遠いわが子が頼もしい  
天才の未来待つてた青アセント  
神童と言われ少年院の闇  
他人事になれば欠点すぐ見抜け  
結婚をゴールと思つたのは不覚  
ハードルを幾つ越えたら着くゴール  
指一本高だかと上げゴールイン  
ゴールまでの苦労話は伏せて置く  
ゴール寸前まわりに温かい風が吹く  
ゴールしか見えぬ男の乱視鏡  
カレンター薄くなるほど燃えてくる  
土壇場の知恵一筋の光さす  
ぬくもりが伝わる老母からの電話  
冬木立母をゆすつているようだ

川柳塔みちのく 小寺 花峯報

たもつ 雅文 忠央 仁清 時弘 度 洋 柳宏子 磯 一風 波留吉 ルイ子 良知 博泉 高栄 賢子 恵子 凡々子 岳水 妙子 ヒサ子 順風 龍人 慕情 銀波 ふさゑ

戦争が終らぬ悲劇孤兒も老い  
過信した冷蔵庫から腐敗臭  
致死量を抱いたおんなが離さない  
切れるという感覚繫く糸がない  
じやっば汁夜叉も仏も丸くなり  
じやっば汁湯気の向こうに亡母の影  
望郷のじよんがら節とじやっば汁  
腐葉土で秋を待たれる菊である  
湯豆腐に荒れた胃袋癒される

旅立ちへ母の慈愛のじやっば汁  
じやっば汁の輪の中にある福の神  
致死量を秘めたてのひらにこやかに  
ジャッパ汁冬の津軽を詩にする  
友情を売つた古傷膿んでくる  
大衆の暖簾に染みつくじやっば汁  
じやっば汁津軽の冬を演出す  
じやっば汁ふつ父を待つている  
膿を出す言葉のメスに棘がある

花匠 雅城 ツネ 井蛙 黙人 花峯 一花 五楽庵 高田美代子報 史郎 昌子 一筒 恒雄 栄一 利武 葉 春蘭 志洋 重人 かつみ 一知 美代子 敦子 よしえ 悦子

人間らしく暮らしています駄目同士  
人の字の支える側にある温み  
人間に疲れて被る鬼の面  
人ひとり許して赤い薔薇が咲く  
人様の子ならやんわり叱れるが  
寒い日はやんわり温い色を着る  
やんわりと諭されました負けました  
やんわりと葉草煮立て魔女になる  
やんわりと包むと頑固折れてくる  
先頭に立つとやんわり叩かれる  
やんわりと打たれた釘が突き刺さる  
達筆の白寿見習い賀状書く

うぶみ川柳会

上田 宣子報

白熱戦応援席がもめてきた  
白熱と白熱日の丸天をつく  
6Bも袖触れあえるパラダイス  
もののけの居そうな穴がやはりある  
白熱球一つ一人の長い夜  
嫌われる舌一吐も身の内だ  
浅学がやはり出ている原稿紙  
友だちもやはり長靴はいている  
白熱の嵐がドラマつくりだす  
スクープを着るにペンの舌鼓  
やはりそうかそうだったのかなあるほど  
舌ひとつまぐ回せば角も取れ  
水星の息と白熱したくなる  
舌先が失敗ばかり繰返し  
あの山もやはり売られて木が伐られ

桂子 マサ子 鐘造 大八 和樹 瑠美子 扶美代 終一 昭子 アキ 絹歌 雅枝 天雀 一枝 登美枝 葉士人 ユリ子 良男 ひろこ 健一 黙光 あづま 芳江 洋子 華子 天人

毒舌を浴びて猫までそろり逃げ  
白熱のページの裏の火吹き竹

くにお 宣子

ローズ川柳会(前月分)

山崎 君子報

ハードルの前で直振るねこじやらし  
善男善女生きてるあかしの寺参り  
一聞けば十を悟れと親の無理  
ハードルは気にせず今はありのまま  
ハードルを倒す勇気も時に持ち  
転ばぬようまずはゆるゆるの新世紀

ミサヲ キク子 みつ子 藍 哲子

## 大阪造幣局桜の通り抜け川柳

### 投句復活

西田 柳宏子

平成10年4月10日、恒例の通り抜けが始  
まったが、私達川柳家は口惜しい、淋しい  
掲示に暗然とした。「投句箱は廃止」。

俳句は事前に全国大会を催し、入選句が  
麗々しく木札で掲示されていた。早速総務  
課へ行ったが後の祭り、当時の局長が俳人  
協会中堅の選者で、川柳人が局内に居な  
かったのも不利になったようだ。

早速各句会、柳社に呼びかけて復活運動  
を展開したが成果は上がらず、句会や大会  
へ出席して署名をお願いしたが、盛り上が  
りは今一つだった。

平成10、11年、毎月のように造幣局を訪

一病を宥めすかして日向ぼ  
来年も生きてるつもりバーゲンへ  
震災を生き抜いて会う新世紀  
がむしやらにハードル越えた若かった  
ハードルを気概で越した日もあった  
字余りの余生を如何に生き抜くか  
ワntenポおくれて生きることにする  
あといくつハードル越える老いの坂  
花とともにほらほらと生きている  
ハードルをとんでうれいれい日本晴

トミエ 貴代子 まさお 澄子 いわゑ 武庫坊 年子 君代 花子 笑女

れ、日川協会長も行かれたが徒勞であった。  
12年の通り抜け後、新総務課長菅原純氏の  
川柳、俳句へのご理解で、「13年には何とか  
したい」との嬉しい返事を8月に頂いた。  
10日日川協会長の再度の来訪もあり、12月  
7日、本田智彦氏と私は、笑顔の菅原課長  
から、「13年の通り抜けから復活します」と  
力強い言葉をもらった。

「川柳の側から何かお手伝いを」と私が  
尋ねると、即座に「投句箱設置も、投句用  
紙も、あとの入選句の短冊も書道部で書か  
せます」との事。選者については今後、相  
談に応じるつもりでいる。

## 言葉は生きもの

吐田公一

さきの川柳塔二月号の初歩教室で「川柳は国語教育の場ではない」と私は述べたのであるが、このことは言葉について多少の誤用はあっても、読めば何とかその句意が分るというのであれば、これを容認してもよいのではあるまいかという気持からと、これから川柳を始めようとなさる熟年の方々に、今更ながら文法の誤りだの、送り仮名の誤用などの些細なことは、選者の方で寛容に扱うことが必要という配慮から述べたものである。

で、川柳塔正月号の「ひとこと」欄で述べておられる「誤用」については、私として納得がいかないので筆を取った。殊に「初歩の方々」に川柳を楽しんでいただくと思う趣旨からは、ご寄稿の方には申し訳ないが、少々私見を述べさせてもらうことにする。

夫をつま・女をひと・彩をいろなどと辞典にない読み方を誤用しているのは川柳界だけ

だろうか、と述べておられる点についてだが、演歌集などにも一流作詞家が「長崎の女」「大阪の女」また「なみだの操」では他人をひとと各々ルビ打ちで書いておられる。このよつな例は呼吸・運命など枚挙に遑がないほどある。

また夫をつまと称した事実は万葉集の中にも出ている（広辞苑）。この言葉は本来伴侶の一方を呼称するものとして用いられた言葉であり、男女どちらにも用いられるもので、現代にも詩歌などでは活用されているようだ。

言葉というのはその時代を反映するものであり、それだけに「生きもの」として変遷を遂げていくものであることもまた否めない。例えば「茶髪」や「カラオケ」という言葉はひと昔ふた昔前には辞典にも載っていないかつたのであるが、現在の辞典（広辞苑）には採り上げられている。やがてガンクロナなる言葉も公認（？）されて辞典入りするようになるのではあるまいか。

かてて加えて、逆に今では死語と言えるような語も辞典にはある。奉公（奉公人・奉公袋等）伸子簾・針山、死語に近い語として蚊帳などが挙げられるが、これは辞典が持つ宿命（古典や文学を繙く上からも必要なものと

して）でありやむを得ない。

最近の若者言葉の中には省略語が多く、これが時々新聞にも載り、私としては面喰うことがある。また俗にいう「ら抜き」言葉なども承知の通り。これらの言葉は即川柳に採り入れよと言おうとしているのではない。だが前述のように言葉はその時代を反映して生きていくものである限り、これを無視して川柳だけが存在できるものでもないこともまた事実である。

なお、ルビ（ふりがな）打ちについてひとこと言わせてもらえば、このことを極端に嫌われる選者がおられるようだが、選者だからと言ってすべての言葉を知っているわけでもないし、特異な言葉遣い（ここでは漢字によるもの）にまで精通されているものでもないと思う。そうしたことを考えて、ルビ打ちした句だからと言って「没」にすることは厳に慎まなければならないと思う。ただ注意すべきは自分勝手な読みではなく、慣用化された言葉へのルビ打ちが必要である。

要するに川柳はその詠まれている句意（内容）が如何にそれを読んだ人に感動を与え、共感を呼び、私達の人生の糧になるかが大切なのではないだろうか。

# 第六回 時計台ビール川柳八選句発表

「酔う」

主 川柳塔社  
幹 幹

河内天笑 選

時計台ビールの味や新世紀  
ナイトキヤツプ楽しい夢をみるために  
酔うほどに夢が大きくなつてくる  
俺にだけ回る地球だ酔っている  
イヤホーン一人酔ってるビートルズ  
婆ちゃんがほっこり酔うた初節句  
居酒屋の小銭も少し酔っている  
地ビールに宗旨変えした酔い心地  
酒に酔いさくらに酔って手を繋ぐ  
酔うほどに背中高倉健になり  
ほろ酔いに花の香りが心地よい  
うわばみが一合で酔う友の通夜  
肩の荷を一つおろした父の酔い  
ほろ酔いの女に少し気を許し  
酔うとまた昔の鬼に逢いたがる  
妻に似たホステスが来て酔いが覚め  
空きカンが平和に酔った夢語り  
地ビールに酔って土着の和に入る  
人間に酔うてる観光地の仏  
酔って寝る父の心が解りかけ

準特選

特選

いい酒だ妻が天女に見えてきた  
串の数確かめながら酔うている  
飲み屋から月がフラフラ尾いてくる

金	八	藤	福	海	沖	秋	津	旭	岡	松	石	阿	函	日	砂	青	松	知	雅	富	江
沢	尾	沢	岡	南	幌	田	久	川	山	戸	巻	南	館	野	川	森	戸	立	内	田	戸
河	入	妹	池	三	神	山	中	越	石	播	仁	野	田	本	中	秋	中	藤	赤	神	神
島	口	尾	田	宅	田	上	村	尾	井	本	井	崎	島	山	川	山	畑	林	崎	田	田
清	と	安	茂	保	千	敏	充	一	ひ	益	信	麗	世	四	裕	二	裕	正	陽	陽	陽
史	み	子	代	州	映	夫	一	男	さ	雄	子	舟	四	朗	二	子	二	則	子	子	子

春季「新作」 13年4月末×切  
夏季「そろそろ」 13年7月末×切  
川柳塔社名誉主幹 橋高薫風監修

## ●応募要領

官製ハガキに1句  
(何枚でも可)  
郵便番号・住所・氏名  
年齢・電話番号を記載  
の上、時計台ビール宛  
お送り下さい

## ●川柳応募者に限り2割引!!

1ケース ¥3,000を2,400円  
応募はがきの表面でご注文下さい

〒060-0051 INCE1998  
札幌市中央区南一条東7丁目15-16



時計台ビール株式会社

HP <http://www.tokeidaibier.co.jp/>

E-mail [info@tokeidaibier.co.jp/](mailto:info@tokeidaibier.co.jp/)



# 柳界展望

てくる

澤田 和重

へたちはな賞

③雑炊にすればおいしくなる家族  
榎原 公子

〈課題吟賞〉

①開くのは私新世紀の扉

牛尾 緑良

★川柳塔なら平成12年年間秀句賞は、御園孝子さんに決定。

★川柳塔わかやま吟社は、平成12年度各賞を発表。

本社関係者は次のとおり。

○印内の数字は順位。

〈葵水賞〉

①四コマで完成しないから

余生 牛尾 緑良

②次の日の虹を見たさに生

きている 堀 富美子

③福袋きつとジョークが入

れてある 川上 大輪

〈おあい賞〉

①愛してるなど一度も聞か

ず共白髪 坂部紀久子

②でしゃばりをたしなめて

いる霞草 福本 英子

③毒舌に慣れて親しみ湧い

## 新同人紹介

川 口 信 子  
薫風・柳安子・朝子・いつふみ推薦

牧 野 芳 光  
（米）幸子・勲節子・由多香推薦

久 保 田 千 代  
薫風・紫香・いわゑ・みつ子・義子推薦

木 村 正 剛  
薫風・よつじ・まさよ・汀推薦

★川柳カレンダー第13回全

国川柳大会 締切り〓平成13年3月31日 選句と表彰

〓上位103名には各々記念品を贈呈・努力賞120名・入選作は上位85%までで、カレンダーに掲載。投句料〓無

料 発表〓平成14年『川柳カレンダー』誌上 選者〓

磯野いさむ・橘高薫風・森中恵美子ほか 投句先〓

町田市金井4-1-16 日本伝統美保存会 全国川柳大会事務局宛 投句方法〓

ハガキ一人一枚（二重投句は失格）二句以内（漢字に読み仮名をつける）郵便番号・電話番号・住所・氏名・性別・年齢・職業を明記の

勝山会館で葬儀が行われ、岳人理事長はじめ柳友多数がお見送りました。

市）は1月19日肝臓癌のため死亡。行年91歳。翌20日

▼計 報▲

■金井文秋氏（参与・大阪市）は1月19日肝臓癌のため死亡。行年91歳。翌20日

こと。名譽会長坂本一胡

会長竹本瓢太郎 主催〓日

下段10行目、仲直りした引きかえす P140（柳界展望）

上段16行目、清水玲子↓清

1月号〓P62（水煙抄） 川玲子

句会名	日時と題	会場と投句先
高槻川柳 サークル 卯の花	15日(木)正午から きつと・抜く・キャリア ゆきずり・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
城北 川柳会	17日(土)午後1時から はんやり・花・やりとり・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川柳会 梨花	17日(土)午後1時から 弥・絵巻・寓話・はんなり・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター 1F会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮木方 坂田和歌子
岸和田 川柳会	17日(土)午後1時半から 姿・責任・相場・大工	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川柳 ねやがわ	18日(日)正午から 反抗・学校・刺激・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	18日(日)午後1時半から 卒業・ふわふわ・すすく 自由吟	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	19日(月)午後1時から 辞典・ゲーム・戻す・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
川柳クラブ わたの花	23日(金)午前10時から 庭・子供・絵手紙	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	24日(土)午後6時から ヒーロー・果物・介護・道	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市民 川柳会	25日(日)午後1時から 同居・縁・ネット・「納得」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	25日(日)午後1時から 予定日・ポイ捨て・いいえ	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都 塔の会	26日(月)午後1時から 世・……ながら・一存	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔 みぞくち	26日(月)午後7時半から さくら・内臓・雑詠	神奈備会館 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	28日(水)午後6時から 流浪・オペラ・沸かす・歓喜	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区元堀町15-18 寺井東雲

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

### 3月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　　ら	1日(木)午後1時から 偶然・皿・触る	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼崎 いくしま	2日(金)午後1時から ハードル・青・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
倉吉 川柳会	3日(土)午後1時から 雀・ふるさと・過ごす	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
富柳会	3日(土)午後1時から 一匹・売る・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川柳塔 みちのく	3日(土)午後4時から ゴミ・やわらかい・唸る	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川柳塔 唐津支部	4日(日)午後1時半から ギャグ・うかうか・運ぶ	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13 仁部四郎
堺川柳会	8日(木)午後1時から 揺れる・こころ・りくつ	堺市総合福祉会館 3F ラウンジ 南海高野線堺東駅西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 打　　吹	10日(土)午後1時から スリル・性・互角	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川柳塔 まつえ	10日(土)午後1時半から 芽・人形・招待	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
八尾市民 川柳会	10日(土)午後6時から 島・コップ・土産・輝く	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 わかやま	11日(日)午後1時から 聞き役・車座・欠点・やじろべえ	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	12日(月)午後1時から 卒業・珈琲・けじめ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川柳会 同好会	13日(火)午後1時から 生きる・税金・ちらほら	豊中市立登池公民館 阪急・モノレール登池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼崎 尾浜 川柳会	13日(火)午後1時半から 友情・風・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑥番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太

# 編集後記

一般3039名、小中学生3660名、つまり小中学生の応募の方が多いのである。一昨年の国民文化祭・

○蠟梅にはじまり、様々な品種を順々に楽しんだ梅も終りが近づき、本格的な春がすぐそこまで来ている。

○先日、世話役をしている小句会(サークル檸檬)で、大阪城梅林へ吟行を試みた。当日は兼題はなしとし、囀目吟三句提出とした。梅を睨んでしきりにメモっているグループを見かけたが、こちらは俳人らしい。どんな句が出来たのか、ちょっと気になる。我々柳人は無駄口を叩きながら、もっぱら人間ウォッチングで、句のネタ拾いをする。一さ

て、当日どんな名句が出来たかは内緒。

○一月号P142国民文化祭・ひろしま2000(11月4日)の記事で、事前投句者数を一瞥になったと思う。

○私の経験に照らせば、小学校五、六年担任の先生が、特に作文と詩に力を入れて指導して下さったことが、今日の川柳に繋がったのだと信じている。今回の投句数も、そうした熱心な指導者があつての事だろう。

○俳句の催しについては不明だが、「現代学生百人一首」(短歌)の応募は69486首あつたそうだ。

○けれど気を落すことはない。私が川柳に移つたように、この若者達を川柳に引張ればよろしい。(ふ)

## 川柳との出会い

退職して回りを見ていると、私の読む地方紙に毎週短歌、俳句、川柳の文芸欄が載る。その川柳欄に叔父や先輩の句が載っていた。凝視して読み私とも思い立ち、近くの公民館川柳教室へ入会して川柳の七を始めた。そのうち自分の句が新聞柳壇で選ばれ活字になつたときは感激し大変嬉しかった。若い頃から詩を作っていた自由

律が川柳に興味を呼び、今川柳の虜になつている。毎月二つの句会に出席、本誌にも投句して一喜一憂している。そしてペンを持って川柳の森の中をうろろろ歩く。このうろろろろが句づくりの楽しい一時である。当分、この趣味が私を離してくれそうもない。

川柳を始めた頃の一句、「もつ十年若かつたらと思ふ趣味」(小川 注湖)

一台は家族用、もう一台は私専用。車は乗れませんがやら買おうと言つてくれませんが有難く断りました。何ぞ隠そう私はメカ音痴、複雑怪奇なキカイの類は願ひ下げにしたいのです。

○折角自由の身になつたのに、なにが悲しくてケータイに縛られんならんねん。なんて言いつつ利便性には脱帽です。ファックスもケータイも持たせようとして私に持たせようとしています。

○退職の記念に、子供たちへきかそれが問題。(朱)

電話もビデオもないはず。ただし普通の電話だけは二台つけてあります。

私は運転免許を持っていません。ファックスも携帯

もインターネットも時代の最先端の情報に採まれる日々でした。

私は運動免許を持っていません。ファックスも携帯もビデオもないはず。ただし普通の電話だけは二台つけてあります。

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「 発表（5月号）

地名

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



## 作品募集

5月号発表(3月15日締切)

川柳塔(8句)	河内天笑選
水煙抄(8句)	板尾岳人選
愛染帖(3句)	波多野五楽庵選
茴香の花(3句)	西出楓楽選
「ギヤグ」	平田実男選
「うかうか」	神原文選
「運ぶ」	相馬一花選
吐田公一担当	

6月号  
課題吟「ゲーム」「線」「それから」  
初歩教室「さらり」

## 本社3月句会

とき 3月7日(水)午後5時半  
ところ アウィーナ大坂 4階  
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441  
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「ロマンス」  
藤田泰子選

「紅」  
神夏磯典子選

「笛」  
大内朝子選

「並ぶ」  
桜井千秀選

「達人」  
河内天笑選

席題 1題 当日発表(各題2句以内)  
会費 1000円 投句料 500円

## 本社4月句会 7日(土)予定

兼題 「カタログ」「なぜ」「地図」「惑う」「見事」

## 夜市川柳募集

第10回「掃除」 天根夢草選  
ハガキに3句 3月末締切  
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3  
河内天笑方 堺川柳会

## 「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
  - (2)愛染帖・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
  - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
  - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 六百元(送料76円)

半年分 四千元(送料共)  
一年分 七千九百元(同)

二〇一一年(平成二十三年)三月一日発行

編集兼 河内権治

発行人 美研アクト

印刷所 大和市阿倍野区三町二丁目一〇一六

〒545-0005 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-1691 四番

振替〇〇九八〇一五二三三六八番

# 全日本川柳誌上大会

## 第25回 全日本川柳2001年新潟川柳大会のご案内

課題と選者（各題2句・連記）

- 「道」 西谷 東山 泉 比呂史
- 「溶ける」 西来 みわ 兵頭まもる
- 「客」 福岡 竜雄 吉岡 茂緒
- 「トリック」 濱野 奇童 平井 吾風
- 「展望」 本庄 快哉 西出 楓楽

### 第二次選者

- 仲川たけし 磯野いさむ 橋高 薫風
- 斎藤 大雄 吉岡 龍城

参加費 2000円

締切 平成13年3月10日（土）  
発表・表彰 平成13年6月10日（日）

第25回全日本川柳新潟大会

参加方法 所定用紙に各題2句と雑詠1句  
を書き、参加費と共に左記へ

（用紙は請求くだされば送ります）

大阪市北区天神橋二丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話 (06) 6352-2210  
FAX (06) 6352-2433

日時／平成十三年六月十日（日）午前十時  
会場／リューとびあ（新潟市市民芸術文化会館）

〒51-813 新潟市一番町通三丁目  
TEL 〇二五（二二四）五六一一（代）

交通機関（別紙交通案内図参照）  
JR新潟駅から車で八分  
徒歩七分・白山公園前下車徒歩三分程  
宿題・第一部（事前投句・四月十五日締切）

「澄む」 千葉 津田 運選  
「跳ねる」 広島 石原 一郎選  
「チユリリップ」 新潟 山倉 洋子選  
3.5×18cmの句箋一枚に一句宛記入、各題2句  
無記名、封筒に住所・氏名明記、投句料、〇〇〇円  
（定額小為替現金書留）同封して左記宛郵送のこと。  
投句先 〒51-813 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-1  
ステップイン南森町七〇二  
（全日本川柳協会大会係 宛）  
TEL 〇六（六三三）二二二〇  
FAX 〇六（六三五）二四三三  
〇〇九七〇一九三三五

宿題・第二部（当日投句・十一時十分締切）  
「ニューリーダー」 北海道 辻 暁史選  
「二歩」 兵庫 東 比呂史選  
「柳」 九州 外山あきら 選

### 第二次選者

仲川たけし 吉岡龍城・今川乱魚・磯野いさむ・  
大野風柳・橋高薫風・藤沢岳豊

会費／四〇〇〇円（SL弁当、お土産足）  
表彰／①文部大臣奨励賞 ②参議院議長賞  
③川柳大賞 ④大会賞

※当日、21世紀に向けての「川柳サミット」を開催  
いたしますのでご期待ください。

前夜祭・宿泊・観光ご案内  
前夜祭 平成十三年六月九日（土）午後六時  
会場 新潟グランドホテル

〒51-813 新潟市下大川前通三丁目三三〇  
TEL 〇二五（二二八）六一一一（代）  
会費 八、〇〇〇円（新潟食の陣・酒の陣）

宿泊 新潟グランドホテル・万代シルバードホテル・  
新潟東急イン・新潟東映ホテル・イタリヤ軒  
いずれもシングルコース。夫婦はツインを用意  
宿泊費 一人七、五〇〇円（泊朝食付）但し税別  
宿泊ホテルについては事務局で決めさせていただきます。  
※事前にパンフレットを送りお知らせします。

観光 ①コース／平成十三年六月九日（土）十四時～十七時  
・新潟市内観光バス・費用三、〇〇〇円  
②コース／平成十三年六月十一日（日）九時～十六時  
三十分（新潟駆着）  
・豪農の館と阿賀野川ライン舟下り  
費用八、〇〇〇円

③コース／平成十三年六月十一日（日）十二時（祝）  
・依佐観光周遊コース一泊二日（新潟駆着十六時）  
費用三三、五〇〇円  
右の前夜祭、宿泊、観光の申込み締切は四月  
十五日必着です。  
別紙申込み書に内容記入のうえ、合計金額を  
郵便振替口座へご入金ください。  
※申込み先（お問合わせ先）  
〒51-813 新潟市旭町通り二七三九一六  
白勢朝太郎 方  
日川協新潟大会事務局 宛  
TEL・FAX 〇二五（二二八）八八七五

※送金先 郵便振替口座 〇〇五〇〇一六八二六九

### ※送金先

TEL・FAX 〇二五（二二八）八八七五

（全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ  
全日本川柳新潟大会実行委員会  
大日本川柳協会 大野風柳  
〒51-813 新潟市津市美幸町三十四一六  
TEL 〇二五（二二二）二五一七  
FAX 〇二五（二二三）二四七〇

〒51-813 新潟市津市美幸町三十四一六  
TEL 〇二五（二二二）二五一七  
FAX 〇二五（二二三）二四七〇